昭和36年10月1日発行（毎月1回1日発行・第13巻第10号）昭和24年2月3日第3種郵便物認可　昭和34年12月11日国鉄東局特別扱承認雑誌第692号

月刊 キリスト



10

作品集 1

定価 200 円

評論

小説

テレビ・ドラマ

発行所 たねの会
発売所 教文館
東京都中央区銀座四ノ二
振替東京一一三五七

肺

結核直接治療は
なぜ効果があるか！

注目すべき特許
岩井式油脂吸入機

外傷は直接薬品を塗布すれば直ぐ治るのと同様、肺結核も薬物（ゴマカプリン酸）を一粍の一万分の一の極微粒子として病巣肺深部・空洞まで呼吸とともに吸入し直接治療するため効果の速いのは当然です。

文献の要る方は郵券一〇円入れて御申込み下さい。

横浜市神奈川区斎藤分町一五八
電話（49）一五二四

岩井式油脂吸入機株式会社
横浜市神奈川区旭ケ丘六〇ノ十二
電話（49）三四二一

岩井油脂物療研究所
所長医学博士　田沼息正
発明者　岩井良平
道順＝東横線反町下車松本消防署坂上、
横浜駅西口よりバス31にて栗田谷下車

偶像への挑戦

—古代イスラエルの歴史—

ハリーM・オーリンスキー

小林正之訳

旧約聖書に基づいて、古代イスラエルの興味ある姿を、歴史的にかつ信仰的にえがき出した貴重な文献。「再建のイスラエル」につづいて放つ世界的名著。

B6判・二一〇頁・四〇〇円

僕のかたち

J・マカイ博士説教集

ジョン・マカイ

小原慧子・渡善子共訳

真に「僕」として生きるキリスト者の生活とはいかなるものであるか。イエスにならって生きることを説く名説教集。教職者に、求道者に、信徒に絶好の伴侶。

新書判・八八頁・一二〇円

現代の旧約聖書研究概観

R・N・ワイブレイ

村上達夫訳

従来、研究することが困難であった旧約聖書学の発展経路は、本書の刊行によって詳細に解明せられた。我国で初めて刊行された、教職、神学生向き好著。

A5判・二七六頁・三〇〇円

内村鑑三聖書注解全集　**全十七巻**

編集・解説　山本泰次郎

第十五回配本　好評発売中！

第十五巻　ガリラヤの道・十字架の道

B6判・三〇六頁・四二〇円

〈第十六回九月配本〉**第十六巻**

ロマ書の研究（上）

〈第十七回十月配本〉**第十七巻**

ロマ書の研究（下）総索引

各巻とも送料・都内五〇円　地方九〇円

東京都中央区銀座4－2　**教文館**　振替口座　東京11357



表紙・藤城清治　カット・山中春雄

10月号・目次



聖書のさしえ (10)

辻　成史



宮本武之助編

大学と人間

大学における人間形成の諸問題と、その方向

目次・内容

近代の大学の性格とその批判（松川成夫）
キリスト教大学における学問（大須賀潔）
学問と信仰との関係についての考察（小田島嘉久）、大学問題への寄与（佐藤敏夫）
大学における人間形成（隅谷三喜男他）

B6判二一二頁・定価二八〇円・〒50円

日本YMCA同盟出版部
東京都千代田区西神田
振替東京二〇一九六

（新刊）

少年少女むきに訳編された待望の名作

C・Mシェルダン原作・別府信男訳編

みあしのあと

現代に生きる少年少女が抱く数々の疑惑と彼ら自身の苦悩に対して、静かに話しかけるシェルダンの名著〃みあしのあと〃は世界の国々の人々に愛読されている。

キリストを愛し、従わんと新に決意した人人が、あらゆる常識と苦難をこえて、彼に忠実ならんとした、感動の物語。（中高生向）

定価二〇〇円　〒五〇円

すぐに作って利用できる！　あなたの創意をひき出し！　分級を生きかえらせ！　教会学校を一段と楽しくする！

岡村正二・尾崎恵子共編

視聴覚教材の実際

黒板の使い方、略画のかき方、絵ばなし、影絵、人形劇の実際等、視聴覚教材の作り方と使い方をだれにでもできるように書かれた入門書。

定価一五〇円　〒四〇円

ヨルダン社
東京都渋谷区神山町十一
振替東京一九五九三四





聖書のさしえは歴史的に大きく二つに分けることができる。その第一はいままで数多く見てきたいわゆるミニアチュールである。材料には羊皮紙を用い、朱・青・金銀の豪華な色どりで、聖書のことばの上下左右、あるいは巻頭の数ページにまとめて描かれた。これらの豪華な写本は、大会堂、そこに坐する司教、あるいはまた王侯、貴族のために、主として修道院で製作され、奉献された。一般の民衆はおそらくこのような貴重な聖書に手を触れることはおろか、見ることすらまれだったろう。ところが 14 世紀も終りに近づくころには情勢は大きな転回を遂げることとなった。新しい動きの先鋒となったのはルネッサンスの母胎といわれるイタリヤではなくて、かえって北方ヨーロッパ、それもドイツ地方であった。中央アジアを経由するアジアとの交易はヨーロッパに紙と木版術をもたらした。この素朴な技術が、のちになってみずからに対する攻撃の最有力な武器の一つになろうとは法王でもごぞんじなかったにちがいない。多くの修道乞食団、神秘主義的平信徒運動の渦巻く宗教改革前夜のドイツにとって、この新しい表現主題は絶好のものとなった。キリストの生涯、マリヤ、聖人の画像は続々と制作され、いままでは会堂の壁画や彫刻でしか画像に接することのできなかった平信徒の民衆の家族の部屋に、入り込んできた。

新しい需要は必然的に新しい作品の性格を要求する。素朴な木版の効果はそれまでにみられなかったいきいきとした、生活によりそった聖書の解釈を可能にした。冠を戴くマリヤと食事の仕度をするヨセフの奇妙なとりあわせは、しかし不思議にもこっけいな感を与えない。がっしりとした線にささえられた降誕の物語は、もうあのビザンチンの天上の出来事ではなく、ドイツの民衆の心の中に起こった出来事である。冬のさ中に一籠のバラによって、天国からのあいさつを送ったバラの聖女ドロテアのなんと美しい若さと健康にあふれていることか！

月刊 キリスト・10月号

巻頭随想

Y君のこと

浜崎 次郎

かれこれ三〇年近くも、親しく交際した家族の実話、それも戦後進駐軍のいたころの話である。

Y君は、当時二七、八才の青年でいまはある大企業の重要なポストにある人であるが、この一文は本人に無断なので一応匿名にしておこう。

Y君は早大理工科で応用電気を修め、ある有名会社の社員として勤務中応召し、一兵卒としてきびしい訓練をうけた。その間にあって決意した一つのことは、どんな場合にも腹をたてないということであった。

好漢Y君は会社の研究部員としてもある一つのことを発明し、特許をとったこともある。科学者であるが文筆にも長じ、短篇の創作も書き、労組関係の問題で朝日新聞に投書したのが掲載されたこともあった。音楽にも深い趣味と才能をもち、ＹＭＣＡの合唱隊員でもあった。長身痩せ型の温和な、いつもニコヤカな好青年である。母堂も多才の人であるが、美人なので若々しく、ふたりで歩いていると姉と弟だとしか人は見ない。

湘南に親子で住んでいたが、ある晩ふたりで外出先から自宅に帰った。電車から降りて同じ方向に歩くひとかたまりの人々の中に、ふたりづれの若い娘のほかに黒人の米兵がいた。前にゆくふたりの娘たちに近づいた黒人兵がいたずらをはじめた。それを見たY君は歩調を早めて、その一団に近づきながら、娘たちと黒人の間にはいっていって、娘を守ろうとした。しばらく行くと、黒人兵はまた手をだしたので、Y君はこれを払おうとした。すると彼はたちまち怒ってY君にとびかかり眉間に一撃を加えた。K君は昏倒してしまった。うしろからかけよってきたおかあさんは、息子の顔面が血みどろになっているのを見て、気も狂うばかりであった。大ぜいの人々が集まってきて、かたわらの魚屋の店先につれこんだ。Y君は意識を回復すると、医者をと言った。殺されたかと気づかった息子が、気のたしかなのを見て、よかったとは思ったが、気の強い子が医者をよぶのは、よほどのことと思った。

黒人兵はなにを思ったか、ふたたび引き返してきて、Y君が死んでいないのを見ると、またまた打撃を加えようとした。おかあさんはたまりかねて、わたしは母だといって、そのあいだに立ちふさがった。さすがにおかあさんの剣幕に黒人兵も手出しができず、立ち去った。そのうち医者もきて手当をしたので、Y君も元気をとりもどした。

この事件のあと、おかあさんの述懐をわたしは聞いた。そのひとつは、日本人の男性にひとりとして黒人兵の暴行を止めようとする者のいなかったこと、ＭＰなどがきて事実を調べようとしても、見物した大ぜいの人々が、かかりあいになることをおそれてか、ひとりも証人になるものがいなくて、けっきょくふたりの娘たちと、Y君のおかあさんだけだったこと。そのためか、午前一時ごろまでかかって調べられた。

翌日数百人の黒人兵をならべて首実験をさせられたが、わからないと返答するほかなかった。

わたしはY君のおかあさんからこの話をきかされ、進駐軍人に対して、歯ぎしりするほどの激しい憎悪の念を押えることができなかった。しかるにこの話を聞かせてくれる夫人は、きわめて平静であった。わたしが「黒ん坊のやつ、ヒドイことをしたものだ」と憤慨すると、こう言われた。

「先生、わたしたちも悪いのです。あの黒人兵を見ると、どうしても気持ちが悪いのです。それで知らず知らずいやな顔をするのです。黒人のほうだって、わたしたちの顔を見たら、すぐわかりますよ。それがなにかのキッカケで爆発するのだと思うと、わたしたち



平和のためにーつなれ

7月下旬、京都で行なわれた〝世界宗教者平和会議〞に参加した各国代表のうち、米、中、ソ、チェコなどのキリスト者代表が上京、8月5日夕、東京YWCA講堂で開かれた「キリスト者と世界平和」の講演会で、平和のための一致したたたかいを力強く訴えた。

戦没者の前に祈る

第16回の終戦記念日を迎えた8月15日早朝、東京千鳥ケ淵の無名戦没者墓苑で、日本基督教団東京教区社会委員会主催のもとに、平和記念祈禱会が開かれた。暁をついて参集した都内の牧師・信徒が、平和への決意も新たに熱い祈りをささげた。



とび出してゆかれた。募金の手はずをきめるために、ウロウロしているときに、先生は白い麻の服に身をつつんで、帽子を片手に事務所の前に立って言われた。「机の前に坐って考えていたってお金は集まりませんよ。いま学生を送るに必要なお金を作るのですよ。さあグズグズせずに行きましょう」と。そして先生の知人の会社を何軒も尋ねて、とうとうお金をつくった。このときの先生の姿はいまでも忘れられない。人を鋭く見ぬく眼と、聖書をいつも深く読んでおられる信仰と、青少年を限りなく愛された心とが、わたしの心にいつまでも残っている。斎藤惣一先生はわたしにとって忘れえぬ人人のうちの最も大きな人のひとりである。

（札幌キリスト教青年会総主事）

母への愛と文鳥への愛

大岩　美代

このたび『反ナチ抵抗者の獄中書簡』を翻訳するにあたって、数多くの手紙の中に、母あて、両親あての手紙はあっても、父あての手紙が一通もないのを知って、不審にたえませんでした。

それにつけて、宅で二年八ヵ月前から飼っている文鳥が、一ヵ月ほど前から、朝夕世話をしている長女になつきはじめたことが思い出されました。高校一年のこの娘は、文鳥二羽と山雀一羽を飼っていますが、換羽期には鳥が弱るといっては、自分のおかずの卵の黄味をとりわけて食べさせ、夏は涼しく、冬は暖かく過ごさせたいと大きな鳥かごをあちらこちらと持ち回り、好物の玉レタス（普通、小鳥は小松菜を喜んでたべますが宅のは変わっているようです）が近所にないときなど、はるばるデパートの地下室まで出かけていったりいたします。この三羽のうちいちばん長く飼っている文鳥が近ごろ、家族の他の三人と娘とを区別するようになりました。最初は娘もなぜわたしのほうへとんでくるのかしら、と言っていましたが長男の手にとまっていても、娘がそばへいくと、すぐにそちらへとび移ります。こうして、はっきり恩人を認めたことを知って、わたしどもはいまさらのように愛情の積みかさねということに驚いた次第です。そのうち、五ヵ月後に飼いはじめた文鳥も、娘を見わける日があろうかと、家中でたのしみにしています。

母の幼児への愛は三百六十五日片時もかけることはありません。幼児の性格は、六才までに形成されるといわれていますから、この期間の愛情の積みかさねが、子の母に対する愛の支柱の一つになっているのではないかと思われてなりません。

死刑の二、三時間前に、母と妹とにあてて書いた二三才の娘さんの手紙の一部を、ご紹介いたします。

この手紙の主であるベークは、ブレーメンの近くのヒースの生いしげった荒野で育った人で、父は他界し、母は絵、妹も弟も楽器をかなでるという芸術一家です。ベークは、社会制度に対する反感から、ある抵抗者のグループに参加しましたが、彼らの野心にみちた計画に反発し、二ヵ月でグループを離れました。それにもかかわらず、捕えられて、処刑された不運な人です。

母への手紙

「愛するママ、もうあと二、三時間も生きていられるでしょうか……わたしの死によってお与えする悲しみに打勝ってください。そしてその心の痛みを通して、ママの芸術がみがかれますように……ママ、どうぞわたしの愛をお忘れなく、美しい絵を画いてください。メメやティムによって、ママに喜びが与えられますように。……」

妹への手紙

「愛するメメ、どうぞお願いですから、いつもママのおそばを離れないでください。ママの強いさえになってあげてください。………」

戦時中、戦地で生命をおとした人たちが「おかあさん！」と叫んで息をひきとったときいたことを思いあわせ、洋の東西をとわず、人の子の母に対する思いは深く、この深い愛情をうける母の幸せもまた深いものだと思いました。

（日基教団信濃町教会員）

も反省しなくてはならぬと思いました。それ以来、わたしは黒人に会っても、つとめていやな顔をしまいとしています。」

わたしはこの夫人の告白を聞いて、みずから恥じた。この人たちこそまことの勇者、キリスト信仰の生きた証人である。Y君はその当時もそんな気ぶりも見せず、あい変わらずニコニコしていた。あれからもう十余年にもなる。

Y君はその後、見目麗しく温雅なクリスチャン令嬢と結婚し、わたしは司式して新家庭の祝福を祈った。今はふたりのかわいい坊やのパパで、なごやかな家庭を営んでいる。

（日基教団鳥居坂教会牧師）

斎藤惣一先生の思い出

大和久泰太郎

斎藤惣一先生がなくなってからもう一年が過ぎた。わたしがキリスト教青年会で働くようになったのは、日本の敗戦直後のことであるから、先生と親しく接したのはほとんど先生の晩年近くである。先生が第二次大戦直後、援護院長官となられ、ふたたび日本キリスト教青年会同盟総主事として、日本全国のYMCAのために、また世界のYMCA運動のために尽された功績は語り尽せないほど大きい。先生はYMCA運動を通じて青少年を愛し、そのために生きてきた人である。十年近くの間同じ職場の大先輩としての先生といっしょに働いてきて、語るべきことは数えきれないほどあるし、先生の印象を語るだけでも紙数はつきない。しかし、わたしが斎藤先生のことを思うたびに忘れることのできないことが三つある。

わたしの小さな書斎にいまでも一九五五年に先生がわたしのために書いてくださった色紙が額に入れてかかげてある。「常に喜べ、絶えず祈れ、凡てのこと感謝せよ」という聖句である。これを見るたびに、みずから省みて恥ずかしい思いにかられる。先生が実によく後輩の指導に当たってその人を知り、適切なことばをあたえられたことに心を打たれる。わたしは日本YMCA同盟主事のひとりとして働いていながら、当時同盟の総主事をしておられた先生にはずいぶんご迷惑をかけたように思う。いつもブツブツ言ったり文句をつけたりして「常に喜ばず」、忙しい仕事にかまけて「絶えず祈らず」、反抗心旺盛で「すべてのこと感謝せず」にいたにちがいない。そういうわたしに先生はあの達筆に託してこのすばらしい聖句を書いてくださった。これが一つ。それから、これはいつのことかはっきりおぼえていないが、先生がある集会で、使徒行伝第八章のはじめのところを引用して奨励をされたことがある。たしかそのときは文語訳の聖書で読まれたが、先生は八節の「この故にその町に大なる歓喜おこれり」という個所で、わたしたちキリストにある者が、しかも青年会に働いている者が、この町で大いなる歓喜が起こるように働くことのどんなにたいせつなことかを、力強くすすめられた。散らされて行った人たちがみことばを宣べ伝えながらめぐり歩き、ピリポもサマリヤの町に下って行って、キリストを宣べ伝えた。群衆はピリポの話を聞き、その行なっていたしるしを見て、こぞって彼の語ることに耳を傾けた、のである。斎藤先生は、人々が耳を傾け、しかも病をいやされたことのゆえに、この町に大きな歓喜があったことを、巧みな話術で話された。この話はいつまでもわたしの心の中に残っている。いまでもわたしは時々なにか話をたのまれたおりに、この先生の話の受け売りをするときがある。これが二つ。

そして最後に、一九五六年夏に、ドイツで世界学生キリスト教連盟（WSCF）の総会が開かれたときに、日本から数名の学生と指導者を派遣したことがある。そのときに、わたしは同盟学生部主事として学生派遣の募金をしていた。その年の夏はずいぶん暑い日が何日も続いて、募金も遅々として進まず、少々バテ気味であった。最後の追い込みで気ばかりあせり、いろいろ複雑な状況や事務にまきこまれて、オロオロするばかりであった。

こういうときに、わたしの報告を聞かれた斎藤先生が、だれよりも先に黙って立ち上がって、わたしをつれて猛烈な暑さの街の中に

得ず、むしろその空しさを知らされながら生きている人です。オールド・ミスといわれる年にもなり、同じように毎日の仕事を片づけ、人間関係の中をくぐりぬけて生きています。こうした生活は、十年、二十年さきも単調に続いてゆくかもしれない。こんなときのようすを作者はこうえがいています。

『さだ子は、受話器をおくと、がっかりしたように椅子に腰を落した。自分自身にふかい絶望が感じられた。

「一体、生きて行くということは何なのだろう」

と彼女はぼんやり考えた。』

このような描写は、わたしたちの日常の生活のあるとっぴな場面よりも、そこここによくみたり、だれしもが体験する場面ではないかと思います。「いったいわたしは、なんのために生きているのだろうか」「わたしが生きている意味はなんなのだろう」「なにがホントの幸福なのだろう」こうした問いをわたしたちは現代のあわただしい生活の奥底にもっていると思います。

しかし、この問いは、現代人だけがもっているものではありません。人間はどの時代にあっても人間として生きるとき、生きる意味を考え、生きる目的を問うのであります。

少し古いことを申して恐縮ですが、明治の十年代に条約改正の議がおきたことがありました。これは、幕府が開国を強いられたときに外国と結んだもので、関税の面においても、治外法権の点においても不平等なものでありました。日本の自主性をみとめた条約にするため全国に改正の運動がおきましたが、時の政府はこれを弾圧し多くの自由民権派の人々が捕えられたことがありました。その中に、石黒涵一郎という岡山の人がいます。彼は、条約改正をとなえ、明治三一年大阪で捕えられ、東京に送られ、星亭などとともに一ヵ年の軽禁錮に処せられました。彼は岡山教会の会員でありました。岡山の信徒たちは、不平等条約に反対するという政治運動のために獄に投ぜられた友のために祈り、書簡を送って彼を励まし慰めました。重苦しく孤独な獄中において石黒は主にある兄弟の交わりが、いかに力強いものであるかを身近かに感じました。彼が母教会の執事、小野田伊之吉にあてて送った返信は今日も日本のプロテスタント史の貴重な獄中書簡の一つとして保存されています。その中に彼は次のように言っています。

「小生モ今ヤ患難試煉中ニ在リト雖モ、主ハ恒ニ吾等ト共ニ居マス事ヲ実地信仰上ニ経験致候テ、キリストノ能力ニ依テ万事ヲ為シ得ル事ト其ノ能力ハ己レノ弱キニ於テ全クナル事ヲ覚リ大ナル喜ヲ以テ忍堪致居候間御安心被下度候。」(後略)

彼は単調な獄中の灰色の生活の中にあって、キリストとともに生きる喜びをここに表明しています。これは、理くつでも宣伝でもなく、患難や試煉の中にあって、実地に経験したキリスト者の生きるよろこびについての記録であります。

石黒涵一郎は、明治一六、七年のころ自由民権運動のために日夜奔走し、しばしば弾圧をうけ天寿を全うしがたいことを覚えました。そこで、予想される困難に耐えうる強健なからだを錬成するため、狩猟をしていました。ある日、遊猟の帰り途に二つの質問が彼の胸中にわいてきました。その一つは、「死は果して万事の終焉であるか」という問いでした。彼は、身近に迫る死の問題を考え、すぎゆくこの世の生命のはかなさを覚え永遠の生命を慕い求めるようになりました。

もう一つの問いは、「誰れと共に事をなして死すべきや」と



伝道説教

イエスのユーモア

竹中正夫

さいきん、職場で働いている人たちの間でよく「職場に希望がない」ということを聞きます。毎日毎日、混雑した電車にゆられ、同じ職場にゆき、同じような仕事をし、煩わしい人間関係の中に立ち回っては、また雑踏の中を帰ってゆく。自分の生活はなにか味気ないもののように思われることがあると思います。

ある会社につとめている人の手紙に次のような一節があります。

「大きな会社の中のほんの一部分、体に例れば指一本にも足りない自分をみつけた時、ほんとうに淋しくなってしまいました。あなたは、お笑いになるかもしれませんけれども、満員電車にゆられながら、ひとりの人間として生きることの厳しさ、人生の淋しさ、単調さ、そんなことをこのごろしきりに考えております。」(「B・G学ノート」から)

わたしたちの周囲に、いや、わたしたち自身の中に灰色に近い日々の生活に、望みをもち得ない姿をみることができます。スポーツに興じたり、山に登ったり、庭いじりをしたり、映画をみたりして、まぎらわしてはいるものの、なにかしら、真底から生きる望みと喜びを覚えないといった、うつろな顔が都会にみちあふれているように思います。

少しまえの椎名麟三氏の小説に『明日なき日』という作品があります。主人公は、病身の姉と、近代的な妹をもつさだ子という女性です。彼女は、小さな事務所で働いています。どこのオフィスでもよくみかけるような、きちょうめんで仕事をコツコツとする地味な、しかし、信頼されている女性です。彼女は上役の木部、同じビルの上にいるお人好しの後藤、そして、かつての同僚で今はブローカーをしている策士の山野の三人の男からそれぞれ愛されるのですが、なにかしらホントの愛を感じ

うに、ひょろ長いやせた人が並んで坐っているのをみると、思わずふき出したくなることがあります。いかめしい先生が浴衣の裏を着ていたりするとおかしなものであります。当然表を着るべきはずの人が、裏を着てしかもいかめしい顔をしている光景にはユーモラスなコントラストがあります。

こうした点からザアカイとイエスの出会いを考えてみましょう。たしかに、彼が桑の木に登ったことは、ユーモラスなことでした。しかし、それ以上にユーモラスな対比がそこにおきています。常識から考えるなら当然起きてはならないことが起きています。

イエスがザアカイの前を通り過ぎ、ザアカイがイエスを仰いでよび留めるなら、あたりまえのことであります。しかし、イエスはザアカイの前に来て立ち留り、彼を見あげ、その名を呼ばれました。

「ザアカイよ、急いで下りてきなさい。きょう、あなたの家に泊ることにしているから。」

キリストが、エリコの町長の家に泊るなら、なんの不思議もありません。もし彼が、敬虔な人の家に泊るというならなにもおかしいことではありません。

しかし、人々からきらわれている取税人のかしらの家に泊ることは、いかにも奇妙なコントラストでありました。神のユーモアを解さない人々は、みなこれを見て、

「彼は罪人の家にはいって客となった」とつぶやきました。イエスは、ザアカイの家の門先きを通り過ぎたのでなく、彼の家にはいり、彼の寝室に泊られたのでした。

この出来事は、イエスと人間との間における深いユーモアをあらわしています。イエスは罪なきものであったが、人間の罪の重荷を負って十字架にかかりました。彼は、人間の罪を当然審くことのできる者であったが、むしろ罪の代価をみずからが負って人間性の回復を実現されました。そして最も大きなコントラストは、この世の王が、僕の姿をもって、人間にたいする愛をあらわしていることに見出されると思います。

パウロは「せん方尽きても望を失わない、途方にくれてもゆきづまらない、倒されても滅びない」（コリント第二、四ノ八―九）と申しています。これは、決して、やせがまんを言っているのでもなく、自分の能力を信じて言っているのでもありません。それは、勝利者の笑いから出て来る望みではなく、イエスとの出会いの中に、罪とゆるし、死と生命、暗と光、そして絶望と希望のユーモアにみちた対比を見出しているからであると思います。

彼はこう言っています。「いつもイエスの死をこの身に負うている。それはまた、イエスのいのちがこの身にあらわれるためである。」

キリスト者は、イエスとの出会いの中に、笑うことができるのであります。それゆえにキリスト者は灰色のような現実の中にあっても短兵急になって焦ることなく、失敗の中にもゆるしを覚え、今日というこの日を彼とともに日々に新しく生きるのであります。

「だから、わたしたちは落胆しない。たといわたしたちの外なる人は滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく。」（コリント第二、四ノ一六）

（同志社大学教授）

いう問いでありました。流転している社会の潮流の中にあって彼は、自分はなんのために生きているかを考えました。そして彼とともに生死をともにし、彼を根底からささえ、自分に生き甲斐を与えてくれる存在を、真剣に求めるようになったのであります。ここに彼は、熱心な求道をなし、キリストとの出会いを経験し、彼とともに生きることに人生の喜びを見出したのでありました。彼は、「此の身は、たとい暴政の下に斃るるとも願わくば聖血を此の土に濺がん」という決意にたって、この世に生きていたのであります。

キリストとともに生きるということは、どうしてひとりの人をこのようにまで力強くし、生き甲斐と喜びを与えるものでしょうか。キリストにあって生きる望みとは、いったい今日のわたしたちにとってどういうことを意味しているのでしょうか。

福音書は、イエスとじかに出会って新しい希望を与えられた多くの人々を記しています。それぞれ独自なキリストとの出会いがそこには生き生きと記されています。いまその中から、わたしは、ザアカイとイエスの出会いについて考えてみたいと思います。それはユーモアにみちた出会いであります。ルカによる福音書の一九章によりますと、イエスとその弟子たちの一行がエリコの町にさしかかりました。すでにガリラヤ地方におけるイエスの評判が、この町にも伝わっていたのでしょう。大ぜいの人々が街道すじに立ちならんでいました。ザアカイもイエスをみたいと思ってやって来ました。しかし、すでに人垣がいっぱいつくられ彼のわりこむ余地はありませんでした。彼はあいにく「背が低かった」のでうしろにいては何も見えません。また、彼は「取税人のかしらで、金持ち」でありましたから、人々にきらわれており、だれひとりとして、前のほうの場所を譲ってくれません。そうこうしているうちに、イエスの行列がやって来ます。そこで彼は、フッと思いついて、あたふたと傍らの「いちぢく桑の木に登りました。」もし、猿が桑の木に登るならおかしくありません。子供が木に登ることはよくあります。しかし、太った、背の低い、おそらくあごひげをいっぱいにはやしたザアカイが桑の木によじ登るかっこうはおかしなものだったと思います。これは想像してみてもユーモラスな光景であります。

わたしたちが、おかしくて笑うときにはいろいろの原因がありますが、だいたい「笑い」には二つの種類の笑いがあるようです。一つは、自分が他者よりもまさっているという優越感を感ずるときに人は笑います。マルセル・パニョルは「笑いはわれわれが他人にたいして忽如として瞬間的な優越感を抱いたときに発生する」といっています。小学生が漢字をまちがえても笑われませんが、国文学の大先生がまちがえれば「もの笑い」の種となります。強者が失敗するのをみて、弱者が笑う心理がそこにあります。優越感から生まれる笑いを、最もよくあらわしているものは、「最後に勝つ者はよく笑う」ということばです。この場合、笑いは勝利者のうたです。

しかし、笑いについてもう一つの考え方があります。それは対象の中に奇妙な対比（コントラスト）を見いだすことによって笑う場合であります。カントは「期待と現実」のなかに、フロイドは「おとならしいものと子供っぽいもの」とのあいだに、ベルグソンは「機械的なもの」と「生き生きとしたもの」との間に対比を見いだして笑ったといわれています。

電車の中にもし、ビール樽のように太った人と、ごぼうのよ

のではなくて、みずから善意に満ち、相手から交わりを与えてもらうのではなくて、みずからそれを造り出してゆく完全な愛。それだけがはじめて、われわれをすべての争いから自由にする。ペテロは、このような赦しによって、（兄弟たちの憎しみを克服しはしなかったけれども）不死身のものとされた。いまや、彼は、自由な人間として、誹謗と争闘の荒々しい混乱をこえたところに立っている。彼が自由な人間であるのは、イエスが彼に愛を与えたもうたからである。

恵み深き御神よ。あなたの赦しは完全な愛です。あなたは、わたしどもの堕落の深さを測ることをせず、わたしどもの悪しきことばを数えることをせず、わたしどもの不信仰な思いを監視したまいません。それらのものは、数限りもなくおびただしいものです。しかし、あなたはそれを赦し、あなたの慈みの栄光の中にあって、いつまでもそのありたもうかたでありたまいます。主よ。どうかあなたの形をわたしの中に作り、人を赦すことのできるあなたの愛にあずからせてください。アーメン。

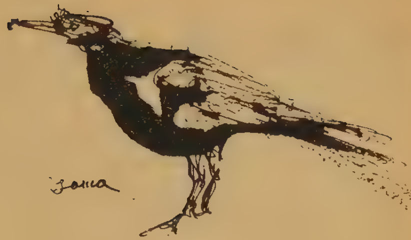
山に向かいて

われ山に向かいて目をあぐ。わが助けは、いずこより来るや。
わが助けは、天地をつくりたまえるエホバより来る。
（詩篇一二一・一、二）

詩篇の詩人がその目を山に向かってあげるとき、一つの問いが彼の心を動かしているのである。そして彼は、自分の心をかき乱しているものについて、われわれに語るのである。彼は助けを求めている。それゆえ彼は、はるかな遠くに目を注ぎ、自分の目のとどく限りの高い山に目をあげる。しかし、彼の目は、山の頂や山の背にとどまってはいない。そのようなところに、イスラエルを守り庇護する軍勢が現われるなどということは、ありえないのである。それゆえに彼は、その目をさらに高くあげる。彼は地上の世界に助け手を求めない。「わが助けは、エホバより来る。」天地を造りたもうたあのひとりのかただけが、助け手である。

いまや、彼の不安な問いには答えが与えられた。彼のさぐり求める目は、その目標を見出すことができた。彼は、どこから助けが来るかを知っている。しかもそれは、単にあるいはとかたぶんとかいうことではない。助けは神から来るのである。そして、助けが神から来るのは、天地がその造りたもうたものだからである。それゆえに、彼を無力にするような苦しみはもはやなく、彼を妨害できるような敵はもはやなく、彼の善意を束縛するような制限は、もはやない。創造者としての神の栄光――そこから神の永遠の恵みの豊かさは、生まれてくる。

わたしは詩篇の詩人が語っている通りにいたします。わたしは目を高いところに向けます。いっさいの地上的なもの・人間的なものをこえたところに、目をあげます。自然がわたしに示してくれるいっさいのものよりも上に、目をあげます。あなたに向かって目をあげます。わたしの創造者であり、わたしを完成したもうかたよ。アーメン。



＜思いと祈り＞

赦し

シュラッター
井上良雄訳

ここにペテロ御許に来りて言う。「主よ、わが兄弟われに対して罪を犯さば、いくたび赦すべきか、七たびまでか。」
（マタイ伝一八・二一）

ペテロは、頑固に赦しに対してさからって来るしぶとい悪を、その兄弟たちの中にも予想した。兄弟としての交わりをも破壊するわれわれの悪意の根強さを、彼は知っていたのである。しかし、われわれは、ペテロは自分と同じようにイエスとともにいた人々だけを兄弟とよんだのではなくて、すべてのユダヤ人をそうよんだのだと考えてもいいかもしれない。しかし、彼は、そのような兄弟からも自分がイエスの弟子であるという理由から、激しい敵意を予想しなければならないということを、知っていた。ユダヤ人の兄弟たちは弟子たちがイエスの友であるということに対して、和解の余地のない憎しみをもって報いるということ。そして、そのような憎しみのために、いつも繰り返し罵詈雑言をあびせ、悪意に満ちたことをするということ。そのことを、弟子たちは、経験によって早くから知っていた。そして、イエスご自身も、最初から、強いことばで、弟子たちの置かれている状況について明らかに語り、彼らにその戦いの準備をさせたもうたのである。

しかし、そのような憎しみが終ることがなく、悪意がいつまでも繰り返される場合、それに対する赦しが無際限なものであり得るだろうか。そのような義務からわれわれを解放する一つの限界がなければならないのではないだろうか。ペテロには、七度までならば不正を快くがまんしてやる用意があった。七度までならば、和解して敵が自分に加える害悪を堪え忍ぶ心持ちがあった。ところが、相手が和解を欲せず、彼との交わりは不可能だということは、明らかなことではないだろうか。――しかし、ペテロは、そのような自分の考え方が、どのように自分には正しく思われても、イエスのみ心にはかなわないものだということを、感じていた。それだから、彼はその質問をもって、イエスの前に歩み出たのである。そして、自分の予想していたとおりだということを、イエスが自分に与えてくださった答えによって、知ったのである。

イエスは、赦しを数えるというようなことを排除したもうた。そして、赦しというものからいっさいの制限を取り去りたもうた。赦しには限度がなく、終りがない。赦しはいつまでも終ることがなく、無尽蔵である。われわれが赦しを数えるとき、われわれは依然として他の人々に束縛されているのであり、彼らの憎しみはわれわれに対して力をふるっているのである。返報を延ばすというのではなくてそれをやめてしまう完全な愛。相手の善い行ないに依存する

ときかれても困るんです。クリスチャンをやめなければならぬという理由が、いままでなかったんです。

編集部　ご幼少のころ、キリスト教に関係した思い出がございましたら……。

松下　子供のころ、ほかの楽しみがなかったせいもあるでしょう。クリスマスは非常な楽しみだったんですね。クリスマスのときにお話をしたり、歌をうたったりするわけですね。そういうことが非常な楽しみだったんです。ところが一度、いくつのときか記憶がないですが、ジフテリアにかかって、医者から絶対に外出してはいかんということを命ぜられたんです。ところがそれがちょうどクリスマスの二、三日前なんですよ。ぼくは親の言うことは非常によくきくほうだったんですが、そのときはがんばってどうしてもクリスマスに行くと言って、えらいだだをこねて、非常に母を弱らしたんです。そのころはおばあさんが生きていて、祖母と母が相談して……。ぼくの家と教会と隣り合わせなんですよ。どてらか夜具だかわからんが、たくさん着せて、教会のうしろのほうに穴をあけて、ぼくは乳母車に乗って、外からのぞいて満足したことがありましたがね。とにかくクリスマスというのは非常な楽しみだったですね。

キリスト教ぎらいの町

編集部　中学生時代は、いかがですか？

松下　クリスマスも楽しみだったですが、だんだん中学校以上になると、いろんなほかの楽しみが出てきますからね。その時分、八戸は非常に封建的なところでして、キリスト教ぎらいなんですよ。小学校でも中学校でもそういったような、一つの反キリスト教的な雰囲気というのは、相当濃厚だったんですがね。

編集部　そういう影響は、あまりお受けにならなかったですか。

松下　楽しいことはむろんなかったが、といってぼくは被害妄想にもかからなかったつもりです。いまでもクリスチャンの持っている被害妄想には非常な反感を持っている。

編集部　たとえばどういうこと……。

松下　いまでもクリスチャンの被害妄想が多いですよ。いまはだれもクリスチャンを迫害なんかしていない。それをあたかも迫害されているかのごとくにいっているんじゃないですか。あれは一つのノイローゼですね。ぼくなんかそういう点はいちばん被害妄想にかかりうる環境だったんですが、しかしぼくは勉強もしましたし、運動もしましたし、人とも協力をしたし、はじめはぐずぐずいっていたが、社会で、つまり妥協というのでなく、自分が正当なことをしておれば、そんなに不愉快な目には会わないですよ。迫害される人は、されるほうにやはり責任があるんじゃないか。

古典を愛読

編集部　中学のころ、どういう本をお読みになりましたか。

松下　日本の古典を読みましたね。それはぼくの国語の先生——小和田という先生の影響だと思うんですが……。ぼくは、自分じゃあまり勉強家だとは思っていなかったし、いまでも思っていないですが、考えてみるとずいぶん読んだものですね。日本の『太平記』『源平盛衰記』『平家物語』『源氏物語』『方丈記』『吾妻鏡』『徒然草』『里見八犬伝』、日本語に翻訳された『水滸伝』『三国志』、ほとんど有名な古典というのは、全部読んだんじゃないですかね。

編集部　お宅にございましたか。

松下　家にあったんですよ。有朋堂文庫といったな。有朋堂文庫にない本もありましたが、それはどこからか借りてきて。けっきょく読んでわかったか、わからないかというとわからなかった。ただわからないでも雰囲気だけはわかったですね。

編集部　それはだいぶ先生のあとの生活に生きているでしょうね。

松下　ええ。それと、それから中学のときにその先生の影響だったと思うんですが、そういう日本のものと同時に漢文が好きでしたね。漢学をやったのは中学だけなんですが、非常に漢学好きで、『文章軌範』『十八史略』



＜わが信仰の生涯＞

自分を偽らぬ生活

（立教大学総長）
松下正寿

楽しみだったクリスマス

編集部　先生のお宅は、おとうさまの時代からクリスチャンになられたのですか。

松下　おじいさんの時代からです。母の父が警察官で、最後に和歌山県の橋本の署長をしておったとき、浦部という聖公会の牧師に導かれて、クリスチャンになりまして、その後、警察官をやめて牧師に転向したんです。その娘がわたしの母で、いまうちに寝ていますが、わたしは、その母の次男なんです。祖父の松下というのが牧師をしておって、母が亀徳家にお嫁にいき、わたしは亀徳家の次男なんですが、祖父のほうの家を継いで松下というんです。

編集部　そういうおじいさんとおかあさんとのご関係で幼いころからのキリスト者…。

松下　つまり、嬰児洗礼というやつですから、どういう動機でクリスチャンになったか

ろんな友だちに話したり、先輩に相談したりしても、だれも相手にしてくれないですよ。「そんなバカなことがあるか。いやなら卒業してからやめればいいじゃないか。それでしばられるわけでもなんでもない」と言って、だれも相手にしてくれない。わたしは非常に真剣に考えて、いまからみると一種のノイローゼだろうと思うんだが、数日絶食したりしちゃったんです。それで途中で経済のほうに転科したんです。ところが転科するのはいいが金のほうが困った。いまだったらアルバイトがあるが、そのころはなかった。それが一つの問題。もう一つの問題は、ほかのクリスチャンからの誤解ですよ。牧師をやめて金もうけやるんだ、あれは俗人だ。ぼくは俗人でないがゆえに転科したわけだ。その理論が通らないわけです、世の中のバカどもには。いまちょうど平和、平和といっておれば平和だと思うバカ者が多いと同じように、その時分もキリスト、キリストといっておればいいんだ、そういうバカ者が多かった。ですから非常に煩悶した。ただその時分、非常に助けになったのはヨブ記ですよ。いろんな神学者がきて彼を悩ましたんです。「罪の罰としてそういう不幸がきたんだ」。つまり、あの時分の神学というのはヨブに対して圧迫を加えた。ヨブひとり敢然として自分の良心と戦ったんですから。そういうヨブ記というものは、ぼくにとって重要な指針です。ぼくはだれがなんといっても自分の思うことをやる、こういう決意をした。それで、ぼくの精神問題は解決した。経済問題のほうはけっきょく解決がうまくつかなかったわけなんです。

編集部　おとうさんはいらっしゃらなかったのですか。

松下　ぼくはその点、家庭的にはあまりよくなくて、父と母はわたしの子供の時分から別れていて、父の世話になったことは一ぺんもないですよ。それで金のほうは非常に困ったわけですが、けっきょく非常に運がよかったことは、第一次世界大戦が終ってまもなくで、ちょっと景気がよかったときです。ぼくの母の助産婦の収入が若干ふえて、学資を二五円ぐらいにしてもらえたんですよ。ギリギリのところですよ。ぼくは、いまでも母がずいぶん苦労したことを知っているから、感謝しているんですが、とてもそれでは上がらなかった。その時分ぼくは寄宿舎にいて、けっきょく消極的なアルバイトで、つまり飯を食わないで——あらかじめ賄いにいっておくんです、欠食ということを。普通の日は朝昼晩食べて、土曜日は夜から食べないで、友だちや親戚のところに行って食わしてもらうんですよ。そして、そこに泊めてもらって、弁当もらって日曜に帰ってきて、月曜の朝の飯を食わないで朝寝坊しているから残るわけですよ。それが返ってくる。それをかわるがわる自分の食事のほうに使って、ときどきは友だちから借りたり——借りたものは必ず返したんだけれども、人さまのご迷惑にならないように、倹約一点張りで、ごく細かく倹約してコツコツためて、卒業するときには、六〇円ぐらい貯金ができて、母の世話にならずに背広だけ買いましたよ。ぼくはいま金については いい加減なんだが、その時分を知っている人は非常なケチン坊のように思っているが、ケチン坊でなくて金がないからです。ない環境において最も合理的に使ったんです。ぼくはいまでも非常に自分に満足していますよ。自分の良心に従ったコースをとって、自己を偽らなかったということをね。いまでも、自己を絶対に偽らない生活をしているつもりです。

二二才で教務主任

編集部　それで経済にいらっしゃって経済を専攻なすったわけですか。

松下　ええ。それで卒業して、成績はよくなかったですが、特別に悪くはなかったので鈴木という先生がいたんですが、その先生がぼくをかわいがってくれて、アメリカに留学さしてやろうという話があったんです。それじゃさしてもらおうと思ってあてにしていたんです。そうしたらその鈴木先生が卒業まぎわに死んじゃったんです。ほかの人は就職も決まっているが、ぼくは全く就職するあてもなにもなく困り果てたんです。ところが、ぼ

それから頼山陽の詩のようなものとか、ずいぶん読みましたね。それから歴史ですね。日本の歴史、東洋の歴史も好きでした。西洋の歴史はずっとあとですがね。ずいぶん読みましたから、いまでも比較的に正確ですよ。だから、ぼくの思想が、観念的にならず、わりあいに実証的で、歴史的根拠があるというのは、そういう少年時代の影響じゃないかと思いますがね。

翻訳的なキリスト教

編集部　そのころは、日本の歴史上ではどういう人物がお好きだったでしょうか。

松下　どういう人物というより、あらゆる人物に興味を持っておりましたね。むろんその時分ですから、だれでも判官びいきで義経が好きでしたが、わたしは逆に頼朝に興味を持って、『吾妻鏡』なんかむずかしい本なんですが読みましたよ。それから『方丈記』『徒然草』は要するに日本の仏教思想が根本になっている。ああいう無常観が、相当影響を与えていますね。あれは非常に深いもので、日本人であるクリスチャンが、ああいうものを読まないで、翻訳的なキリスト教ばかりを説いて偉そうな顔をしているのは、非常な欠陥じゃないかと思うんです。日本人である以上は、日本の思想的伝統というものを、それにとらわれてはいけませんが、それを十分に理解して、自分自身が日本人としての一つの誇りを持たないといけないですね。そういう点日本のクリスチャンの大部分に対して不満ですね。クリスチャンというと精神薄弱みたいな、あってもなくてもいい存在が大部分じゃないかと思うんですがね。

編集部　やはり、キリスト者が、日本の伝統に無知だということですか？

松下　つまり、無国籍になっているんですよ。ぼくはヨーロッパへもアメリカへも行ってむこうのクリスチャンも知っていますが、むこうのクリスチャンはしっかりしていますよ。しっかりしていないのもいますがね。とにかく中心になっている人はしっかりしていますよ。自分の文化というものが身についていますからね。日本のクリスチャンの大部分の人は舶来好みのお茶っぴいが多いですよ。

自己を偽らない生活

編集部　それから高等学校にいらっした。

松下　それから立教大学にはいりました。

編集部　それはやはりおじいさんのご縁ですか。

松下　ぼくが立教大学にはいった動機というのは、別にキリスト教精神にあこがれるとかどうとか、そういう七面倒くさいことでなく、ぼくの家は牧師ですから、けっきょく金がないわけですね。ぼくの母が助産婦をしていたんです。その後多少よくなったんですがその時分ははなはだ経済的に不如意だったんですね。その時分はいまの人にはわからないかもしらぬが、中学出るのはえらい特権だったんですよ。学資が足りないで、中学を途中でやめた人がずいぶんありますし、中学出ることは、頭の点でも、経済的にも、特権と考えられた時代で、いまの中学とだいぶ違うわけですよ。ぼくも中学出してもらって、これで十分だ、それ以上全く望むことはない、それ以上は不可能なことだとはじめからあきらめていた。ところが卒業するころになって、牧師になるなら立教大学のほうで、給費生ですね、学資なしで小づかい月に十円やるという話があって――ぼくはあまり牧師になりたくなかったわけですよ――といって、なにかになりたいという希望も持たなかった。そうなればやはり仕方がないのかなと思って、あまり気が進まなかったが、立教大学にはいったんですよ。ところが、それから半年ぐらいやっているうちに、非常な煩悶がきちゃったんです。これはぼくの一生のうちにたった一度精神的な悩みというか、実に真剣闘争したときですが、いまでもぼくはその時分のことを考えて、自分が正直であるということについて誇りと自信を持っているわけです。キリスト教がいやになったわけではない。自分が牧師になるには召命感が必要だ。自分には召命感がない。ないのに単に自分が学資がないから便宜上立教の、その時分文科といいましたが神学候補生になるのは偽りじゃないかと、い

きる環境でなかった。

編集部　一心にそれこそ刻苦勉励されたわけですね。

松下　ええ。ただ長くいるうちにいろいろつてが出てきて多少は楽になりましたがね。日本からいろんな人がくると、調べものをしてくれとか、むこうの学校制度を調査してくれと、みんなぼくらのところにきますから、ぼくは一手販売で引受けてしまって、いろんな調査を書いたりしました。そういう勉強はしたわけです。それからときどき日本人がなにか裁判に関係する場合に通訳したり、そんなことで最後の二年ぐらいはそんなに困らないでやってきました。

編集部　アメリカに留学された当時の印象というのは……。

松下　当時の印象といっても、まだ二三でしょう、数え年で。若いですからね。とにかくむこうの女がきれいに見えたですね。そういう一つの性的な衝動というものが、やはり思想形成に影響を与えたでしょうね。それは無意識ですけれどもね。

編集部　三十までずっと独身で。

松下　アメリカの最後の年に結婚したわけです。

編集部　いまの奥さんと……。

松下　ええ、そうなんです。

編集部　お見合いですか。

松下　見合いというよりか、元田の娘ですから日本にいる時分から知ってはいましたけれどもね。

編集部　あまり親しくはつきあっていらっしゃらなかった。

松下　家内のほうは津田の塾にいたんじゃなかったですか。だから家にいなかったからそんなによくつきあわなかった。知ってはいましたよ。しかし結婚しようとは思っていなかった。

編集部　奥さまもアメリカに留学していらして……。

松下　そうなんです。

編集部　奥さまのご専攻は……。

松下　サイコロジー（心理学）。

立教大学で一三年

編集部　アメリカからお帰りになって…。

松下　それからすぐ立教に使ってもらったんです。それで昭和一八年まで一三年半勤めたわけですね。

編集部　それはどういうことでおやめになりましたか。

松下　やめた理由はけっきょく赤を追っぱらうためにやめたんですがね。その時分赤というのは日本の軍部に迎合するような形で赤化運動をやる。そういう連中が立教にはいり込んできましたから、そういう連中を追っぱらおうと思って―とにかく立教というのは、ぼくの心で非常な愛着を持っているんです。それが汚れるというのは、ぼくにとって耐えられないことです。それでぼくは当時の三辺学長に、卒直にそういう意見を言った。三辺さんは慶応の教授なんかしていた人ですが、「きみは元田先生の婿さんでもあるし、将来必ずここの学長になる人なんだから、この際あまり軽挙妄動しないで、しばらく自重したまえ」と言って叱られたんです。それがぼくにグッときたんですよ。赤を追っぱらうことが地位をうる目的かのごとき調子で言った。三辺さんはほんとうの好意で言ったんでしょうが、その好意がぼくにとっては好意にならんですよ。きみのためにならんぞ、と言われる。学校のためを考えてぼくは言ったわけです。ああそうですかと言って、その日に辞表を出したんです。乱暴です。だれにも相談しない。パッと出した。みなびっくりしたんです。それと同時にズバリその連中のことをあばき立てて、みんな追い出してしまった。ところが、戦後、その連中が帰ってきたんですからね。マッカーサーが帰したんですがね。

編集部　それで立教をおやめになってから家にいらっしゃったわけですか。

松下　その時分ぼくの名まえもいろんなものを書いたりなにかするので多少出ていましたがね。もっと金になる仕事があるからやめたのだろうという人もありましたがぼくは全然あてなくやめたんです。それでなんとかなると思っていたんです。ところがやめたその日にどこからだったか、研究所とかなんとか盛んにいろんなものを持ってきてやってくれやってくれといわれて、ぼくの名まえ、ある

くの家内の父、元田作之進が立教の学長をしている。そこに横浜の志成学校、もうなくなりましたが、中国人の中学校なんですよ。中国人だって日本生まれですから日本語はできるんですが、特殊の学校で非常にいい学校だった。ここの校長の腰石という人が、元田学長のところに「教務主任の人が欠けているからだれか世話をしてくれ」と言ってきたんです。むこうは教務主任というんですから、四五、六の人を考えていたらしいんです。元田とは知っているものですから、ものすごい秀才だなんて、えらいでたらめを言ったんです。ものすごい秀才だから、若いが、これならだいじょうぶだというようなことを言ってそれでぼくに呼び出しがきたものですから、行ってみたら「こういうわけだから、きみ一つ自重してやってみろ」というわけだ。困ったなと思ったけれども、いかないわけにいかんし、ほかに口もないし、いわば泣く泣く行ったんですがね。その時分に月給は七〇円だったんです。私立の大学ですといちばんいいときに四〇円ぐらいのときですからね。七〇円というのは非常によかったんですよ。ぼくは別にぜいたくを知らないものだから、下宿代は全部で二四円だから、あと、金が余っちゃって、なにに使っていいかわからなかったんですよ。ただ教務主任というんですが、当時は数え年二二ですからね。若い先生、若い先生といわれて、困ったですよ。いろんなことを押しつけられて、英語から、国語から、商業通論かな、そんなものからコレスポンデンスみたいなものまでやらされて、ほとほと弱ったんですがね。そのうちにアメリカ留学のほうの話が成立したものですから、途中でこんどアメリカにいったんです。

編集部　元田先生は立教では生徒と親しかったんでございますか。

松下　いまみたいに学生が多くないですからね。もっと親しかったわけです。それ以外にぼくは元田とはもっと近かったんですよ。というのはぼくの祖父が牧師だったという点もありますし、それから元田は前からぼくに目をつけてくれて、元田のやっていた教会が大久保にあったんですが、その教会の日曜学校の校長になれというわけで、そこの校長を一年半ばかりしました。教会にもしょっちゅう出ておりましたし、ときどき手伝えといわれて、ぼくも教会で説教なんかしたことがある。神学生じゃなかったですが、実際は神学生以上に教会にはお手伝いしましたがね。神学生時代にずいぶん研究しましたし勉強もしました。神学や聖書などもずいぶん勉強しました。

アメリカへ七年留学

編集部　アメリカではどこに……。

松下　はじめはミネソタ大学です。そこに一年おったが、どうもあまり大きすぎるのでどうかなと思って、それからカールトン大学に行って、B・Aをとったんですがね。こんどは経済のほうをやめて、ヨーロッパの歴史をやったんです。それから、こんどは大学院のほうでなにかやろうと思ってね。立教でははじめから金を出さなかったんです。留学というものの、ほかの学校のスカラシップ奨学金を世話してくれただけです。だから、はじめの二年たったら、あとは自分でしなければならぬ。どこの学校がいいというよりは、スカラシップのとれるところにはいらなければならぬ。ほうぼう出したけれども、ハーバード、コロンビアは出してくれないで、ジョンホプキンズがスカラシップ出してくれることになってそこに行って一年間やったんです。そのうちコロンビアのほうで、なんとかしてくれることになって、コロンビアに移って三年やってそこでドクターとったんです。

編集部　アメリカでの生活は楽でしたか。

松下　なかなか楽でなかったですね。スカラシップもわずかなものですから。経済的にははなはだ恵まれない生活をしていたわけです。だからアメリカにいった人が、あそこはいいとか、あそこが悪いということを大いばりでいいますけれども、ぼくなんか、そういう歓楽というのは全然ないですね。寝るのと書斉と教室だけですよ。だから必ずしもよくはないです。ほんとうはもっと円満にスポーツをやり、かつまた若干の遊びは当然すべきだと思いますがね。ぼくはそういうことがで

スチャンとしての立場から日本というものをみなければならぬ。そんなことに非常に関心を持っていた。そういう点で塩野さんがたいへんかわいがってくれたんです。ところが塩野さんが終戦後まもなく逮捕されたんです。それで塩野さんの秘書をしていた人から、こういう場合に多年のよしみで立って弁護してくれと頼まれた。それはいやもおうもない。ですからやりましょうと言って、そのときぼくは喜んでやるんだが、ただだれか有能な弁護士といっしょにやりたいというのでいろいろ何した結果、清瀬さんがよかろうということになって、清瀬さんに主にやってもらってぼくが手伝うということにしたんです。ところがその後釈放になったんですよ、塩野さんが。そのあと清瀬さんが東条の弁護人になったわけですよ。こんどは清瀬さんがぼくに、きみ手伝えという話になってスッとはいっちゃったわけです。ぼくは頼まれれば断り切れずにやるんですけれども、非常にやりたくてやったわけではなかったんです。

国民全部の平和運動を

編集部　そうしますと立教の総長におなりになったというのはどういうことから……。

松下　これも全くやぶから棒だったんですけれども、八代理事長はむかしから知っていたんですが、八代がぼくをしようと思ったということでしょう。

編集部　八代さんとは立教時代から……。

松下　立教時代は知らなかったですがね。ずっと若い時分から、教会内でいろんな運動をやったりしましたからね。青年運動をやったりしましたからね。

編集部　先生は新しい平和運動を起こされたわけですが、クリスチャンの間でも、分裂主義的だという批判があるわけですが……。

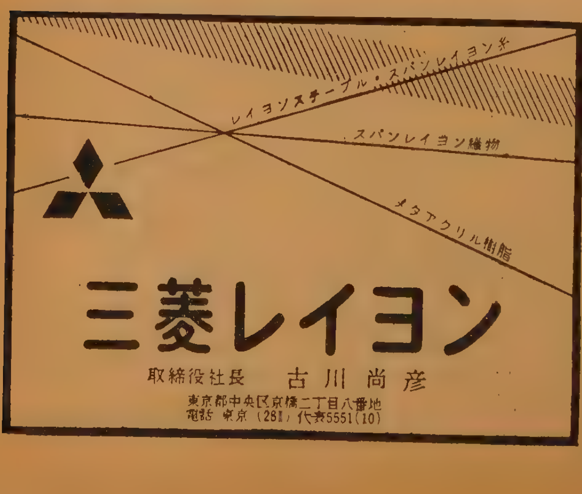
松下　これも立教の総長と同じようにやってくれといわれたからやったわけで、好んでやったわけではない。といってやり出したからにはやらなければならぬ。とにかくぼくは虚偽はきらいです。原水爆禁止といって、原水爆禁止でなくて、反米というのは虚偽ですよ。あれは絶対反対です。それはむこうが分裂主義です。われわれは国民全部、右も左も全部一致すべきだという考え方、安保賛成も反対も……。

編集部　全国民が一致するような……。

松下　そうでなければ通りませんよ。アメリカを支持する政策、ソ連を支持する政策、あるいは中立という考え方があるんです。これは別問題ですよ。核兵器禁止ということになったら、それ一点張りでいくべきだ、バカの一つおぼえで。それ以外の政治問題を持ち込むのは虚偽だ。いままでの原水協は虚偽と偽善なんだから、あれはだめなんです。それと協力するなんていうのはまちがっているんですよ。クリスチャンの中に、そういうふうにわれわれの行動を批判するのはバカか気違い、あるいは精薄ですよ。

編集部　やはり先生としては全国民的な、アメリカも批判し、ソビエトも批判するような運動でやるべきだという……。

松下　そうです。それを原水協といっしょにやれというのは偽善者といっしょにやれということで、キリスト教の精神を解さないものです。エスさまをつかまえてパリサイ人といっしょにやれるかですよ。



いは人の名まえで書いて、それで五月にやめたが、九月ごろまでいろんなものを書いて生活を立てて、ぼくの生活ぐらいはなんとかいきましたよ、ぜいたくしようと思ってはだめだが。そのうちに有田八郎さんが—その前から知っていましたが—電話をかけてきて、ちょっときてくれといわれて行ってみたら、いまの国際連合協会の前身に外政協会というものがある。有田さんは外政協会の会長をしていたんです。外務省という役所では、なかなかそういう長い目で研究調査ということはできないから、この外政協会のように、かくれたところで研究するのは非常にいいことだから、きみのために調査局長という新しいポストをつくる。俸給だけ出してなにもしなくてもいい来てくれと言われて、それならば行きましょうと言って、外政協会の調査局長というものになったんです。そのうち終戦になり、清瀬さんに頼まれて戦争裁判の弁護人ですね。昭和二三年か、国際裁判はだいたい終りに近づくころで、中央大学からいまの片山学長ですね。片山さんから「国際裁判も終るしするから、ちょうど国際法の先生がいないから、きみ来てくれないかい」という話があって、じゃ中央で教授になろうかと思ったんです。そこへだいたい人は見当はついていますがね。なかなか学者というのはおかしな存在で、ぼくの戦時中に書いたものを片っ端から暴露して軍のほうに持っていって、そのうちたった一語か二語とかひっかかるところがある。これで追放されちゃったんです。教職には全然つけなくなった。そうなると世の中というものは薄情なもので、いままで書いてくれ、書いてくれときていたのがどこも寄りつきもしない。ライ病患者みたいなものですね。

国際裁判の弁護人に

編集部　何項追放というんですか。

松下　何項追放というんですかね。それで追放が確定したので教職にはつけないし、いま国際裁判のときに弁護したが、あのときにはまだ弁護士には登録していなかったが、なかには追放したやつと戦えという人もあったが、めんどうくさいしするから弁護士になってやろうと思って登録をしたんです。それで昭和三〇年に立教の総長になるまで弁護士をやったんです。ずいぶんボロイ金がはいってきましたよ、弁護士をやったときに。これはぼくに好意でいったんでしょうが、弁護士という仕事は学者と違うんだ。相当ずるかしこくやらんことにはとても食っていけるものじゃないというんです。ぼくは「きみはまちがっている。おれは絶対正直にやるんだから」「正直にやったら食っていけない」「よしきた。あと一年間きみの収入とぼくの収入と比べてみようじゃないか。ぼくは必ず勝つ」。それでぼくのほうが三倍ぐらい多かったんです。世の中は悪かしこく送らなければならぬというようなケチな考えはそもそもまちがいで、誠実にやるのがいちばんいいです。不誠実なやつが多いから誠実なやつが目だつんです。いい事件がたくさんきましたよ。

編集部　民事裁判というのは会社の経理とか、そういうことですか。

松下　会社の経理もあるし、家屋の明渡しのようなこととか、契約不履行の問題、金銭貸借、そのかわり債権とり立てだけはピシッとやりましたよ。自分自身が貸したものはなかなかとれないが、代理はピシッととりました。それでつぶれたところもありますが、これはしょうがない。借りたものは返さなければならぬ。そういう点ではぼくは厳しいですよ。人を責める場合にも厳しいですよ。温情は温情、正義は正義。

編集部　国際裁判のときには、先生はどういう立場から弁護人をおやりになったわけですか。

松下　その時分はクリスチャンのくせになぜやるかといったが、あとになったらクリスチャンであるからやったんだとかなんとかよけいなことをみな言う。けれども、そんなめんどうなことは一つもないのであって、これは塩野という司法大臣をしていた人が、司法大臣をやめてから日本法理研究会というのをやっていた。これにぼくは非常に関心を持っていた。いまでも、聖徳太子が非常に好きなんです。キリスト教と非常に似たところがあるから関心をもって、日本人としての感覚からキリスト教を再検討するのでなしに、クリ

ル・マルクス大学神学部のエーミール・フックス教授のお世話になり、東ベルリンでは、もっぱら「キリスト教民主同盟」(一九四五年に成立したキリスト教政党、共産党と協力)の人たちのお世話になった。ということは、現在の共産主義政権に対して少なくも協力的な態度をとっている人たち、ということである。自然、そういう人たちを通して聞く教会対国家の問題についての話は、明るい積極的な話が多かった。

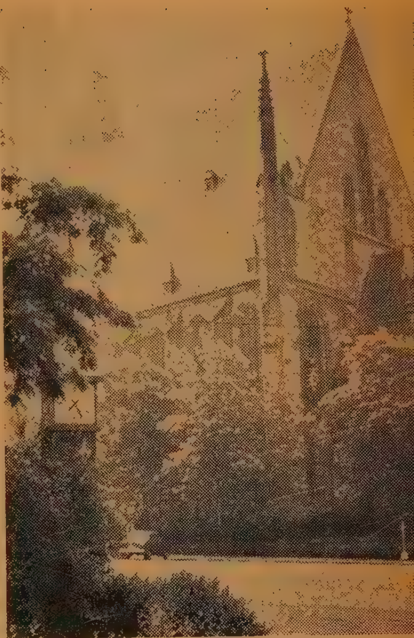
わたしたちが教会と国家の関係の現状について知りたいという希望をのべたので、ベルリンでは政府の宗教局に案内されて、局長代理のハンス・ヴァイゼという人の話を聞いた。この小柄な役人は、東独での反宗教宣伝や教会に対する国家の財政的援助や成年式についてのわたしたちの質問に対して、次のように答えてくれた。

「科学的世界観にもとづいての宗教批判はもちろん自由だが、政府自身が反宗教宣伝をするということはない。むしろ、国民の宗教的信仰を軽蔑するような言動は禁じられている。たとえば西側からはいってくる映画でもそういう内容のものは上映を許されない。教会の財政についても、四五年以後は、それまで行なわれていた『教会税』という形は廃止されたが、国家は年間千四百万マルクの補助(教会税による教会の収入の約半額)を、教会に与えている。成年式については、誤解されているようにこれは政府自身が行なっているのではなくて、成年式中央委員会が大工場などの経済的負担によって行なっていて、政府はこれに対して、経済的援助を与えてはいない。しかも、成年式に参加するかしないかは子供の自発的な意志にまかせられていて、参加しないために、なにか社会的なハンディキャップを与えられるというようなことはない。この式で子供が宣誓する宣誓文も、決して反キリスト教的なものではない」――そのように言って、ヴァイゼ氏は、その短い宣誓文を読んで聞かせてくれたが、それは、国民の幸福のために働き、社会主義建設に協力し、平和のために戦うことを宣誓するというような比較的中立的な内容のものであった。

ベルリン滞在中わたしたちの世話をしてくれたキリスト教民主同盟の機関紙『新時代』の編集部のヨアヒム・ミュラーという人は、平信徒ではあるが平信徒伝道者として教会に奉仕している三十代の信頼できる人だったが自動車の中で、「ぼくにも小さい子供がいるが、彼らが大きくなって、自分で決心して成年式に参加すると言い出しても、ぼくはそれを悲しんだりはしないだろう。もちろん、それをとめたりはしないだろう」と、わたしに言っていた。しかし「東独の教会には、きみのように考える牧師がたくさんいるだろうか」というわたしの質問に対しては、「そういう牧師は残念ながら少ない。大方の牧師は、成年式の問題では、政府とまったく対立している」と、首を振って答えていた。

残念なことに、わたしたちは短い滞在中、成年式に反対するそのような牧師の声を直接聞く機会を持つことはできなかった。しかし多くの教会が、ことに成年式のための準備教育を、少年たちを教会から引き離すための政府の反キリスト教的な工作として、猛烈に反対し、成年式は堅信礼と両立しないという強硬な態度をとっているということは、わたしたちが、日本でも聞いていた通りのようだった。プラハの会議に日本代表としてゲッティンゲンから参加したY氏は、プラハでわたしたちに自分の経験を話してくれた。「東独の教会の堅信礼準備の教育はすごいですね。教師が堅信礼志願の子供たちに、天地をお造りになったのはだれか、それはスターリンか、と聞きます。そうすると、子供たちがいっせいに大きな声で否と答えます。教師はさらにそれはフルシチョフかと聞きます。そうするとまた、否と答える。そういう調子ですからね」と、言っていた。

しかし、そのように今の共産主義政権に対して全面的に否定的なキリスト者と、キリスト教民主同盟に属している人たちのように積極的に協力的なキリスト者の間には、その両者のどちらともちがった態度で生きているキリスト者もいるようであった。わたしたちはベルリン滞在の最後の日に、東独のクエーカー本部を訪問した。そして、マリー・プライスナーという六五、六歳に見えるクエーカーの婦人の話を聞いた。東独でキリスト者とし



東ドイツのキリスト者

井上良雄

わたしは六月一三日から五日間チェコスロヴァキアのプラハで開かれた第一回全キリスト教平和会議に出席したあと、同行の関屋正彦、四竈一郎の両先生といっしょに、国境をこえて東独にはいり、ライプチヒ、ポツダム、東ベルリンなどを旅行した。わたしたちが東独に滞在したのは六月二〇日から二八日にかけてだから、ベルリン問題をめぐって東西の緊張がようやく激しくなろうとしていたころであったわけである。しかし、わたしたちは六月六日に日本を発って以来、ウイン会談は成功裡に終ったという日本の新聞を見おさめに、旅行中、新聞というものをほとんどまったく手にしていなかったので、東独がそんな国際的緊張の焦点になりつつあるとは知らずに、一〇日足らずの滞在の期間をすごしていた。東ベルリンで、放送局のインタビューがあって、東独の単独講和をどう思うかという質問を受けてもなんのことかわからず、トンチンカンな受け答えをしていた。有名なブランデンブルク門を歩いて通って、西ベルリンの空気を一〇分ほど吸ってきたが、門から一〇メートルほどさきの道ばたの芝生の中でリスが遊んでいるのを見つけて、のどかなものだと感心したりしていた。

しかし、そんなのんきな旅行者にも、東独に立ちこめている重く緊張した空気は、皮膚に感じられた。それは、丸ビルのようなアパートがいたるところに建てられて、人々が旺盛に忙しそうに歩きまわっているモスクワの空気ともちがっていたし、過去の栄光の夢を追って人々が生きているような甘く美しくけだるいプラハの空気ともちがっていた。終戦後一六年たった今日も爆撃のあとの廃墟がそのままになっていたり、そういう建物が撤去されたところも、雑草のしげる空地のまま町の中に大きな口をあけたりしていた。松葉杖にすがったり手押車に乗った不具の人々が、いたるところで目についた。人々は、笑いを忘れたような重苦しく厳しい表情で、町を歩いていた。

わたしたちが東独を訪問した目的は、この国の共産主義政権のもとでキリスト者がどんな心持で生活しているか、この国の教会国家の関係がどんなぐあいかということを知ることであった。わたしたちは日本にいたころから、この国の教会がいろいろの試錬の中で生きているということを聞いていた。一九五三年の東ベルリンの反政府暴動によって、教会に対する厳しい政策は大きく変化したとはいうものの、とくに青少年の教育の問題について、政府が、教会の堅信礼に対抗して始めた成年式（ユーゲント・ヴァイエ）をめぐって、教会と政府は正面衝突の状態だということを聞いていた。

わたしたちが東独に入国できたのは、プラハの会議に出席していた東独の教会の代表の招待による。そして、ライプチヒでは、カー



平和の使徒たるの道

――京都の世界宗教者平和会議から――

飯島宗享（いいじま むねたか）

1　だからわたしたちは教会に呼びかける

銀座教文館の建物といえば、そこには日本基督教協議会があり、日本基督教団があり、その他もろもろの関係機関のあるところだ。某日朝、出勤した職員がこの建物の一室の、まさに発火寸前の熱気に満ちた状態にあるのを発見、幸い火事にならずにすんだと思いたまえ。前日にその室を使用したある牧師さんが、電熱器をつけっぱなしで帰ったのが原因だった。やがて現われたその牧師さんを責めると、彼はこう答えたそうだ――「帰宅してからそのことに気がついて、火事にならないようにとわたしは一晩じゅう祈っておりました。」なぜ飛んでもどってくるなり、管理人に電話をするなりしなかったのでしょうと、わたしにこの話を告げてくれた老婦人は驚いていた。おそらくこの牧師さんのことなら、火事にならなかったのは彼が祈っていたからだと信じているかもしれない。いや、かりに火事になったとしても、彼はその事実に摂理を読むことをするばかりで、彼自身の行為についてはさほど思いをめぐらさないということがおこるかもしれない。彼にとっては祈りがすべてであり、彼のなすべき、また彼のなしうる行為は祈り以外には存在しないらしいからである。

　まず唖然として、それから大笑いをして、しかしその笑いの途中で頬の筋肉がひきつれてきて、悲しいほど厳粛な気がしてくる話だった。どんな作り話もこれほどうまくはできまい。あまりといえばあんまりな事実だが、ありえない事実ではないことがわたしの笑いをひきつらせるのであり、この事実をうみだす同じ傾向が日本のいまの教会のなかに、しかも少なからず存在することがわたしを厳粛にさせるのである。祈りが人間にあたえられた、なしうる最後的絶対的なものであるだけに、祈りを大事にすることは、それに先だって人間の知恵と勇気とでなしうることをなした上での、あるいはそれをなすための、またそれをなしつつの祈りであることを要求するのではあるまいか。それを欠いたままで祈ってはずかしくないものだろうか。

　たしかに、わたしたちの知恵には誤りがある。わたしたちの力にも限りがある。だからといって、しかし知恵も力も用いないでいいとは言えないだろう。むしろ、だからこそ知恵と力の不備のなだめとして祈ることが絶対的なものとしてあたえられているのだとわたしは思う。火事を防ぐために消し忘れた電熱器の処置を講ずるのは、かの牧師さんででもなければ簡単である。だから、この話は笑い話にもなる。しかし、ことが平和の問題となると、たしかに電熱器を処理するほど簡易でも自明の手段が知られているわけでもない。

て生活する場合に、どんなことがいちばん困難かというわたしたちの質問に対して、「キリスト者にとって生きることが困難なのは、なにも東独だけではないと思います」と前置きして、いろいろの話をしてくれた。彼女は東独の一般の教会がキリスト教を反共産主義と一つに考えている態度に堪えきれなくなって、一九四八年に教会から離れたと言っていた。彼女は、キリスト者は反共産主義というような態度を取るべきではなくて、むしろ共産主義者の友だちとなって、彼らのために仕えたいと願っている。しかし、共産主義者は心の扉を開いて自分たちを受け入れようとはしない。彼らは強制収容所などであまりひどい扱いを受けたので、もう人間を信用できなくなってしまっている。それが自分たちにとっていちばん苦痛だ。そのように言いながらこの老婦人は、涙を拭っていた。

このような態度は、この婦人のクエーカーとしての信仰から生まれたものにちがいないが、しかしそのような態度は、単にクエーカーだけのものではなくて、その数がどれほどのものかはともかくも、反共的な牧師やキリスト教民主同盟の人々の間に、いわば第三の態度で生きているキリスト者がいるといっていいのではないだろうか。

わたしは東独を離れたあと、ハンガリー、ソ連をまわって、ストックホルムから南まわりの飛行機で日本へ帰って来たが、その飛行機の中で、日本から持って来たヨハネス・ハーメルの本を読んですごした。ハーメルは、日本でももう多少紹介されている東独のナウムブルクの教会の牧師だが、バルトの影響を強く受けていて、今年五一歳のはずである。今度の旅行で、わたしがぜひ会いたいと思った人のひとりだが、ナウムブルクまでゆく時間がなかったために、会うことはできなかった。

彼はその著書の中で、こんなふうに書いていた。——マルクス主義がなんであるにしても、それは神のない場所ではなく、福音が達しない場所ではない。また、それは、われわれが救い出されなければならない地獄でもない。それはやはり、主の再臨に至るまでの神の歴史の一ページである。したがって、共産主義政権の力に対して反抗するか屈服するかということが、われわれの最後の問題ではない。恐怖からそれに反抗することも、その大きな力に眩惑されてそのキリスト教的同伴者となることとも、ともに不信仰である。イザヤやエレミヤは、アッシリヤ、バビロンなどの強大な力に対して、そのような態度のどちらもとらなかった。また、その中間の態度もとらなかった。彼らは、それらの国々を、「神の怒りの杖」、「神の僕」、神によって用いられている道具とみなした。それと同様に、神はマルクス主義を用いて恵みからわれわれを打ちたもう。過去数世紀の間、特権的な地位に安んじていたドイツの教会は、それによってはじめて「旅人またやどり人」というその正常な姿に帰りつつある。聖書はいまこそ過去の書物であることをやめて、今日のわれわれのために書かれた書物となりつつある。——

わたしは、このようなハーメルのことばを読んで、やはり深い感動を覚えた。東独の現状の中で、はたしてどのような生き方がキリスト者として正しい生き方なのか、単なる旅行者として東独を訪問したにすぎないわたしが、判断できることだとは思わない。しかしあの東ベルリンで会ったクエーカーの老婦人の姿やハーメルのような人の姿は、わたしの心にやきついて離れない。彼らの生きている国では、キリスト教は少なくも好意をもって迎えられてはいない。そして、すぐ目の前には、西独の世界が広がっていて、そこではキリスト教は（人間的に言えば）申し分のない条件の中に置かれている。それは、彼らにとっても誘惑でないはずはない。しかし、彼らは、西の世界へ逃げ出そうとはしない。彼らは、東独を自分たちが生きることを命ぜられた場所として、そこに生きようと決意している。エレミヤのことばのように、その「捕え移された」「町の平安を求め、そのために主に祈」ろうとしている。彼らのような人々がいるということは、東独の教会にとってだけでなく、世界の教会にとっても、大きな励ましである。

（東京神学大学教授）

（写真は、ライプチヒの聖トマス教会。バッハが、長く楽長をしていた。）

生活する宗教人が、世界平和のために語り合い、具体的にただちに寄与できることとして何があるかを求めあうことを主としていた。勢のいい決議や宣言を出すことよりはまず誠実な語りあいを実現し、その空気を平和運動の財産とすることが目的だったからである。清水寺貫主大西良慶師が基調報告のなかでとくに強調して望んだこの空気は、京都会議の誇りうる一成果となりえたように思われる。だが、話しあいの結果は自然のなりゆきとして共同の意思表示を求めることとなった。参加者のほとんど全部が多くの点で容易に意見の一致をみたからである。各分散会のまとめとして報告されたものは、表現の強弱はあっても、政治的に突っこんだ取り組みのなかで具体的方途を出したものであった。軍備全廃・原水爆禁止・核非武装をどのようにして実現するか、そのためにわれわれは何をなしうるかが、直接の課題であって、われわれが手近かに具体的に手がけることを考えようというのであったから、世界政治に直結する緊張緩和、力でなしに話し合いで問題解決をはかるという線を諸般の問題に適用したケースが出てくるいっぽうで、宗教者自身のみずからの宗団に対する呼びかけの重要性も共通して確認されていた。そのばあい見のがすことのできないのは、どの宗教もひとたび宗教集団として組織形態をもつようになると、宗団組織を護持発展させようとする宗団的利己心から、ともすると時の政治的支配権力と結びついたり迎合する傾向があり、そのためにその宗教の真姿が失われがちだという認識から、われわれがここで信仰的良心にみちびかれて平和のために働くのは、それぞれの属する宗教・宗派の宗教的生命を復活させることであるという意見がみとめられたことだった。

　京都宣言は各分散会からの報告のうち共通したものを一括して表現し確認したものにすぎない。起草委員会はしかし徹夜しても終らず、最終日の本会議を三時間おくらせてやっとまとまるほど難航した。それはなぜか。分散会報告のうち、世界会議にふさわしい問題の取りあげかたをするについて、日米安保条約など幾つかの問題に関しそれを国内問題の枠に入れるか国際的関連に入れるかの処理について異論があったこと。また、帝国主義・ファシズムという表現の取りあつかいについて少数意見、というより孤立した意見との調整に、時間をかけたことなどがその原因である。総じて、少数意見を大事にしすぎるほど大事にしたことが、この会議の特徴といえよう。しかし、会議の趣意書に盛られた内容をとりさげては会議は無原則で、意味のないものになり、趣意書に賛成して代表を送り出し

京都宣言

世界平和に寄与する道を求めて、日本の京都で一九六一年七月二五日から二八日にわたり開催された世界宗教者平和会議に、わたしたちは「軍備全廃・原水爆禁止・核非武装」というこの会議三つの主題を討議するために参集しました。そしてわたしたちは、わたしたちのなすべき具体的な仕事を見いだすために、種々の問題を十分に討議しました。わたしたちは、信仰・信条を異にするとはいえ、人生に対しては宗教者としての共通の態度をもっております。わたしたちは宗教的・精神的態度が、内なる心の平和と外なる世界の平和を結びつける目的をもっていることを確認しました。したがって、心の平和はすべての人々の幸福なしには不可能です。宗教者が人類の福祉に関連するすべての問題に対して責任を感ずべきであるということを信ずる点において、わたしたちは完全な意見の一致を見ました。

　現在直面している最も重要なことは、戦争と平和の問題であります。わたしたちをこの会議にみちびいたものは、それぞれの宗教から発する良心と知恵であります。わたしたちはわたしたち自身の見解を表明し、同時に他の人々の見解を進んで聞くために、ここに集まりました。この会議の目的達成を可能ならしめた本質的な態度は、寛容の精神であります。そしてわたしたちは次のような点で合意に達しました。

一、わたしたちは、軍備全廃をめざし、次のように考えます。

　この目的を実現するために、日米安全保障条約などの軍事同盟条約は廃棄すべきです。いっさいの外国の軍事基地を撤廃すべきです。そして国際間の友好と相互の信頼にもとづく相互不可侵条約を締結すべきです。

だが、だからといって無為にただ祈っているだけではこの笑い話と同じことだろう。それなのに、この牧師さんのことを笑ったり憤ったりするほどに、ひとは平和について無為に祈ることを笑ったり憤りはしない。この矛盾に日本の多くのキリスト者が気づいて何事かをなすようになってくれる日まで、たとえ誤り多いものにもせよ、わたしたちが平和のために何事かをなすことは、それ自体が、わたしたちキリスト者の社会的責任をになうことである以外に、日本のキリスト教界に対するわたしたちのキリスト者としての証しの意味をもちつづけるだろう。

京都でおこなわれた、世界宗教者平和会議に参加したわたしたちキリスト者のこの意図は、会議の内容や、京都宣言の批判に先だって、正確に汲んでおいてほしいことである。

2　願いは党派性にとらわれぬ良心と知恵の会議

昨秋来、日本ではあらゆる民主的運動・平和運動の内部で、政党の主導権あらそいが目立つようになり、政党的こだわりをもたぬ人人を顰蹙させるとともに、運動の統一の癌となってきた。政治的偏向ということばがあるが、これはことばの綾で、実際はある政党が他の政党のやりかたに異をたてるための、その政党の偏向にひきいれるための政略的なやっつけことばの意味が強く、これをはやりことばにしたてあげたマスコミの意図も、またその辺に見なければならない。運動そのものがどう政治的に偏向しているかの分析もたしかに必要だが、諸政党による政党的偏向から運動を守ることにも、注意ぶかくなければならないだろう。平和はもともと政治と無関係ではありえない。人間尊重のヒューマニズムに発する平和運動が政治に影響をあたえる力となりながら、しかも一党一派のもちものとならないためには、容易ならぬ努力を要する。しかもこの努力が効果をもたぬかぎり、統一と連帯が最大の力であるはずの平和運動の統一はたもたれない。

世界宗教者平和会議は、このような情勢を憂慮して、まず平和運動の統一を念願する者の第一歩を、党略から自由にされた宗教人のみずからの信仰にもとづく良心と、知恵による話しあいの場を作ることから始めようという発想に立って、くわだてられた。それは、平和運動全体のなかでの平和運動に対する宗教人の責任として、自然に芽ばえた考えかたであるとともに、人間尊重にもとづく平和運動であるにもかかわらず、キリスト教・仏教を問わず各自の属する宗団があまりにも冷淡であることに対する責任感が、その面での反省と打開策をもとめる考えかたと重なって、会議を実行するエネルギーをうみだしたといえよう。京都の一牧師の発案がサルボーダヤ・サンガと称するガンジーズム団体を通じて日本山妙法寺の熱心な肝入りとなり、やがて実行委員会の出発となった背景には、そして非常に多くの人の献身的な努力で会議を成功させた背景には、この心意気があった。会議の成果として外面にあらわれた京都宣言のなかで、このことが必らずしも十分に表明されていないのは残念だが、このためには趣意書と基調報告と京都宣言の三者を一体として、はじめてこの会議は正当に評価されることになろう。

3　京都宣言ができるまで

七月二五日から二八日までの会期中、実質的な話しあいがおこなわれたのは第二日と第三日の二日間の分散会だった。本会議のなされた京都会館は豪華な設備で申しぶんのない会場だったが、四つの分散会のもたれた公会堂は、冷房装置もなく京都の夏を遺憾なく味わせてくれた。隣室の声もとどくし、マイクの加減もよくなかったり、必ずしも条件はよくなかったが、どの会場でも熱心に卒直な意見の交換がなされていた。もともと今回の会議は、西から東からそれぞれの国情のもとで

されなかった。外国代表は、総じて彼らがめいめいおかれている国情を、忠実に会議に反映する発言をした。その意味では、世界全般の視野という点で、日本人は自信をもっていい面と、もっと日本的状況そのもののなかからの考慮をすべき面と、両面からの反省をもたされただろうし、諸国の問題をその切実さにおいて感得する機会をえただろう。アメリカ帝国主義が、敵だといわずにいられない中国、アメリカの経済援助で生活がささえられているというラオス、われわれは方針を定める前に、まず事実としてそれらのことを彼らの心で受けとめる機会をもった。個々の外国代表をめぐるエピソードは別の機会にゆずるとして、一、二のみをあげれば、太陽が南中する正午までにいっさいの飲食を終っていなければならぬ戒律が南方仏教にあるのを知ったこと。それから、起草委員として李牧師その他が徹夜で苦労しているのを、自分だけ安閑と眠れはしないという風情で、離れて見守りながら徹夜で労をともにした中国ＹＷＣＡの施女史の微笑した姿に心うたれたこと。

予想を上回る大会議になるに伴い、三百万の予算が五百万近くに補正されたが、これがすべて宗教関係者の拠金でまかなわれたことは報告しておかねばなるまい。外部からは、レセプション用に京都の府市から三〇万を受けたのがすべてであった。おぼえておきたいのは、このうちキリスト者の分担したのがわずかに三〇万、小宗団である日本山妙法寺が宗門をあげての托鉢で、この会議に寄せた金額が一五〇万という対比である。少ない経費と準備体制の不備のなかでは、献身的な奉仕のみが、この会議を成功させたというしかない。あげれば限りない名の人々の、功績である。しかし、宗教人の善意のみで合理性を欠く現状を放置しては、こんごの会議に同じ苦労を重ねるだけでなく、平和運動そのことの正しい発展のためにもよくないだろう。

世界宗教者平和会議は、その成果を継承発展させるために恒常的組織をもつことになった。プラハの全キリスト者平和会議は、本年の会議のために何年も準備を重ねてきたという。京都会議はブッツケ本番だったが、新たに発足する恒常組織は、宗教者の平和運動の国際センターにふさわしい実質を、あらゆる意味で期待される。プラハの準備組織はよい手本になってくれるかもしれない。それにしても日本のキリスト教界があげて平和のための良き働き手となるのは、いつのことだろうか。

（一九六一・八・二七）

（東洋大学文学部助教授）

き諸国の加盟、第二に中華人民共和国の国連における正当な権利の回復を促進するよう呼びかけます。

一一、わたしたちは、南朝鮮の事態を深く憂慮すべきものと考えます。南朝鮮からいっさいの外国軍隊は撤退し、南北朝鮮の平和的な話しあいによる統一の獲得が必要であると考えます。これは世界平和保持のために不可欠のものであります。

一二、わたしたちは中立政策をとりつつある諸国が、世界平和に積極的な貢献をなしている事実を高く評価します。

一三、わたしたちは、平和運動における団結が世界平和にとって最も強力な力であることを信じます。わたしたちは、平和運動におけるいっさいの分裂的な動きに反対します。わたしたちはこの大会において見いだしたものをみずからの宗団にもちかえり、それぞれの宗団内に、志を同じくするものの増大をはかることに最善の努力をします。わたしたちは、他の諸階層から成る国民的平和運動との協力と連帯とを強化します。

一四、わたしたちは、過去数年にわたる原水爆禁止世界大会の成果を高く評価します。またわたしたちは、近く東京で開催される第七回原水爆禁止世界大会の成功を祈り、心からなる挨拶をおくります。

一五、最初の原爆が広島に投下された記念日である八月六日「原爆の日」を原水爆犠牲者の追悼と、世界平和のための活動の日として、全世界において守られるようにします。

一六、わたしたちは、軍備全廃のための署名運動を世界的にくりひろげます。

一七、わたしたちは、この会議の成果を具体化するために、常設的な組織をつくります。そのために国際的な委員会を設けます。

てくれた背後の多くの人々をあざむいたことになる。まして、問題がもっぱら表現上のことで、その意味する内容についてだれにも異論がないのであってみれば、留保する一人のために、すでに趣意書で明らかにされている「帝国主義反対」を抹殺する必要はなかった。

ひとつ、ここで考えることは、「わたしはそれでよいが、その表現では背後の人たちがつまずくであろう」ということばの問題性である。事実そういうこともありうるし、良心的なことでもありうる。しかし、それが自分の意見に責任をもとうとしない言いのがれの態度でないとしたら、わたしは問いたい。あなたの背後の人たちはなぜあなたでなしに、自分たちの意思を自分の意思として表明する人を代表としないのか。また個人の場合であるならば、あなたはあなた個人の意見を表明すれば十分で、だれもが自分の意見をめいめい自分の意見として表明し、責任をとるべきで、なまじ独断的に大衆の意思なるものをだれかが代弁することが紛糾のもとで、そんな権利は正当な手続きによる以外だれにもないのではないかと。

4 外国代表のことなど

京都会議の意義は、日本の実行委員会が考えていた以上に外国で高く評価されたようである。それが国際情勢であることをわれわれは再認識させられた観がある。旅費自弁のため、強い希望をもちながら参加を断念した例がとくに西欧諸国に多かったことは、こんごの問題として研究されなければなるまい。参加することになったのは、オーストラリア、ビルマ、カンボジア、カナダ、セイロン、中国、チェコ、東・西ドイツ、インド、朝鮮、ラオス、ポーランド、アメリカ、ソビエト、ユーゴーの一六ヵ国四七名。そのうちキリスト者は一七名（ギリシア正教二、カトリック二）。時をおなじくしておこなわれた日本共産党大会への外国からの参加者を閉め出したため、他の会議を口実に潜入する外国人を防ぐため、厳重な審査を要すると称して、政府は、外国代表の入国許可を容易に出さなかった。このため、若干の代表は遅参し、ソビエト、ポーランドは遂に最終日までまにあわなかった。朝鮮代表は入国を拒否され、在日代表の参加となり、中国、東独は小刻みの滞在許可に苦労させられ、このようなことで旅行の自由さえ現在の政治情勢の歪みのなかでは存在しないことが、この会議の意義を再認させる助けとなった。ソビエトからバプテスト教会と福音ルーテル教会の代表者が来ることも、日本のキリスト者に注目されたが、こうして彼らの意見を会議のなかできくことは許

二、わたしたちは核戦争の危険を啓蒙するため、放射能の害をひろく全世界の人々に知らせる運動を進めます。
さらに被爆者の苦痛を救うため、物心両面においていっそうの努力をします。

三、わたしたちは、すべての関係諸国に対し、アジア地域および中部ヨーロッパ地域、次いで全世界に核非武装地帯を設けることを呼びかけます。現在すでに核兵器を保有している国々には国際的な監視と管理のもとにこれを廃棄するよう呼びかけます。

四、わたしたちは、国連およびすべての関係諸国に対し、軍縮委員会が迅速かつ成功裡に結論を出すよう促します。
同様にわたしたちは、核実験停止会議に対し軍縮に関して協定が成立するまで実験の停止をつづけることを要求します。

五、わたしたちは、国連に対し、加盟国が軍備全廃のためのひとつの段階として、軍事予算の削限を促進するよう呼びかけます。

六、わたしたちは緊迫したベルリンの危機が平和的な話しあいによってできるだけ早く解決されるよう要望します。

七、わたしたちは世界における植民地、半植民地の民族独立運動を支持します。また、帝国主義植民地主義のあらゆる形の圧迫と侵略に断乎反対します。

八、わたしたちは、信仰・思想・言論の自由など基本的人権を脅かす、ふたたび抬頭してきたファシストたちの諸政策に反対し、人民の民主主義的権利を擁護します。

九、わたしたちは、いかなる人種差別にも反対します。

一〇、わたしたちは、国連が真に世界の平和を維持するための効果的な機関となるよう希望します。この目的のために、第一に加盟国であるべ

わたしは、いつものしかめっつらはどこへやら、ニコニコ微笑をたたえ、病める人々にしずかに聖歌をうたってあげたのです。そしてわたしなどの苦悩は、ほんとうに取るにたらぬものだ、もっともっと苦しんでいる同胞がいると思うと、自分に力がわいてくるのでした。療養者の人々に楽譜を渡し、いっしょにうたったとき、そこに魂のとけ合いが生まれたのです。主の降誕を祝う心と同時に愛が生まれたのです。感激でわたしの目はうるみました。

そのカロルが終って解散し、ひとりトボトボと感激と感謝で帰ろうとしたら、聖歌隊のメンバーの一人のSさんが「大窪クーン」とわたしを追っかけて来たのです。そしてSさんと「K」という喫茶店へ行って、最近の考えていることをぶちまけ合ったのです。そこでわたしは『佐古純一郎著作集』のなかの、氏の自伝「大いなる邂逅」の話を聞いたのです。次の日さっそく書店で買い、読みはじめました。ところでどうでしょう、そのなかで氏自身も、若き日にめぐり合った小林秀雄の「君は君自身でいなさい」ということばに合ったときのわたしの驚きと喜びは……。わたしはこのことばに完全にとりこになったのです。そして、よし、おれはおれ自身でいよう、そしておれはこの苦悩を愛し、虚無を愛し、現在を愛し、自分の欠点も愛していこうと思ったのです。けっきょく、自分自身にそれがおまえの個性なのだと言い聞かせて……。

が、わたしは決して現在のわたしに満足などしていないのです。より社会的な、現実的な使命をもって愛の働きかけをしたいのが、わたしの願いなのです。もちろん、わたしはなにもできる人間ではないので、教会内の小さな、わたしのできうるかぎりの協力からの出発なのです。

わたしは最近あのロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』を感動こめて読んだのですが、わたしの最も好きな個所は、クリストフの伯父ゴットフリートが言う次のようなことばです。

「日の出に対して信心を持つんだ。一年後のことや、十年後のことなど考えるんじゃない。きょうのことを考えるがいい。おまえの理屈など捨てちまうんだ。理屈なんてものはみんな、いいかね、たとえ道徳の理屈だってろくなものじゃない。ばかげたものなのだ。害になるものだ。生活に無理をしてはいけない。今日に生きるのだ、一日一日に対して信心を持つのだ。一日一日を愛するんだ。とくにそれをしおれさせちゃいけない。それが花を咲かせるのをじゃましちゃいけない。きょうのように灰色で陰気な一日でも愛するんだ。心配することはない。ごらん、今は冬だ。すべてが眠っている。強い土地は目をさますだろう。強い土地でありさえすればいい。信心を持つがいい、そしてお待ち、もしおまえが強ければ、すべてがうまくいくんだろう。たとえおまえが強くなく弱くて成功しないとしても、それはそれなりで幸福でなければならぬ。もちろん、それ以上にはできないからだ。それなのに、なぜそれ以上のことを望むんだ？　なぜ自分でできないことを悲しむんだ？　自分でできることをしなければいけない。自分のなし得る限りをね」とロマン・ロランは書いております。このめまぐるしい現代にとって必要なことばではありませんか。また心の重荷を負える人々に必要なことばではありませんか！

わたしの心の遍歴の底を流れる大きな媒体は、洗礼によって主にめされたことによって強められたような気がするのです。教会という一つの組織の中に属するわたしとして考えることは、教会はひ弱な人間の製造所ではないのです。むしろ強くされる所なのです。社会が騒然となればなるほど必要な所なのだということです。そして教会生活を送りながら待つということと……。

（盛岡聖公会々員）

読者の証し

待つということ



（盛岡市）
大窪　光

わたしは二四才の公務員です。昭和三二年一二月二二日のクリスマスに洗礼を受けました。声楽を志していたわたしは、アムブロシウスという教名をいただいたのです。

さて、わたしの教会生活がスタートされました。まず青年会の正会員となり、自信のないまま運営をまかせられたのです。ところでスタートは実にはなばなしいものでした。大計画を立て、それこそ飛ぶ鳥も落とさんばかりのいきおいでした。それが四回、五回と例会をつむにしたがって会員もへり、それは寒寒とした例会になってきたのです。けっきょく、わたしも教会なんてつまらん、と自己中心な考えをもつようになり、教会を休みがちになっていきました。いま考えてみると、実にこっけいなくらい自己中心であったわたしには、神の公平な裁きがおとずれたのでした。そして、わたしの埋もれる青春の魂の苦闘がはじまったのです。完全に孤独でした。もちろん、職場で働いてもおもしろくなく、人ぎらいになっていったのです。好きな声楽もプッツリやめ、なにも手につかず、たえずおびえているわたしになりました。そして何度祈ったでしょう。「どうかこの悪魔的霊を取りたまえ」と。「我れに向いて、主よ主よ、という者ことごとく天国に入らず。ただ、天にいますわが父の御心を行なう者のみ、これに入るべし」という聖句がありますが、とにかくそれでも一心に祈ったのです。

わたしの勤務している県庁へ行くには、朝必ずその教会の前を通らなければならないのですが、自転車でその前を通りながら、わたしは必ず屋根のほうに浮き彫りにしてある十字架を見上げるのです。そしてすぐ考えました。あの主の声、「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」（わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか）」を。わたしはほんの一瞬ではありますが、これを思うとふっと心が軽くなり、ペタルを強くけり、役所に向かうのでした。

教会を欠席し、司祭の家を訪問し、ダラダラ愚痴をこぼし、そんな自分にあきあきしたのでした。司祭はそれでもわたしに対して変わらぬ公平な愛を示してくださいました。教会へ出席するよう、何度もお手紙をいただいたのですが、その愛を、そのたびに裏切るわたしだったのです。

昨年のクリスマスに案内状をいただいたのですが、出席してみようかな、という気持ちになり、実にしばらくぶりで礼拝に参加したのです。人間の心！……それは実に神秘的なものです。たえず祈り、そして待ったわたしはその礼拝に参加し、ひざまずいて祈りをささげても、ホッペタが、東北のあの厳しい寒さにもかかわらずポッポッとほてり、神ともにいます、というあの平安な心でもって礼拝、および祝会に出席したのです。その夜はクリスマス・カロルで、病院を訪問したのです。が、わたしにはそんなことに参加することは不可能なことだと考えていたのですが、参加しえたことはわたしにとって一つの奇跡だったのです。あの愛の霊にひたったときの



形で言うことがむずかしい。

石合　共鳴します。母が病気で、つとめと家事と両方で、苦労してます。妹は東京で好きなようにしている。どうして、わたしひとりでしなけりゃならないのかと思う。クリスチャンだからしっかりしなきゃと、あるていど、苦痛を自分で負う気持ちはあるんです。でも、看病したり、家のことしたりしていると、喜びをもてない。恵みとして受けとっていないんです。

石島　あまりけなげな話は、やりきれないけど、そういう話きくと、ホッとする。(笑)

石合　先生、握手しましょう。(笑)

佐藤　求道してたころ、家族が病気をして、心を痛めていると、教会の人は恵みだという。なぜかわからない。ひとの苦しみ、わかりもしないでと、反抗したものです。

田中　「わが恵み、なんじに足れり」というみことばを思っていると、苦しくても、恵みになってくる。わたしなんか、「いつ死んでもいい」と平気で言える。

山寺　田中さんの言われること、よくわかるんです。いまに、そういうふうに考えられるときがあるかもしれないが、いまは距離がある。教会に二〇年らい病気の人がいるんです。何度か手術して、何度か危篤になった。二〇才から四〇才まで、人生の大部分を、病床ですごしている。家庭の内部にも問題があり、経済的にたいへんで、教会員たちが一部ささえている。そういう状況のなかで、その人のために、どこにみ旨が行なわれ、恵みがあるのか。

松尾　一つのことでも、いろいろに考えられるんでしょうね。「不幸だな」と思っても恵みになることがあるでしょうし……。

佐藤　時と場合によるのじゃなくて、呼吸しているかぎり恵みなんでしょう。

田中　もっといえば、呼吸がとまるときも、平然としている、恵み……。

山寺　家庭のなかで、いろいろ人間関係がもつれる。やりきれなくなります。人間て、えて勝手ですから、いいときは、なにも感じない。問題のあるときは、恵みなんかなんにもないと思う。ときどき、恵みということが、わからなくなりますね。

石島　なぜ、苦労して、恵みをさがすんでしょうかねえ。クリスチャンのはしくれだから、教会で飼育されて、そう考えないとすまされなくなるんだろうか。

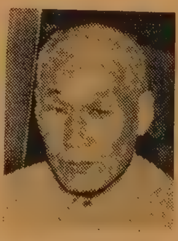
石合　徹底的に背をむけなかったら、いいんでしょうか。

石島　いいとか悪いとかじゃなくて、しょうがない。ヨブのように、タテついて、あがくときもあるんだし……。

田中　わたしのアトとりの娘が、リューマチで、いま起きあがれない。八八になるじいさんをかかえている。孫が問題をおこす。いろんなことがある。「そら、またきたぞ」と言ってる。まだ殺されないからいい。どうきりひらいてくださるのかと思っています。こっちのナマぬるさが、こういうことになるんだから、精進(しょうじん)しなくちゃと思う。皮肉のようだが、やはり恵みです。

石島　ぼくなど、恵みから遠いせいか、自分でしゃべってて、「なに言ってるのか」と思う。しかし、自分の浅ましさを先刻ご承知のかたが、迷いでて、さまよっているこの自分の主になっていてくださる。やはりこれは、うごかないんだな。

田中　松尾さんの小さいころ、教会は牧師がなく、松尾さんのおとうさんとわたしとが教会へとまりこんで、番をしとった。そのうち、松尾さんのおとうさんはきゅうに兵隊にとられて、とうとう帰らなかった。せつない悲しみですよ。しかし、それだけに、「守りたもう」と感じる。いま松尾さんが大学へ行っとりなさるのを見ると。



ひとを生かすウソ

石島　さて、「真実を語れ」ってことですが——ぼくの教会の、信仰に熱心な、ある婦人がガンのうたがいもあって、ハラを切開

真実を語れ

(司会) 石島三郎

【出席者】
田中浜平(69) 無職
佐藤綺志子(48) 主婦
山寺辰己(34) 会社員
石合まる子(29) 幼稚園教諭
松尾鮎子(19) 学生
陪席 S牧師

【場所】 長野県上田市、ある旅館の一室

【聖句】

「こういうわけだから、あなたがたは、偽(いつわ)りをすてて、おのおの隣りびとに対して、真実を語りなさい。わたしたちは、おたがいに肢体なのだから。」
(エペソ人への手紙四・二五)

証し

佐藤 教会で証しをする場合も、ほんとうの秘密は、しゃべりませんね。

石島 教会で証しをさせられるの?

山寺 月に一ぺん、証しの日があって、順ぐりに、網にかかってしまう。(笑) 証しの意味が、どうも、よくわからんです。大酒のみが禁酒した、というような話が証しだという先入感があって、なまのままの生活を話したんでは、信仰のねうちがない、というふうに考えられて、どうしても粉飾がはいってきますね。



田中 証しには、技術がいりますな。ざんげだとか世間ばなしでなく、ちゃんと、ひとつの恵みが語られなければならないから、修飾などもはいってきますよ。たいせつなのは、その人の生活をキリストがみちびいている現実ですな。これは、なかなか語れない。指導や訓練が必要です。

石島 それだと、ますます、技術的・修飾的になるんじゃないかな。

田中 口をひらけば語れるように指導しなくてはいかんじゃないですか。わたしは、教会生活が古いから、よくやらされるので、ちょっとこまるんですが……。

石島 牧師さんに訓練されないほうが、いいんじゃないかな。この座談会がおもしろいのは、シロウト衆の話ばかりで、クロウトの指導がないからだと思うんだけど……。

めぐみ

山寺 証しは恵みを語ることだという、そこに問題があるんじゃないか。恵みというものと、毎日の具体的な生活とが、むすびつかない。

田中 恵みと生活とに距離をおくことが、おかしい。わたしなど、七〇才まで生きて、こうして、しゃべってる。これは、かくべつの恵みだとおもいますね。

石島 五〇才で死んじまったら、恵みでないということにならないかな。(笑)

田中 長生きしても、早く死んでも、それぞれ恵みがある。Sという女の子は、小さくて死んだんですが、センセーションをおこしましてね。学校の先生が、「クリスチャンてああいうものか」と感心していた。

山寺 そういう、臨終の美しさだとか、いのちにかかわる場合とか、なにかエポックになるようなことは、恵みだと言いやすいんですが、日常の家庭生活のなかでは、それが言いにくい。過去形では言えても、現在

松尾　ウソを言ったことが、結果として、よくなったってことありますね。悪意でウソを言っても、結果として善意でやったようになって、心に安らぎを覚える、ってことも……。



田中　心の深みまで新たにされるとき、底意地の悪さも、よくなるですよ。

石島　ほんとを言っちまったら、破滅ってことない？

山寺　そりゃ、あるでしょうね。

佐藤　ありますね。ことに女の人には……。

石島　男にもある。「話せばわかる」って言うけど、「話せばダメになることもある。「雨ふって地かたまる」こともあるが、ヘンなものがコビリついて残ることもある。

ウラを考える

山寺　家庭では、言うことの反応が予測できる。となると、なかなか、ホントのことは言えない。

佐藤　ウラのウラまで見えますものね。

S牧師　信州人はウラばかり考える、って家内に言われます。ぜんぜん意識してないウラを、なぜ考えるのかって……。

石合　青年会にでてはじめて、ことばのウラってこと教えられて、ことばにウラがあるのかと思いました。

山寺　ウラだって必要ですよ。うちの女房はウソを言わないほうで、ホント言っちゃ、ソンしてる。「うまく言え」って言っても言えないのが、いいとこで、あらためて、ほれなおしたりする。（笑）ところが、そのうちに、そういう性格だってことが、まわりの人にもわかってきて、まだソンする面はありますけど、おふくろにたいしてはかえってトクになってきましたね。言ったとおりにとるようになってきた。

石島　ホントを言って、正札どおりにとってもらえる。そうした、正札どおりのつきあいをしたいもんだな。

ウソを負いきる

S牧師　ウソをついてるかわりに、なにかをする。つみほろぼしってことじゃなく、そのウソは、さいごまでつきとおして、そのかわりに、なにか、よけいにやる——ってことも、あるんじゃないですか。

佐藤　墓にまでしょっていくウソってあるでしょうね。それをうめあわせしたいという気持ちはありますね。

S牧師　人と人とのあいだは、ウソがないとなりたたないんですかね。

田中　なりたつ、と思うより道はないな。それによって、世のなかはよくなる。ある万引をした人が、オクスフォード・グループの指導者から、「それに相当したものを与えるように」と教えられた。

S牧師　うめあわせをつけられることと、つけられないこととが、あるでしょう。

石島　悪いことばかりしている人間だから、すこしは、ほかに、良いことをするようにつとめよう、ってことはあるでしょうね。

誠実に生きる

石島　イタについていないこと、自分のモノになっていないこと、そうしたことを語るのも、ウソでしょうね。りっぱなことを手あかのついたことばでしか言えないこともかなしいな、そうするほかないけど。

佐藤　自己批判がきびしいと、なんにも言えなくなりますね。

石合　いちいち、これは真実だろうか、ほんとだろうか、と考えていたら、なにもしゃべれなくなりますね。

石島　真実味がない、誠実さがない、そういう人間は、いやだな。ぼくらの生活は、けっきょく、ほどほどのもので、百パーセントのホントはない。そこで、ただ、このことばはウソか、ホントか、なんてことを言ってるんじゃなく、自分なりに、せいいっぱいの誠実さをもって、生きようとすることと、これがだいじなんじゃないでしょうかね。

（次回は「盗んではならない」）

しなくちゃならなくなった。その前に、ぼくは、「ガンだったら、どうする？　ホント言ったほうがいいか、ウソ言ったほうがいいか」ってきいたら、「ホント言って」と言いましたが、そうとうショックうけるでしょうね、ガンだと言われたら……。

山寺　おふくろがガンでしてね。医者が「上田では、どうしようもない」って言うんで「ガンじゃないけど、行こう」と、だましてつれてったんです。ガン研じゃ、もう手おくれだって言いましたが、けっきょく、なおったんですが……。

田中　ごまかそうとするときはウソになるけど、生かすためなら、ウソもホントだ。かくす所がなければいかん。あるがままを言うのでなく、相手のためになるように言うのが、「真実を語る」ってことです。子供がころぶと、「痛くない、痛くない」と言う。かくしておいてもウソじゃない。さらけだして、向こうをいためるのがウソだ。

佐藤　いろいろ条件がからむと、むずかしくなりますね。

田中　相手を生かすためという目標をもっていれば、けっしてむずかしくない。

山寺　誠実なウソを言わないと、商売はできませんね。いや、ウソを言ってるんじゃない。ホントのことを言うんだけど、そのホントのことの全部を言わない。（笑）

石島　それは、ウソだな。（笑）

よく見せる

松尾　教会へ新しく来るお友だちがあると、教会のよい面(めん)だけを見せてあげようとおもいます。かくすというわけじゃないけど。

山寺　ぼくなどは、「ケセラセラ(なるようになれ)」。（笑）

石合　いやな面は、やはり見せたくない。

佐藤　わたし、変則的なはいりかたでした。外部から批判しててクリスチャンの正体をひんむいてやりたいと思って……。結果としては、導きだったんですが。「きれいごと」言ってる人、クリスチャンに多い。



松尾　クリスチャンはモハンにならなければというので、他人によく見せたがりますね。ほかのクリスチャンにもウソをつく。

山寺　クリスチャンらしい人っていうのを、みんなで作っちゃうんだな。ぼくなんか、こまっちゃう。

石島　「らしい」のをきらうくらいに「らしい」のがいいんじゃない？（笑）

開いた心・閉じた心

山寺　家庭生活とか教会生活とかでは、ほかより、ホントのことをいうのが、もっとむずかしい。教会の交わりでは、なかなかホントのことは、聞けない。こっちも言ってないんだから、聞けるはずがない。

佐藤　プライベートな問題を、いちいち、教会へ持ちこむべきでしょうか。

S牧師　悩みを食って生きていくっていいますかね。いろいろ話すのを、そばで聞いていて、ハラハラするようなことがある。

佐藤　教会の婦人会など、親切が、キメがこまかすぎて、おせっかいになってしまう。

石合　ここに「隣り人にたいして」とありますが、いろいろな人間関係のなかで、どれだけ、真実が語りあえているか。心をわって話していない。よく見せようとか、よく思われようとか、そういうことでなく、うちに閉じこもってしまって言わない。

佐藤　わたしなども、あるていど、心のまわりをつつんでいますね。「人がわるい」って言われますけど……。

石合　そうできる人、うらやましい。（笑）

佐藤　さいごのものを開けない人間だと思うと、自分でさびしいですね。

石島　こっちが開いた気持ちにならないと、むこうも、開いてこない。

結果

佐藤　ウソから出たマコトっていうんでしょうか、言っているうちに、身につかないことも、そうしなきゃならなくなってくる。自分のウソに責任を感じて……。

石島　しかし、ひとつのウソのために、さらにウソをかさねることもあるでしょう。



＜信仰に生きる　10＞

女ひとり風雪に耐えて

——祈りに生きる一日本舞踊家の姿——

深窓の美女？

セミしぐれがしんしんとあたりを包む。

「わたくし、まだ食事なかばで……どうぞその間お休みくださいませ」

と、スクーターでとび込んだ記者とカメラ氏は、しばらく風の通る静かな居間で待たされた。まことに悠長な世界である。

それもそのはず、夏の休暇が何日とれる、超勤手当がどのくらいと、あくせく右に左に動きまわっているわれわれ俗世間の気流もおよばぬ、ここは日本舞踊のお師匠さんの家なのだ。きょうはおけいこがお休みの日、いつもならたくさんのお弟子さんがつめかけるところだが、立てかけた三味線が、手持ち無沙汰に二つ三つ並んで、客もない晩夏の午さがり、この家はひっそりと静まっている。

戦災を受けなかったという芝二本榎のこのあたりは、まことに緑が深い。だから、しんしんとしたセミしぐれだ。目的の女主人公を待つしばらくの間、窓から吹き入る微風を感じ、音もなくそそぐ午後の陽ざしをながめなどしていると、まるで別世界にきたような気持ちになる。夕方六時になると、すぐ近くの高野山のお寺から、幽玄な鐘の音が響いてくるという。スクーター、バス、タクシー、電車、その間をぬって豆腐屋の笛の音——こん

リバイバルブーム



リバイバルというとき、わたしたちキリスト者は明治初年いらいの、ことに明治一六年、横浜海岸教会最初の牧師ジェームス・バラにはじまり、全国各地に伝播していったキリスト教のリバイバルを想い起こす。そしてそこには真に生命あるものの再燃の姿を見ることができる。しかし、最近のいわゆるリバイバルブームは、生命あるものの真の復活であるといえるだろうか。

なるほど生活感情を率直に表現するという流行歌などでも、盛んに戦前戦中のものがうたわれ、お茶や生花も盛んだし、柔道や剣道も復活した。けれども、国家神道の復活、憲法改正、再軍備と、衣の襟からチラチラと鎧が見えているではないかと反問する向きもあるだろう。もちろん本気でこのことを画策している人々もいるようだ。しかし、大方の日本人の果して何パーセントが、天皇制国家の臣民のシンボルとしての乃木将軍を尊敬し、封建的な貧しさを美化する勤勉と節約の手本としての二宮金次郎にあやかりたいと思っているのだろうか。

昔うたわれ、、そしてリバイバルブームにのっていまうたわれている〝昔恋しい銀座の柳、仇な年増をだれが知ろ……〟というのがある。これは当時、勤倹節約の禁欲倫理を強いる国家への、大衆の反抗の歌でもあった。リバイバルは、必ずしも古い日本の復活にあやかるのみではなく、大衆の国家権力への抵抗でもあるのだとわかる。こうしてみると〝古い日本〟そのままのリバイバルはまず起こりえないと考えるのが至当であろう。

では現在のリバイバルブームは全く等閑視してよいかというとそうではない。古い日本を端的に表わす浪花節はもっぱら古い世代の人に喜ばれているようであるが、その生活感情は、歌謡曲の中に転化されて命脈を保っている。三波春夫、三船浩、村田英雄の歌がそうであり、美空ひばり、島倉千代子、三橋美智也とか、最近十代に圧倒的な橋幸夫の人気も、明治、大正、昭和にまたがる日本人の共通の〝血〟を雄弁に物語っている。そしてこの日本人の〝血〟がマスコミを手段とするコマーシャリズムによって、大衆を見えざる手であやつる仕組みになっている。戦時中のように報道管制や、検閲はなく、逆に大衆がみずから進んで見、聞いて喜び、満足感にひたっているうちに、たくみに一部の権力、財力の座にある人々の思うつぼにはまるように仕組まれている。

〝血〟が、ただちに再軍備をよび、憲法改正を是認するのではないが、すなわちリバイバルが直ちに〝古い日本の復活〟を意味するのではないが、過去の侵略戦争に直接間接に関わりをもった日本人が、戦争における加害者としての意識をもつこともなく、責任をとるでもなく、いっぽう大衆が軍事機構の充実、東南アジヤ市場への進出、国内反動化を図る人々の動きを等閑視するならば、リバイバルブームも、たちどころにひと握りの古い日本の亡霊たちのかなでるリバイバルのベースに、まき込まれる危険性を蔵している。

リバイバルブームの生活感情のすべてをたちきれというのは少し酷であるかもしれない。それは、大衆にとって日本人であることをやめることに通じる。けれども少なくとも日本の体制を逆行させて、その利益にあずかるのはだれかを弁別するならば、リバイバルの歌はくちずさんでいたとしても、〝幽霊の正体見たり枯尾花〟とブームを流していけるだろう。

（松本勉・日本YMCA同盟主事）

笑いくずれる放課後の同級生たちの明るいさざめきをよそに、そのころ花柳さんは、ひたいに汗さえにじませながら、やや傾いた午後の陽が降りしきる道を、一散に家に向かって歩いていたのだ。ほとんど走るようにして先を急ぐ、その一六才の少女の顔には、あの笑いさざめいている同級の女の子たちには見られない、思いがけないおとなびた真剣な表情がある。

「ただいまッ……」

ようやく家だ。昔の実践女学校の制服といったら、ローマの裁判官みたいな黒いガウンに似たもの、それを手早くぬぎ捨てると、もう花柳さんは、一六才の少女でもただの女学生でもなかった。

「お待ちどおさま、じゃ、さっそくおさらい、まずひととおりはじめからいっしょにやってみますから……」

三味線をひざに相対するのは、まだおさげの少女花柳さんと、四十年輩のふとったおかみさんだ。ちょっと見たところでは、どうながめてもこのおかみさんが師匠で、花柳さんは、新入りのお弟子さんといったところだ。が、じつは、師匠のあとにしたがって、ぎゅうぎゅうしぼるような声を出しておさらいをはじめたのはこのおかみさんのほうだった。

「はい、そこのところが合いません、トテチテシャン、とすぐ続けて、もう一度やってください」

りんとした声が花柳さんの小さな体から響く。おかみさんは、ふとった体をひとゆすりすると、汗をかきながらやりなおした。

――こうして、夜まで、花柳さんは、入れかわり立ちかわりの客に、常磐津、長唄、端唄、そして日本舞踊と、休むまなくぶっ通しで教えるのだ。そんなお弟子さんのなかには小学校の先生もいた。それも、ここでは順序が逆だ。一六才の少女がここでは先生なのだ。先生と、さらに若いその先生が相対する珍妙な風景――だが、それを笑うわけにはいかない。その背後には、少女とはいえ、少女の夢もふり捨てた花柳さんの、強い生活への意欲が波打っていたからだ。おとなの歩みは、ナマ身の生活を身にひき受けることからはじまるとすれば、一家の生計を一六才の細腕にになうことを決意した花柳さんこそ、すでにおとなだった。

もともと、長唄、常磐津、おどりといったこういう世界は、少数の専門家を除いては、道楽ごととしてたのしまれるのだが、今、花柳さんにとっては、これはけっして、道楽でもつれづれのなぐさみでもなかった。もちろん、花柳さんのこの道への出発も、そもそもは道楽としてはじまったのだが――

花柳さんが、当時、五反田桐ヶ谷の自宅近所にあった長唄のお師匠さんに弟子入りしたのは九才の春だった。とりたててそういう希望があったからというわけではなかった。母方の伯母にあたる人が芸ごとが好きで、娘二人に長唄を習わせていたのを、花柳さんの母親がほれこんでしまった。わが娘もあんなふうに……それだけの理由で、花柳さんはその市山小十松という名の師匠のもとに幼い足どりでかよいはじめたのだ。ところが、そのお師匠さんは、長唄ばかりでなく、端唄、常磐津、清元、踊りまで教えている人だった。そして、ひととおりの芸を習ううち、花柳さんはなかでも踊りにすっかり心をうばわれてしまった。花柳さん自身のことばで言えば、まったく「好きで好きでたまらなくなってしまった」のだ。長唄を習っているとばかり思っていたおかあさんも、これにはいささか驚いたようだ。その打ちこみようが尋常でなかった。

「踊りをやめさせる」などと言われようものなら、どんなことでもがまんしていっしょうけんめいだったという。

一〇才の一二月、初舞台をふんだ花柳さんは、ひたすらおけいこにはげんで、一四才のとき市山流の名取となった。愛らしい市山小十寿の誕生だった。とにかく市山流のお弟子

なさわがしい明け暮れしか知らない者にとっては、都心にほど近いこんな場所に、こんな世界がちゃんとあることがふしぎなくらいだ。

　ここには、たしかに平和で静かな世界がある。どんなはげしい浮世の嵐も、生存競争のきびしい時代の嵐も、ここまではやってこないのだろう。ここには、前時代のおちついた空気が、傷も受けずにそのまま生きているようだ。

「お待たせいたしました……」

　ふわりといい匂いがしたと思ったら、いつのまに和服に着かえたのか、ここ花柳日本舞踊研究所の女主人、花柳[illegible]葉さんが、じつにエレガントな姿で目の前にいた。大正六年九月の生まれというが、まるでそんな年令を忘れてしまうくらいに若く美しい。この人が、この別世界で、毎日をひらひらと舞いながら暮しているのだ。苦労を知らない美しさと言えば、それは皮肉だろうか。

　だが、花には花みずからの歴史があるように、この女主人公には、思いがけない血と涙のにじんだ歩みが隠されていたのだ。生活してゆくことの悩みと苦しさに、体を張ってぶつかり続けた女ひとりの果敢なたたかいの歴史が……。

　——きょうは、おけいこがお休みの日ですし、先生もずいぶんゆっくりなさっているようで……

　と口を切った記者に、

「いいえ、女はもう忙しくて……何から何までしなければなりませんから……。その点、男のかたはよろしいですわね、お仕事に専念おできになれますから……」

　すきとおった声で静かに答えてくださるこの主人公の話から、隠されたその「歴史」ははじめて明らかとなった。

家路を急ぐ子

　風雪に耐えて——それは、ことばを変えれば、冬のきびしさにも負けずということだ。

　チョウのなかでも、そう数は多くないが、越冬性の、いわゆる越年チョウとよばれるものが幾種類かある。幼虫やサナギの安全な形で冬を越すのではなく、破れやすい羽をいたわりながら、成虫のままで越冬するチョウである。まだ固い木の枝が、ようやく芽ぐんだばかりの春先、こうして長い冬を耐えた越年チョウが、いち早くかれんな姿を見せていると、愛チョウ家は涙が出るほどその美しさに打たれるという。いわば、この人、花柳さんの美しさはそういった種類のものだ。豊かな光とあたたかさに恵まれて花開いた、あの春の女王キアゲハやアゲハチョウのあでやかな美しさでなく、乏しい光と冷たい空気に悩みながらせいいっぱいの冬を忍んだ、その長い忍耐がおのずとにじみ出た、あのアカタテハやルリタテハの底光りのする美しさである。

——と、こう言ってしまえば、話はいたって結論めいてしまうのだが、どうしてどうして、問題は長い歩み、長いたたかい長い忍耐である。一言で片づけられないのが人間の歴史であり、人それぞれの歩みなのだ。

　——ところで、まず話のはじめに、こういうエピソードを聞こう。

　花柳さんは、実践女学校に通っていたのだが、そのころ、同級生が花柳さんをよぶニックネームが「ジャン・スー」という奇妙なものだった。その由来はと言えば、なんのことはない、授業の終りを告げる鐘の音が、「ジャン」とひとつ鳴ったかと思うと、まるで符帳を合わせたように、間髪を入れず「スー」っと教室から姿を消してしまう花柳さんの、その正確さからきたものなのだ。

「あら、ジャン・スーったら、もう帰っちゃったの？　困ったわ」

「あたしも、ノート貸したままなのよ、きょう返してもらわないと、あしたの宿題できないわ」

「でも、しょうがないわよ、ぼやぼやしてるあなたがいけないのよ、なにしろ相手はジャン・スーですもの」



（②群集マリヤを責める）

そんな評判が知らぬ間に伝わって、思いがけない数の弟子入りがあった。それは、若い花柳さんには、少々身にあまるほどではあったが、ともあれ一度立ち向かった人生だった。やれるところまでやるよりほかはなかった。

こうして、花柳さんの「ジャン・スー」という、ユーモラスでまた涙ぐましいニックネームが生まれたのだ。それは、好むと好まざるとにかかわらず、引き受けねばならない現実がこの人に強いた、やむをえない生きかたであった。

だが、授業が終るか終らぬうちに学校をとび出し、あとは夜までけいこをつけるという労働は、たとえそれが芸にうちこんだ者の道とはいえ、たいへんなものだった。なにしろ遊び盛り勉強盛りの年ごろだ。それをそっくり一事に集中するのだから、生活のためとはいえ、かなりの負担にちがいはなかった。それは、そのまま学業成績にあらわれた。ちょうど女学校の三年だった。成績は、現金なもので、えんりょなく落ちた。まるで、傾いたおとうさんの事業と同じだった。ちっとやそっとの努力で、ふせぎきれるものではなかった。おけいこが終ってぐったりと疲れた夜ふけ、友人から借りて帰ったノートと首っぴきで予習復習することは苦しい努力だった。ことに幾何はいちばんつらかった。基本の公理がのみこめないために、どんな問題を出されても応用がきかなかった。幾何だけでなく、とにかく「理数科はみんなダメ」だった。

それでも現実になさけ容赦はない。父勝成さんの事業は、倒産寸前だった。芸で身を立てる——それはもう一六才の花柳さんの真剣な問題だった。学校への授業料も、かなりの額が滞納だった。

ちょうど昭和八年ごろのことだ。日本舞踊も花柳流が全盛といってもよい時期だった。別にくわしいことを知っていたわけではないが、子供ながら花柳さんは、身を立てるならこれだと思った。

ある日、意を決して勝成さんに申し出た。女学校中退の覚悟だった。

「なにイ？　踊りなんぞやって、勉強やめるとはなにごとか！」

勝成さんも一度は怒った。しかし、花柳さんにとっても、「踊り」はもはや夢でもなぐさみごとでもなかったのだ。

こうして、四年の二学期末、花柳さんは女学校を中退した。一片の感傷もなかった。その足で花柳寿美葉師匠をたずね、入門を願った。

闇中に光を求めて

「もちろん若いですから、夢がないわけではなかったんです。でもわたしは、夢を見てもあこがれるヒマがなかった娘なんです」

笑いながら花柳さんは言うのだが、それもつまりはそのころのひたむきな生きかたがそ



（舞踊劇　「マグダラのマリヤ」①
酔いつぶれたマリヤに悪魔が……）

仲間では、もう花柳さんは、その若さにもかかわらず、トップ・レベルのスター級にのし上がっていたのだ。

いまや、若き花柳さんの前にはみごとにその花をさかせる道が開かれていた。すべてが、この道を行く花柳さんの未来を明るく約束するかのようだった。

「あの娘はモノになります。まだまだ見どころがあります。この先がたのしみで……」

そんなささやきが、先輩格の師匠たちの間で交わされていたのを、花柳さんは知っていただろうか……

だが、およそ芸ごとと言われるものが、芸ごととして通用しなくなるのは、きびしい現実によって、食うか餓えるかのナマの生きざまを迫られるときである。この苛酷な現実に直面したとき、いわゆる芸ごとは停止しなければならない。花柳さんの花さける道に、暗雲のごとく突然襲いかかったものは、じつにこのような現実だった。

道はみずから開け

花柳さんのおとうさんの勝成さんは、信州の農家の次男だった。それでいて、クワを手にすることが性に合わず、若くして上京し、苦学の末、逓信省にはいった。それが中途でそこをやめ、沖電気に移ると停年まで勤めた。その後は自分で工場を建て、まずまず一応の成功を見ておちついた。花柳さんは、そのような恵まれた両親のもとで育ったわけだった。

ところが、その勝成さんの安定した事業がふとしたことからぐらつきはじめた。ちょうど、花柳さんの輝かしい前途が約束されたころだった。チョウよ、花よ、と、いや、踊りよ歌よとたのしく明け暮れる童心の世界に、事業不振のもたらす生活苦は、容赦なくくさびを打ちこんできた。こうなっては、もうこれまでのように、望むがままに着物よ帯よというわけにはいかなかった。それにもまして、幼い心には幼い心なりにしのび入る生活苦の暗い影は、もはや〝道楽ごと〟の雰囲気に身を置くことを許さなかった。一四才で市山小十寿の名を受けた花柳さんに約束された未来あるこの道を、しかも、ちょうどその栄光の時に、花柳さんは黙って断念しなければならなかった。

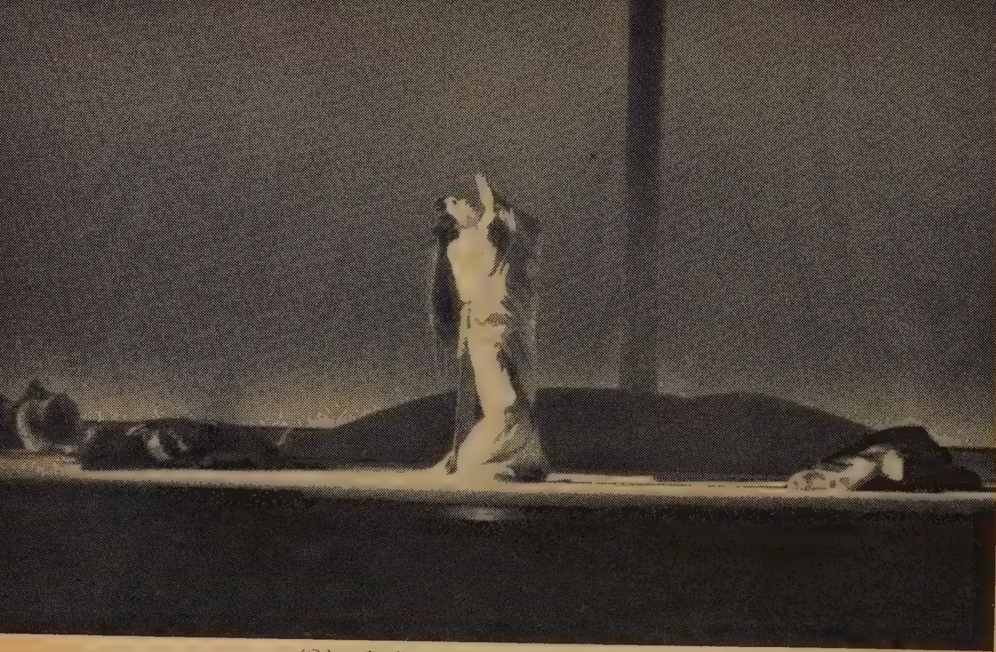
そして、二年間の空白がきた。それは、幼い夢をうちひしがれた傷心の二年間でもあった。

現実になさけ容赦はない。人はそれを苛酷というが、現実はつねになんの感情ももたずに存在する。一度傾いた事業は、まるでそれ自体の動かしがたい法則にしたがうかのように、急速に傾きを増した。隠そうとしても隠しきれない母親ともさんの青い顔が続いた。

〈長女のわたしが、これをだまって見ているという法はない。家計はほんとは、わたしが知っている以上に苦しいのかもしれない。わたしだって、自分のできることをして家のためにならなければ……〉

この小さな決心をした日から、ただ笑いさざめくことしか知らなかったこの女学生の胸に、はじめて生きることへの強い意志が燃えはじめた。そして、この花柳さんのひたむきな思いが、自宅玄関に、長唄、清元、常磐津、舞踊などを含む市山流教授の看板をかけさせたのだ。

〈あのお師匠さんは、まだ実践の女学生さんで若いけど、よく教えてくれる……〉



（③主、息絶えたまいしとき）

なんかそっちのけ、死とか生命とかを真剣に考え、いろいろの宗教にも手ごたえなく、とても孤独で、言うに言えないさびしさ……」

――こういうなかで、人間花柳二葉さんの心の目はしだいに開かれていったのだ。「求めよさらば……」の約束のもと、全身をかけた奥底からの叫びが答えられぬはずはない。それは花柳さんの場合も例外ではなかった。

二五年四月一〇日、聖公会聖アンデレ教会で、やまいなかばの花柳さんは、やまいも死も超えるよろこびのうちに、洗礼を受けていた。キリストを土台とし、キリストにあって生きる新しい人生の出発だった。答えはまちがいなく与えられたのだ。

≪わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。≫

（ヨハネによる福音書第一一章二五節）

芸道すなわちたたかいの道

――先生は、いまずいぶんお元気でいらっしゃいますね。

「ええ、二六年四月に再手術して、肋骨を七本とって、二八年夏やっと退院したんですが、今後はもうベッドの上だけで生活するようになどと言われまして……いまこんなに昔どおりに踊れるなんて、奇跡としか思えません」

つつましやかにそう言う花柳さんは、昨年父の勝成さんを病気で失い、母ともさん（六七才）と一人娘の佳住さん（一六才）との三人ぐらし。ご主人のKさんとは、病気中いろいろの事情から別れた。ともあれ、たたかいはきびしかった。嵐の体験は花柳さん自身を高くした。

二九年七月に葛飾学園で発表した花柳さんの創作舞踊に、「浄魂」というのがある。一人の女を、三人の悪魔がとりまく。女はいろいろ迷わされるが、神に向かって進む。しかし、また悪魔の誘惑にひかれる。行きつもどりつの苦悩の末、叫び求めた神の力によって、悪魔はついにかなわず地に倒れる。これを大中寅二の作曲で踊った。文字通り、これは花柳さん自身の病中の体験だったのだ。

うさせていたのだろう。

雪の日も、中延から武蔵小山まで歩いておけいこにかよった。その間にひのき造り六〇坪のりっぱな家が、とうとう抵当にはいった。やむなく、近くの工場のなかにある造りつけの一部屋を借りて移った。娘一六の美しさはそれでなくても人目をひいた。花柳さんが工場内を通ると、工員たちからえんりょのない口笛やひやかしが飛んだ。それをにらみつけて通る花柳さんは、まことに「怖れを知らない娘だった」らしい。しかし、ひたむきに生きることのきびしさに耐える花柳さんの若き日は、また人知れず「うつむいて道の石ころを見つめたころ」でもあった。

一八才の秋、花柳二葉の名をもらった。寿美葉師匠の代げいこまでまかせられたりするうち、やがて家元の寿輔師匠に預けられるというさいわいがきた。動きの訓練は寿美葉師匠から、そして踊りのこころ、腹芸は寿輔師匠から受けたという花柳さんは、こうして自分の芸に最後のみがきをかけたのだった。

そして、それからはこの歩みは順調に進む。一九才の正月に五反田に家を借り、看板を出して盛況をよんだ。ここで花柳流の名取が何人も生まれた。二〇才で二葉会を創設、以後、妹の青葉さん、葉さんとともに、そこを芸道一筋の拠点とした。東宝舞踊劇場に出演して、秦豊吉氏から絶讃された。帝劇にも出た。

ところで、花柳さんもそろそろ結婚問題を考えさせられる年令だった。このあたりの話を、花柳さんは微笑しながらこう言う。

「わたしは、女性としてしあわせでないんでしょうか、自分の夢の男性にめぐり合えなかったんです……」

しかし、そのあと花柳さんがつぶやくようにふともらした一言を記者は聞きのがさなかった。

「つまり、手なべ下げても行けるような人……」

昭和一八年秋、花柳さんは結婚した。二六才だった。相手の男性は大阪の若いエンジニアだった。花柳さんは、こんどはおかしそうに笑ってこう言った。

「ほんとは気が進まなかったんですよ。信念が何もなかったころだから、ひじょうにたよりないんですよ、わたしの心が……」

とはいえ、生まれてはじめての新居を牛込に持った。二〇年三月に、長女の佳住(かすみ)さんが生まれた。

ここで、終戦前後の混乱した間奏曲がはいるが、それはだれも同じだ。明けて二一年、東劇ではじめて発表会を開いた。演奏家で言えば、注目のリサイタルとでもいうべきこの会は、荒廃した戦後の舞踊界に清新な評判をまき起こした。そして、有楽座、帝劇へと、好調の出演が続いた。ことに、二三年三月、日劇で公演された「西鶴五人女」には、家元の寿輔、西崎みどり、五条たまみ、といった第一級の人たちに加わって、いちばんの若手で花柳さんが出演した。しかも昼夜二回の出演のしあわせだった。もはや、花柳さんの地歩はゆるぎなく定まった。年来の苦労は実を結んだかに思われた。

——花柳さんの開かれた道に、かつて姿を見せた黒い影が、さらに黒々とあらわれたのはこのときだった。

大好評の公演が終って、次の仕事にとりかかろうとしていた四月二日、異様な高熱が花柳さんを倒した。美しい胸が、いくつもの空洞を残してみごとにむしばまれていた。

運命はどこまでも暗く圧倒的だ。踊りの道から無慈悲に引き離された花柳さんが、避けようもなく直面したのは、この自分を押しつぶす強大な運命だった。再起不能と言われた整形手術の身をベッドに横たえたとき、「わたしははじめて人間の孤独を知りました。さびしいということばを知りながら、ほんとうのさびしさを知ったのはそのときがはじめてでした」という実感が花柳さんを包んだのだ。

こうして、一年たち二年すぎた。「もう踊り

本を読みましょう
——信仰と文学——



一億の同胞を押し流そうとするようなラジオやテレビの凄まじい流れの中で、わたしたちの足をとどめ、さらに流れに逆らって歩ませるものは何か。それはただ一つ。わたしたちの魂をゆり動かすようなよい本を読むことです。一度このことを知ったものは、もう棍棒で丸い物体を叩きつけるおとなの狂態や、朝から晩まで泣きわめき、嬌声をあげるドラマを口を開けたままで見つめることをやめるでしょう。

今月も、わたしたちの魂を洗い清め、深め広げていくような数冊の本を紹介いたしましょう。

『改革者の妻、カタリナ・ルター』(クララ・デントラー著・福山猛訳・ルーテル社・二〇〇円)。ルターを知らない人はいませんが、彼の妻については、彼の偉大さの陰にかくれて、ほとんど知られていません。しかし、この本はそのかくれた宝を掘り出し、探り当てる喜びを与えてくれます。著者はカタリナと個人的交わりを結んだ親友の手記という形式で書いていますが資料その他、歴史的な観点からも正確な記述であり、さらにその上、女性らしい繊細な神経とやさしい愛情に全編貫かれています。この本を読むと結婚や家庭生活、育児などについて百万べん説教されるよりも、真実なことを教えられるでしょう。しかし著者の意図を越えて、この本は「ヴィッテンベルクの暁の明星」とよばれた、ルターの妻カタリナを通して、いっそうルターの偉大さを知らせ、また、ルターを通して、いっそうキリストの恵みの力強さを知らせるものであります。

『神を呼ぼう』(八木重吉著・新教出版社・一六〇円)いまさら紹介するのもおかしなほど、キリスト教徒はもちろんのこと、信仰を知らぬ人々にも広く読まれてきた八木重吉の詩集です。聖書を読んであくびが出てしまいそうな人でもこの薄い一冊の本はその心を引きつけてやまないでしょう。そしていうまでもなく、重吉の詩心は聖書に、聖書によって証しされている父、子、聖霊にいましたもう神にその源泉があり、この詩を心して読むほどの人を、その源に導いてくれます。冒頭の「願」で「私は、基督の奇跡をみんな詩にうたいたい……出来ることなら基督の一生を力一杯詩にうたいたい。そして私の詩がいけないとこなされても　一人でも多く基督について考える人が出来たら　私のよろこびはどんなだろう」や、絶筆であるノートにしるされた、「長い命でないとおもえば　これから一生懸命力をつくして　神様を信じ　人を愛してゆこう」にそれを深く読み取ることができます。珠玉のようなことばの数々には、一度わたしたちの目にふれれば、一生、魂にくい込んで離れないことでしょう。

『キリスト者の行程』(ウォッチマン・ニー著・松代幸太郎訳・いのちのことば社・一五〇円)。著者は南中国福建省の牧師で、この本は彼の説教原稿をもとに編集されたものです。「エペソ人への手紙」を中心に、豊富な経験談や適切な例証をおりまぜて信仰生活の勧めをしています。著者の考え方には、いくぶん神秘的な傾向がなくもありませんが、キリスト者の生活が神の安息に基づく、キリストにおける安息にあり、そこから人の力によらない力強い信仰生活がはじめられ、続けられていくことをわかりやすく述べています。信仰入門書としても適当でしょう。

『作品集I』(たねの会・教文館・二〇〇円)この本はあまり一般向きとは言えませんが、文学に関心を持たれるかたは、一読に価すると思います。「たねの会」はプロテスタント教会員によって組織され、芸術においてキリスト者としての役割を果たすため、事業を行なう、会費を徴収しない団体で、北森、佐古、椎名といった著名な人々もその名を連ねています。三つの評論と、六篇の小説、一篇のドラマよりなり、いずれも本格的な基督教文学に肉迫せんとする息吹を感じさせるものがあります。

(川名勇・工藤記念桜新町教会牧師)

こうして、信仰にもとづく花柳さんの創作舞踊は、異色のものとして注目を浴びた。三一年二月、新橋演舞場で発表した「静けき河の岸辺を」は、同名の讃美歌を聖ニコライ合唱団にうたわせて、「信仰をもって」踊った。新聞紙上でも賞讃された異色作だった。さらに三二年七月、第一生命ホールで発表された五場の長さにわたる評判作「マグダラのマリヤ」は有名だ。出演者数十名の壮大な舞踊劇だが、同じく大中寅二曲、淫奔の舞姫マグダラのマリヤが、十字架の死と復活前後のキリストを中心として、新しい人生にはいっていく過程を描いた感動の名篇だった。この公演に先立って、花柳さんはプログラムのなかにこう書いた。――「世に生まれてからこのかた、わたしはいろいろな試練を与えられてまいりました。これらのことは、みな主イエス・キリストにより、すべて益となることを知りました。闘病生活当時のイメージが、年を経て、いまここに、実現しようとしております。」

相対していて、花柳さんはどこまでも美しくやさしい。しかし、花柳さんにとって、踊りの道はどこまでも人生の道、生きるたたかいの道なのだろう。ひしひしと教えられることは、この人が毅然としてゆるがない生活者であるということだ。そこには一片の甘さも道楽めいた匂いもない。


（教えるときの花柳さん（右）は真剣そのもの）

あまりきちんとすわった和服の姿が、さっぱり崩れないので、つい主客を転倒して

――先生、どうぞおひざをラクにして……

と言ったら、

「わたくし、これがいちばんラクなので……

…子供のときからこういう習慣ですから」

とニッコリ笑われた。ひや汗である。

裏口で御用聞きの声がした。

「ごめんくださァーい」「はーい」

花柳さんのその返事に驚いた。ピリリとしてまるで芯がある。この人、やさしいけれど、すごいんだゾ……記者はあわててあぐらを直して正座した。総身これ汗である。

別の日、おけいこ日というので、もう一度現場をのぞかせていただいた。そしてまた驚いた。六坪の踊り場で、一心に六段崩しかなにかをわき目もふらずに教えている花柳さんは、もう先日のやさしさは毛ほどもなく、こわいほど美しく、きびしく、踊りに専念しているのだ。かたわらにいた高校生の佳住さんに、「おかあさん、こわかありませんか」とこっそり聞いたら、「いいえ、ちっとも」と、このお嬢さんも毅然たるものだ。

このきびしさの前では、あいさつなどしている余地はない。記者はなにかひどく打たれて、玄関先に一本、柳が植えられたこの家をこっそりとび出した。外では、いま鳴いておかねば損だというふうに、ツクツクホウシのせいいっぱいの合唱である。

それで**キリスト教**は、愛を中心としているそうな、夫婦の愛が、両親の愛よりもたいせつなそうな、それでは日本の家庭の破壊になる！　**キリスト教**は邪教である、こう考えている人も多いようです。

ホーリネス教会の監督であった中田重治先生を困らせようと、ある人が

「先生、あなたの奥さんと、おかあさんとが水に溺れているとして、先生はどちらをまずお助けになりますか」と言いました。

先生は、ソンナわなにかかる人ではありませんでしたから、「どちらでもよい、早く手の届くほうから、救いだすんだ」と言ったそうです。

キリストを信ずることによって、ますます忠義な、孝行な人物が、明治、大正の時代に生まれたことは事実の証明するところです。勝海舟は、自分の隣りに住んでいた、**ホイトニイ**兄弟の親孝行に感心して、**キリスト教**を理解するに至ったそうです。

キリスト教は、酒やたばこをのまぬ。それでは世間との交際ができん、といって反対する人があります。実はわたしもそう思っていました。ずい分きゅうくつな宗教だなあ！　と考えていましたが、はいってみると、決してきゅうくつなものでなく、かえって楽なものだとわかりました。

酒のむなたばこのむなのヤソ教は胸くそ悪き宗旨なりけり

ときらった人が

酒のむなたばこのむなのヤソ教は胸ハレルヤの宗旨なりけり

と喜んでうたうようになっております。

キリスト教を信じたら、嫁入りの口が少なくなる。こういって、ちゅうちょして、娘の入信に反対する父兄があります。もっともな情だと思います。しかし、「いつまでもありと思うな親と金」で、本人がしっかりして、人生の荒波を乗り切らねばならぬときが来ます。ですから、本人がビクともしない信仰をもっていなければ、あぶないと思います。

3　信仰は役にたつか

キリスト教は無力である。今日の時代には役にたたない。

キリスト教は、世界大戦をくいとめることができなかった。今日もその通りで、第三次戦争をもとどめえないかもしれない。むしろわれわれ人間の手で、世界の平和を守り、秩序ある社会を来たらせねばならぬ。こう考えている人々も多いと思います。

数年前でありました。高野実氏が総評の委員長をしているころ、わたしたちの伝道委員会に同氏を招いて、意見の交換をしたことがあります。

「労働組合は**キリスト教**を必要としますか」

との問いに対して

「**キリスト教**は労働組合に現在はなにもしてくれていません。それですから、われわれは**キリスト教**に対しては、なにも期待しません」

と**ハッキリ**答えられたのです。「生活改善、家庭問答、その他、いろいろの面ではどうですか」と問うても「現在は**ベース・アップ**をするのに力を集中している」と答えられたのでした。

この高野実さんの考えは、自分の一方的な要求に応じないからの無関心でありますが、これは金儲けや、縁談や、病気直しや、その他の大小の自分の願望がかなえられないから無関心になる場合と、根本においては同じだと思います。

これは、どの宗教にも通用するわけですが、宗教とは神と人との話し合いですから、自分の都合だけを考えないで、先方さまの言い分をよく聞かねばなりません。

神とわれわれとの話し合いの場合は、ちょうど大きな船と小さなボートとをつないでおいて両方から引張る、そうすると小さいボートが大きな船のほうへひき寄せられる。ボートのほうへ船は来ない。そのように、まず神



＜キリスト教のいろは＞　＜第十回＞

こう答える、疑問のすべて

島村亀鶴

1　外国の宗教？

東京の市ケ谷台町に長く伝道していた外村義郎先生が、明治の中ごろに教会へ行ったときの話をされたことがあります。

友だちに連れられて、教会へ行ってみると隅のほうに西洋だんすが置いてあって、それがブウブウと鳴ると、みんなが立って歌い出す、友だちが立っているので自分も立つ、歌が終ると祈りをする、それから黒い表紙の本を読む、友だちが貸してくれたので、おそるおそる開いてみると、バタ伝（馬太伝）バカ伝（馬可伝）と書いてある、さあこりゃたいへんな所へ来たものだ。これはキリシタンバテレンだなと思うと、なんだかこわくなってきた。早くすめばよいがなあ、と気が気でなくなって、何を先生が言っているのか、わからん。とうとう終って逃げるようにして門を出たが、いったいここはなんというところだろうかと門札を見ると、「聖保羅教会」セイホラキョーカイと書いてあるので、ビックリして家に帰って来た、もうあの友だちとは交際しまいと思った、と話されたことがありました。

キリスト教はお寺やお宮と違って、なんとなくアメリカのにおいがする。アメリカの手先になってやっているのではないだろうか。アメリカから金をもらっているのではないか。

こういう疑問をずいぶん多くのかたがもっているのではないでしょうか。

明治のはじめから、国民感情に訴えて、新しい思想なり、行動なりに反対をする場合、政府の方針は、「あれは外国の手先である」「外国から金をもらっている」こういうふうに言ってきたのです。今日でもまだこの考えが頭を出してくるときがあります。

むかし佐田介石という国粋論者がありました。この人は『ランプ亡国論』を書いたおもしろい人で、文明は国を亡ぼすから、ランプは不用だ、やはりアンドンでよいと主張しています。ところでこの人の友人に、浅田飴で有名な医者浅田宗伯氏がいました。この人も大の外国ぎらいでした。あるとき介石氏が重病になったので、これを見舞にゆくのに、早馬、早かごで行ったかというと、そうでなく汽車に乗ってかけつけたそうであります。

外国であろうが、国内であろうが、よいものはよいとして、採用していったればこそ、進歩したわけでしょう。

2　肌が合わないか

次にキリスト教はなんとなく、われわれの肌に合わぬという感情の方面からの反対もあります。また、昔からの国民道徳を破るものだ！　との反対もありました。

明治三三年に、教育勅語が発布せられてから、わたしたちは「朕惟フニ……」を暗記しました。「なんじ臣民よく忠に、よく孝に」とありますように、忠義と孝行とが、国民道徳の二大柱でありました。

教会のために、血を流し、生命をささげたイエス・キリストは、教会に絶対にあいそをつかさない最後のかたです。

6 奇蹟・罪・悔改め

聖書の中の奇蹟について、科学的な面から反対する人がいます。反対は当然です。わたしは、あなたの反対なさるまえに、ちょっとご注意してみたいのです。新約聖書の第一ページに、処女マリヤの孕みの記事、第二ページには天使と東方の博士、第三ページに夢のお告げ、第四ページに悪魔との対決の記事があります。

これらは、みんな奇蹟の記事であり、各ページをよく考えますと、奇蹟にみちています。もし、この奇蹟は信じられないといって、一枚ずつ破りすてていきますと、新約聖書は、表紙と裏表紙との二枚しか残らないことになりましょう。神のなしたもうことは、奇蹟です。それがなければ、聖書ではないといってよいでしょう。

このまえに申しましたように、科学的の真理の証明は、(一)だれがやっても同一の結果が出てくる、(二)いつやっても、(三)またどこでやっても、同一の結果が出てこなければ、認めるわけにゆきません。

ところが、神と人との関係、すなわち人格的真理は、だれでもというわけにいきません。信ずる者同志の間の信頼関係がなければ、生まれてきません。それと同時に、人間同志の信頼以上に、全能、全知、全愛の神の活動が、人との間に行なわれますから、そこに奇蹟の出現があるわけです。

最後に、主イエス・キリストおひとりによって、われわれの罪がゆるされるというとき、キリストによる罪のゆるしの絶対無二性を主張しているわけです。それから、わたしの罪はわたしが責任をとるべきものでしょう。それを他人に負ってもらってゆるされるのは、卑怯ではないか、無責任ではないか、不道徳ではないか、こういう点が、救いの教理についての疑問として起こるのではないでしょうか。

たしかに、責任の転荷ということは卑怯ですが、罪の悔改めのときには、無責任、不道徳を感じません。むしろ、悔改めないことが不道徳であると感じますし、またなんとかして罪をとり去りたい、だれか来て救ってくれる者はないかと、心のいちばんの深みから叫びます。ロマ書七章二四節のパウロの叫びがこれです。これを不思議に不道徳と感じないばかりか、人間存在の最も真実な姿と思うのはなぜでしょうか。

神が人を創造したこと、創造された人間が罪に落ちたこと、神がこの人間を新たにキリストにおいて創造（再生）されんとしていること、これをさらに聖化せんとしていること、こういう神の側の人に対する救いの大計画が、小さな人間の罪の悔改めということを通して、体験されてくるからです。

道徳の根本にある神との交わりを正常にするための行為が、悔改めてキリストを信ずることの中にあるからだろうと思います。

7 相談相手が待っている

あるとき「人生の後篇」という説教題を看板に書いておきましたら、通行人が立どまってみていました。

「足らぬ足らぬは祈りが足らぬ」、「神とともなる暮しの手帖」、「神からのラブレター」、「あなたを愛する最後のひとり」、「ぜひあなたに紹介したい人」こんな題を出しておくと看板の題にひきつけられて、教会へ来る人があります。

わたしたちは、だれか自分のことを十分にきいてくれる人がほしいのです。交わりの場がほしいのです。教会はあなたに、その交わりの場を提供いたしています。

ことに、イエス・キリストは、天から来て教会におり、あなたの相談相手になろうとしています。宝の山へ来て、石ころを拾って帰っては、これほど損なことはありません。イエス・キリストが相談室にあなたを待っています。キリスト教に反対したり誤解したりしてもイエス・キリストと親しく交わってください。あなたはほんとに救われ恵まれます。

（次回は「信じて生きること」）

のほうの意向をよく知るようにしますと、その結果は意外にめぐまれてくるはずです。

自分の試験管に神さまを入れようとして、はいってこないと、神さまは自分の相手になってくれないと見切りをつけるのは、ちょっとまってください。

4 キリスト者と偽善者

「キリスト信者は、愛を口にしているが、実行はしない。彼らは偽善者である。

キリスト信者は、自分たちは神の子だと、高くとまって、他人を眼下に見くだしている、彼らの高慢チキな顔が気にいらぬ。

そして彼らは、すぐに他人を罪人とよんではばからない。人間らしさがいつのまにか消えてくるのではないか」

たしかに、そういう一面がありましょう。わたしは、その愛の実行しがたい点についてほんとに悩むものは、クリスチャンであろうと思います。また他人の罪のために、本気で泣けるのもまた、神から罪のゆるしを与えられているキリスト者以外にはあるまいと思います。

わたしの知っているひとりの老姉妹は、主の祈りの中にある、「われらに罪をおかす者を、われらがゆるすごとく、われらの罪をもゆるしたまえ」というところにくると、グッとつまるそうです。どうしてもこれは言えない。

なぜかというと、自分の一家の人々の顔に泥をぬったような人がある。その人をゆるしたいと頭では考え、ゆるさねばならぬと思って、聖書のことばに従わんとする、しかし本心からゆるして、安心して、その人を祝福するまでに、心がめぐまれていない。

それでウソの祈りはできないので、「罪をゆるすごとく」というところでは、どうも苦しくてつまります、と言うのです。この人は八〇才にちかくなっていますが、その心の素直さは、まるで幼子のようであります。わたしは心を打たれました。

5 教会は社交クラブか

教会は天国だ、信者は天使だ、と思っていたら、教会にもいろいろの党派や教派があって争っている。牧師の中にも、俗より出でて俗よりさらに俗物がいる。信者は天使でなくて欲深い者ばかりではないか。

教会は、底辺に生きてる者に顔をむけないで、ていさいのよい社交クラブになってるではないか。時間と金に、余裕のあるものだけの、お楽しみの団体じゃないか。

こういう質問や注意、反対があります。教会は世界の全国民、民族が、一つになるのをその目標にしています。二千年の歴史をへて最近はとくに、世界教会合同の気運が濃く、その実現を急いでいます。

もちろん教会には、一どきに身柄としては神の子が誕生します。それが神の子としての実質をつけるのには、年月を要します。「蜂の子の蜂になることおそきかな」です。しかし、未熟でも、その可能性をもっていますから、大きな希望の団体です。二千年も続いている神の子たちの行列であり、天につらなっている家族の群です。この家族の先導をしているのがイエス・キリスト、そのまん中に、そのしんがりにいるのも、イエス・キリストです。全く不思議な団体です。土の器の中に宝をもった団体です。

あなたは教会の聖餐式をごらんになったことがありますか。国王もひとりの罪人として、罪人も国王とともに、一様に神の前に、罪のゆるしのパンと、ブドウ酒とをいただきます。そして罪ゆるされたる兄弟、姉妹として神を一同で讃美しています。罪人として最低辺における一致、神の子としての最高の光栄における一致、これを目で見せているところが教会です。

教会を正しくみる眼鏡は、イエス・キリストです。キリストは教会をみる望遠鏡であるとともに、顕微鏡です。

相反対立や第二の相関対立の場合とは違うところの絶対的な対立であると言わねばなりません。われわれにおける霊と肉との対立は、第一の相反対立のように、対立の両者が共通の一般者を持っていたり、中間者を媒介にしてつらなったりしているのとは異なる絶対的な矛盾対立であります。また第二の相関対立のように、ひっくり返せばそのまま反対に転化するような見せかけだけの対立とは絶対的に異なります。このような意味で、霊と肉との対立を担っているわれわれの精神は、融和したり解消したりすることの絶対に不可能な矛盾の中にある、まことに悲劇的なものなのであります。

2　束縛された自由

だが、このような人間が絶対的な矛盾対立的存在であるということは、われわれにとってどのような現実なのでしょうか。それはなによりもわれわれが、霊と肉、無限と有限、永遠的なものと地上的なもの、というような対立項のあいだを常に動揺・彷徨せざるを得ない不安なものとして存在しているという事実なのであります。思うに、このような不安は、真実なるもの・価値あるものとして、われわれの存在の意義を形づくっていたものを容赦なく崩壊させる原因となっているものであります。そのような不安によって真実は虚偽に、価値は無価値に変化するがゆえに、常にわれわれは自己にとどまり、自己であることに耐え得なくなってあの『行人』の一郎のように焦燥にかられざるを得ません。なぜかと言えば、たとえば百メートルの高さは、五十メートルの高さから言えば＜高い＞と言えますが、二百メートルの高さからは＜低い＞と言わねばならぬように、われわれは、霊と肉、無限と有限の矛盾のあいだを、どちらかいっぽうの方向に動いて行く度合が多ければ多いほど、かつて真実にして価値あるものと見做して、そこに自己の存在を安定づけていたものが、虚偽にして価値なきものに化してしまうことに気づかざるを得ないからであります。黒と白というような相関対立とか、表と裏というような相反対立であるなら、その対立は、対立とは言っても両者は静かな調和の中に同時並存することができますが、このような霊と肉というわれわれにおける＜矛盾対立＞は、「あちら立てればこちらが立たぬ、こちら立てればあちらが立たぬ、両方立てれば身が立たぬ」という俗謡の文句ではありませんが、矛盾の主体であるわれわれの身を立てなくさせ、破壊してしまうものであったのです。ところでよく考えれば、われわれがこのように霊と肉との矛盾対立のあいだを動揺・彷徨せざるを得ぬということは、その矛盾を担う主体が、＜自由＞を持っている、ということとひとしいことにほかなりません。霊を肉にかかわらせ、肉を霊にかかわらせる自由を持っているからこそ、われわれは一定の場所に落ちつくことなく常に動揺・彷徨せざるを得なかったのであります。しかし、言うまでもなく、その場合の自由はあくまでも、霊と肉という矛盾対立を担うべく限定された自由でありました。そして不安というものはケルケゴールのことばを借りて言えば、まさにこのような＜束縛された自由＞から生ずるものにほかならぬのです。さて、人間の自由がこのような＜束縛された自由＞であるということから、次のことを考えることができます。

まず人間の自由は、自己の自由を限定・束縛するものを自覚したときにはじめてほんとうにめざめるものだということです。これはたとえば、自己の生が死によって限定・束縛されていることを自覚したときに、はじめてわれわれが狂おしいまでに生の自由に気づくことなどから知ることができるでしょう。思うに自己の性に目ざめた青春の時と、自由の主体としての自己に目ざめる時機とが相即しているということの理由もまたここにあります。というのは、われわれは子供であるときにも、もちろん霊と肉という絶対に矛盾対立したものを持ってはいるのですが、それらはまだ鋭い対立にまでいたらず、したがってそれらを綜合するべく責任づけられた自由（精神）も、まだ目ざめないままの状態であるものです。つまり霊と肉とは自然的・直接的に

恋愛論・第五回

不安と情熱

高木幹太



1　三つの対立

人間は霊と肉との〈対立〉を精神において担っている存在でありました。ところで、アリストテレスによれば〈対立〉には相反と相関と矛盾との三つの場合があると言われます（金子武蔵『道徳の根拠』参照）。

I、第一の相反対立（オポジット・コントラリヤ）というのは、たとえば黒と白とか、最高音と最低音などの場合の〈対立〉でありますが、このような対立は、対立しているとは言え、両者の間には共通した一般者が存在する対立でありました。黒と白の場合には〈色〉という一般者が、また最高音と最低音の場合には〈音〉という一般者が存在するわけです。ですから、この場合の対立は〈色〉や〈音〉という一般者の形づくる領域において、それらが両端として最大の距離にあるということにしかすぎません。したがって、それは対立したものの間に中間者が存在している対立であり、中間者を媒介として対立者が連続している対立でもあります。たとえば黒と白の場合には、灰色という中間者があり、それが媒介となって互いに連なっているのだと言えるでしょう。したがって黒は黒の要素を少しずつ取り去っていくと、反対の白になり、白は白の要素を少しずつ取り去っていくと反対の黒となるのですから、黒は白になり、白は黒になる可能性を持っているのです。つまり、黒は可能的白であり、白は可能的黒であるということができるのです。

II、それから第二の相関対立（オポジット・レラティバ）というのは、たとえば表と裏とか、右と左などの場合の〈対立〉でありますが、すぐわかるようにこれは第一の相反対立のような、共通の一般者や、連続の媒介をなす中間者を、持ってはいない対立であります。なぜかと言えば、たとえば表と裏の場合はその間に、黒と白とが〈色〉という共通の一般者を持っていたり、〈灰色〉という中間者において連続しているような、そういう一般者や中間者を持っていないからです。表と裏の場合はあくまでも、表でも裏でもない中間などというものを持たぬ対立なのであります。この意味では、さきの相反対立と違ってこの相関対立はいかにも絶対的な対立のようですが、よく考えれば、この対立は、対立している両者が一般者・中間者を必要としないほど互いに接近・相関しているのだというふうに理解することができます。表と裏とは、表がなければ裏がなく、裏がなければ表がないというので、互いに絶対的に対立しているように見えるが実はそうではないのです。そのような対立は、ある一つのものの異なる側面にしかすぎないのであります。同一物を異なる見地から見て、それを対立的によんだだけなのであります。ひっくり返せば、表は裏になり、裏は表となってしまうのです。

III、第三の矛盾対立（オポジット・コントラディクトリア）というのは、人間における霊と肉との対立であります。これは第一の

にいたる病』の中で繰り返して言ったようにわれわれを霊肉の綜合としての自由（精神）として措定された方に自己を根拠づけることすなわち神からのわれわれに対する赦しと受容の福音を、砕かれた魂をもって受容すること、によってのみ達することができるのです。（前回の3「福音の光のもとに」参照）

3　不安と情熱

性的に人間が成熟してまず肉的なものが措定され、それと同時にその肉的なものに対立する霊的なものが措定され、かくして矛盾対立するその二つのものの間の関係として、それらを綜合する自由に目ざめる。――そしてその結果あの不安に陥る……。わたしは今までこのようなことを述べてまいりましたが、次に、恋愛というものがこのような人間の根本的な性格、とくに不安と深くつらなっているということについてさらに考えてみたいと思います。

われわれは生理的・性的自覚に達したとき、何度も繰り返して述べましたように、あの肉と霊という矛盾対立を担う自由（精神）に目ざめ、かつなんのゆえかわからぬ不安に襲われます。その時われわれは、驚きの目を見はって、この世に自己の性と異なる性の存在することに気づくものです。漱石は『こころ』の中でそれを次のように言いあらわしています。「わたしが十六、七の時でしたろう。はじめて世の中に美しいものがあるという事実を発見した時には、一度にはっと驚きました。何遍も自分の眼を疑って、何遍も自分の眼を擦りました。そうして心の中であぁ美しいと叫びました。十六、七といえば、男でも女でも、俗にいう色気のつくころです。色気のついたわたしは世の中にある美しいものの代表者として、はじめて女を見ることができたのです。いままでその存在に少しも気のつかなかった異性に対して、めくらの眼がたちまち開いたのです。それ以来わたしの天地は全く新らしいものとなりました。』と。

いや、単に異性に対して目が開かれるというのみではありません。ペーター・ブーストのことばを借りて言えば、不安は＜冒険と決意とのための空間＞でありますから、むしろみずから進んでわれわれは、だれという特定の人格でない異性を想像しそれに向かって、自己の休らいを棄てて超越・彷徨するにいたるものなのです。不安はすでにこのようにしてひそかに恋愛の情熱に結びついていると言わねばなりません。アウグスチヌスは、彼の『懺悔録』の中で、十七歳から十九歳までカルタゴで勉学する間、不義の恋に迷った事情を語って、「わたしはまだ愛したことがなかったので、愛せんとして愛したのだ。……然り、わたしは愛することを愛して、わたしの愛し得るそのものを探し求め……」という有名なことばを残していますが、この「愛することを愛した」（amaban amare）ということばはまことによくこの間の事情を示すものです。特定のある異性に出会ってはじめて恋愛の情熱が引き起こされたというのではなく、不安なるがゆえに、だれという対象が存在しないにもかかわらず、異性一般にむかって情熱的に憬れるという人間性、いわゆる＜恋に恋する＞がごとき人間性というものは、なんという奇怪なものでしょうか！　情熱という意味のギリシャ語のパトスは、もともとその動詞形のパスケインから由来したものであって、それはわれわれの心が外界の事物に感触せられた結果、なんらかの内面的印象を受容することを意味していました。ですから、パスケインということばは、本来受動形であって、プラテイン、あるいはポイエインというような、内から外に働きかけ、もしくは作為するという意味の能動的なことばと、対立的に使用されていたものであったのです。してみれば、外なる対象に触発されて受身的に引きおこされるはずの＜情熱＞が、特定な対象なしに、ただ漠然とした想像の世界の異性一般にむかって起こされるということのような事情は、人間というものが、霊と肉との絶対的矛盾対立を自由において担っている存在であり、そこから由来する不安が実にそのような情熱を生むのだと説明する以外にはないのではないでしょうか。

（次回は「続・不安と情熱」）

統一せられているので、したがってその両者の綜合を果たす役割を担っている自由もその中でまだ眠っているわけなのであります。しかし、子供の持っているこのような平和と安息は、動物などの、もともと自然の法則に束縛されているだけで自由というものを持たぬがゆえの、直接的な平和と安息とは本質的に違っているものだと言えます。なぜかと言えば、動物の平和は自由の欠除が原因であるのに対して、子供の平和は自由が眠っていて目ざめないことに原因があるからです。だが、やがてこの子供が肉体的に成長して、自己を男性に対する女性として、あるいは女性に対する男性として〈性的に〉自覚するときがやってきます。するとどうなるでしょうか？　性的なるものというのは人間における肉的・感性的なものの極限の姿でありますから、このような性的自覚において人間は、自分が肉として規定され束縛されたものであったことにまず気づくでしょう。そして第二にそれと同時に、――ちょうど〈右〉と言ったら直ちに〈左〉が予想されてくるように――この肉と絶対的に矛盾対立する霊としても自分が規定されていたことに目ざめるにいたるのであります。かくして第三に、肉と霊という絶対的な矛盾対立を綜合する任務を持つ自由（精神）にも目ざめることによって、精神として自己としての人間の自覚に達するわけなのです。（もちろん、これらは、肉→霊→自由というふうに時間的に順次に目ざめるというのでなく、性的成熟と同時に一挙に自覚されるでしょうが。）――これが、生理的・性的成長に達する青春の時が、人間としての自覚に達する時と同じであることとの意味であります。

前述のように人間は動物とは違い、子供であっても、そのうちに霊肉の対立とそれを担う自由を持っているものですが、その場合の霊肉は自然的・直接的に統一されているのでそれを担う自由も眠っているにすぎませんでした。しかし、生理的・肉的成熟と同時に、その眠っていた自由は、自己が霊肉の矛盾対立を担うという限定・束縛のもとにあることに気づかしめられて、そのことによってはじめて真にいきいきと目ざめるにいたるものであったのです。かくして人間の自由は、自己に対する限定・束縛においてはじめて目ざめるという性格を持っていることを知ることができます。

だが、このようにして〈束縛された自由〉に目ざめることが、実は人間存在の不安の根源なのであります。なぜかと言えば、自由が矛盾対立する霊と肉とを綜合する場合、ケルケゴールが指摘しているように、その自由は一面霊と肉との関係をかき乱す〈敵対的な〉力であるとともに、他面また、霊と肉とを組成しようとする〈友好的な力〉として、二義的に反対の方向に働くことによって、絶えず自己自身を不安定ならせるからであります。つまり、霊肉の綜合者としての自由は霊と肉とを互いに逆わせ、その関係をかき乱させる、それとともにその自由は、霊と肉とが離れ離れにならぬように結びあわす。――このような、矛盾した働きを無限に営まざるを得ぬものとして限定・束縛されているものが人間の〈束縛された自由〉だったために、自由は自己自身に対して不安を持たざるを得なくなるのであります。自由は、霊肉の関係をかき乱す〈敵対的な力〉としての、またそれを結び合わす〈友好的な力〉としての、決してある地点に安定することのできぬ矛盾した自己を否定してそこから脱け出ようと願っても、脱け出るわけにはいきません。なぜならその自由は束縛されているのですから。さらばと言って、そのような自己を肯定・受容することもできません。なぜならそれは安定がないのですから。われわれはこのような、矛盾対立する霊肉を綜合するべく規定され強いられているわれわれにおける〈束縛された自由〉とそこから結果する不安を、われわれの力によって癒すことはもちろんできないでしょう。言うまでもなく、われわれは霊と肉とを綜合する自由（精神）として作られている現在の自己を、自己の力によって別の構造を持った自己に変化させることはできないからです。それでは、われわれはいかにしてこのような不安な自己に耐え、それを受容することができるでしょうか。それは、ケルケゴールが『死

四千五百校以上、最近では五千を越える小中高校がきています。京阪神地方から小学生、その他からは中高生というぐあいに、毎年、六〇数万の児童や生徒たちが、イセにきています。たとえば京都では公立小学校一四四校全部が六年生をイセに送っているのですが、同志社の岡本清一教授は同市中学生約一千名を調査して次の結果を得ました。

1、イセ神宮へいった者　九八・一%
（男九九・一%、女九六・七%）
2、おじぎをした者　七一・〇%
しなかった者　一一・九%
覚えていない者　一七・一%
3　よその神社でもおじぎする者七一・四%
（男六二・〇%、女八二・八%）
4、家に神棚のある者　七四・四%

自発的、強制的のいずれにせよ、生徒の七割が神社参拝をしてヤタノ鏡を拝んでいる、という事実は注目に価します。この子供たちはオハライを喜こんでうけたでしょう。水藤さんのお子さんは、オジギをしない三割弱の中にはいるわけです。しかし、先生たちが、オハライのために整列させたり、拍手の指導をしたりしたらどうでしょう。また、どうしたらそれを阻止することができるでしょう。

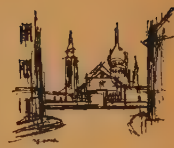
先年、兵庫県のある学校が修学旅行に先立って、「二拝二拍手一拝」といった参拝作法を教えたことがあります。たまたま日曜学校に通っていた生徒がこのことを不思議に思って、教会で話したため、問題になりました。最後には、文部省が「このようなことはいけない」という通達を出して、一応落着しました。わたしたちはこのようにすばらしいキリスト教教育を行なってきた、その子の家庭、日曜学校および教会を誇りとするものです。ところで、お宅のキリスト教教育はどんなぐあいでしょうか。

最近、リバイバル・ブームの最先端をゆくイセ神宮では、「神域の尊厳」を守るために遊山気分のお客を入れないことにしました。レクリェーションのつもりで参拝してはいけないわけで、再び「二拝二拍手一拝」式の予備教育があちらこちらで行なわれそうです。わたしたちは主なる神とそうでないものとをはっきりと見わける必要があります。そして神ならざる神にオジギをしないように心がけるべきでしょう。神社の祭神は人間がほとんどです。しかも、忠臣孝子ばかりとは限りません。また、カガミや剣、蛇や狐などがあります。しかも、蛇や狐に仕える神主から「無病息災、商売繁昌」を祈ってもらうとは由々しいことです。いくら、向こうが好意をもって申し出ても、これは受けとるべきではありません。こんな場合、わたしたち日本人は恥をかかせないため、相手の顔を立てて、そのまま受けることが多いのですが、それは信仰や良心に忠実なあり方とはいえません。靴磨きやタクシーでも、不用なものは不用といってことわっているのですから、信仰の問題でこれができないはずはありません。ウソを吐かないしつけと同様、ノーというしつけをつけるべきです。幼ない子供に対しては、親や教師がこれを訓育する責任があります。修学旅行の引率教師は神主よりも、児童の良心としつけに責任を感ずるべきではないでしょうか。太平洋戦争中、アメリカの一小学生が信仰上の理由から国旗に対する敬礼を拒否したことがあります。しかも、最高裁判所は、その児童の良心の自由を戦時中にもかかわらず認めました。不敬罪復活運動がふたたび始められようとしています。わたしたちは、君が代を歌わず、日の丸に敬礼しない子供をつくりあげるとともに、わたしたち自身、兵役に対してはノーといい、神以外のものに対しては、断然、オジギを拒否しなければなりません。あのウィリヤム・テル親子のように。フスのように、ルーテルのように。そして、わが二六聖人たちのように。

では、ごきげんよう。

（日本聖書神学校講師）

《信教の自由を守るために　1》



神社の前でのおじぎ

——水藤さんの問いに答えて——

宮　崎　彰

おげんきですか。

うっとうしかった夏もいつしか去って、すがすがしい秋になりました。小さい人たちは遠足や修学旅行の季節で大喜びでしょう。今年も米作は良の上とか。御地でも豊年を寿ほぐ、祭りの太鼓が一段と賑やかなことと思います。またしばらくの間、祭礼の寄付を断るのに一苦労しますね。

遠足といえば、上田の水藤さんからこんなお便りがありました。小学校三年の坊ちゃんが遠足で郊外にある白蛇神社（大蛇がまつってあるそうです）に行ったら、神主が皆をならばせて、オハライをしたそうです。強制されて、子供心にも不快指数一〇〇に近かった少年は、さっそくママに報告したわけですがもちろん修祓（オハライ）などということは知りません。おかあさんが、さっそく学校を訪ねて、きいてみると「神社側で皆の幸福を祈りたいというから、受けたまでで別に他意はなかった」のだそうです。学校側では、たいしたことではない、どうして騒ぐのかと思っているようですが、代議士ではあるまいし、無理に頭を下げさせられた少年の心には生涯癒すことのできない傷が残ったことでしょう。

しかし、こういう事件は、子供たちが報告しないまま、日本中到るところに発生しているのではないでしょうか。たとえば、東京都の都立神田保育園では、毎年、一一月一五日いわゆる七五三のとき、五〇人の園児全員が深谷園長に引率されて近所の神田明神に集団参拝し、オハライを受けています（一九六〇・一一・一六　東京新聞）。私立の施設ならともかく、公立の学校や施設が、このような集団参拝をさせることは憲法の禁ずるところです。子供だからさしつかえないというものではありません。いや、子供たちだからこそ、引率者や監督者がしっかりとしてもらわないと困るのです。東京都の教育局も民生局ももっと慎重に行動してもらいたいものです。

もっとも、神田は特殊な町のようです。たとえば、神保町三丁目町会はお盆に、すなわちこの七月一三日夜、これまでに殺したネズミ・蚊・蝿・ゴキブリなどの害虫の霊をとむらうために祭壇を設け、里イモ、カボチャ、西瓜などを供えた上、深川立法院の石井大僧都を招いてお経をあげてもらいました。じかも、その席には神田保健所の野村衛生課長が同席。皆といっしょに珠数をまさぐっているのです（一九六一・七・一四　東京新聞）。いくら日本人はタタリを恐がるといってもあまりのしわざ。しかも、お役人までが「ナムアム……」とやっているのは正気の沙汰とは思えません。公務員は、天皇以下、チリンチリンのオジさんまで、憲法の条項を単に守るだけでなく、その精神を徹底させる義務と責任があります。民間の団体や私立学校ならしかたがないでしょうが、国およびその機関、すなわち公立学校となると問題は別、けじめをはっきりさせてもらわなければいけません。かれらはその行動をもって、特定の宗教活動と宗教教育とをしていることになります。この点、お宅の町会はだいじょうぶでしょうか。

遠足や修学旅行というと、ほとんど神社仏閣なのは、はなはだ困りますね。

イセ神宮を例にとると、一九五四年以来、

とよばれている人たちだ。しかし、厳密には〝難民〟ということばは当たらないと言われるのも、宍戸氏が語る事情に照らせばなっとくがいくだろう。

「東ドイツでは、昨年から農業の共同化を行なってきていますから、たしかに西のほうがラクなのは事実です。」

と宍戸氏が語る通り、東ドイツは目下、人民平等の社会主義国家建設途上にある。したがって、軍事産業の盛んな西ドイツのような豊かさがいまはないことも事実だ。だから、この機会に西ドイツへ移住する〝難民〟を、ドイツ民主共和国（東ドイツ）では「共和国逃亡者」というのももっともだろう。地味な東ドイツの若い女性は、やはりはなやかな西ドイツをあこがれるらしい。それに、第二次大戦で手ひどい被害を受けたのは東ドイツだったから、軍需経済の西ドイツほど復興が進んでいないという事実もある。こうしたところから、西ベルリン占領地区にあるアメリカのリアス放送局は、ソ連の抗議をしりぞけて規模を拡大し、東ドイツの「ドイツ放送」「民主共和国放送」「ベルリン放送」などをしのぐ強力な電波を流して、連日東ドイツ国民に逃亡をすすめ、年末まで、つまり講和条約が結ばれるまでに逃げないと脱出できなくなるといった宣伝をくり返している。こうして、西側の言う〝難民〟はあとをたたない。東側としては、この際、西側の自由な宣伝工作を許さず、自国の境界を確保するという挙に出たわけである。

「とにかく、もう東と西のケンカですね。西は東の交通制限を怒るし、東は西のスパイと軍国主義をにくむし……」

――では、どうなることでしょう、このありさまは。

「この交通制限や難民さわぎは、言わば、〝危機〟のトバッチリ、単なる現象ですよ。問題の本質は、ドイツ問題をどうするかということです。境界をはっきりしたからといって西側の文句は言えません。問題は講和条約をどうするかですよ。」

ただ、西側のアメリカとしては、西ドイツの占領状態をなるべく長く続けて、そこをヨーロッパにおけるアメリカ勢力の重要拠点としておきたいという眼目があるから、そうかんたんにドイツ問題の解決がくるとは思われない。

――とにかく、もういまとなっては、これまでのようにお茶をにごすといったやりかたで延ばすわけにはいきませんね。

「ええ、それでソ連は、年内にまとまらねば東と単独でやる、といった、はじめから西を追いこんだ形でやったんですね。いずれにしても、ベルリン問題で火をつけたら困るんで二〇〇万のベルリン市民のかわりに、二億の人を殺すことはなかろうなんてことばが出るくらい……」

――しきりに危機が叫ばれますが、どんなものでしょう。

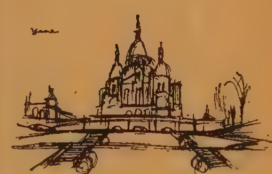
「いや、〝ベルリン危機〟の危機感にしてもニュアンスがちがうんで、アメリカはこれをあおり立てることによって、NEATO諸国の結束を固めるつもりでしょう。しかし、イギリスなんかではそれほどでもありませんね。なにもそうさわぐことはない、ここでじっくりと交渉して、という空気が新聞に強く出ていますね。

これに対して、九月はじめにユーゴで開かれた、ナセル、チトー、ネールらの〝中立国首脳者会議〟のいわゆる第三勢力がかなりの力をおよぼしています。これが、今後も東西間の緊張緩和になることを願いたいですね。

とにかく、このベルリン問題ではあまり鳴り物が多すぎるんです。毎日はいってくるアチラのニュースはたいへんなものです。それで、〝ベルリン危機〟はフルシチョフ製で、〝危機感〟のほうはケネディ製だと言われるんですが、どうも問題の実体とムードとの間にズレがありますね。」

『ベルリン危機』の実体

——「共同通信」宍戸寛氏に聞く——



ヨーロッパの一角、ベルリンでのできごとが、大きな「危機」としてクローズアップされて以来、わが国の新聞も連日大見出しの報道でまことににぎやか——とはいえ、いったいなにが問題で、なにが「危機」なのか、断片的なニュースでなく、問題の全体的な理解を求めて、同じキリスト者のよしみから、共同通信外信部に部長の宍戸寛氏をおたずねしてみた。

——徹夜明けでお疲れのところをどうも……。そもそも、問題の起こりはどこにあるのでしょう。

「直接には本年六月、フルシチョフとケネディのいわゆるウィーン会談で、フルシチョフから手渡された〈ドイツおよびベルリンに関する覚え書〉が発端ですね。いま、危機とは言いますが、本質はベルリンではなく、ドイツ全体なんです。というのは、一九五八年の暮、ソ連がドイツ問題を放っておけないと発言したことがあります。つまり、ドイツはいまもって協定条約といったものでなく、なんとなく、占領状態のままなんです。この不安定な変則的状態の解消を、というのがソ連の言いぶんだったんですが、それがいままで延び延びになってきたんですね。それで、ソ連としては、占領によって分割されている東西ドイツの即時統一は現状では不可能だから東西別々でそれぞれと平和条約を結ぼうと提案したわけです。しかも、それを西側の占領国も半年以内にしなければ、ソ連だけ東ドイツと単独講和をやるという最後通告となったわけです。」

——すると、単独講和が結ばれて、ソ連と東ドイツの間に占領国被占領国の関係がなくなることがどうして西側には困るのですか。

「ごぞんじのように、ベルリンは東ドイツ領内にありまして、西ドイツから西ベルリンへの通行は、東ドイツを飛びこえて飛行機でやっていますね。ですが、講和が結ばれると米・英・仏の占領下にある西ベルリンは、直接東ベルリンに管理権が移るから、西側は困ると、こう解釈するんです。そこで西側は、ベルリンを国際的自由都市にしようというわけです。」

——ですが、ソ連はソ連で半年以内に講和を結ぶという最後の線を出していますね。

「それで、動揺は東ドイツ国民に起きたんです。それは、ベルリンの東側と西側はいままでは交通は自由だったんですね。地下鉄なども東西通して動いていて、境界検問もなかったんです。ですから、東から西へ、毎日五万人ほどの人が働きに通っていたわけです。ところが、講和が結ばれると、そうはいきません。仕事に通えなくなる、失業です。それでは困るというわけで、講和条約が結ばれる前に西へ移っておこう……とこういう人たちがいま一日に二、〇〇〇人いるということです。」

つまりこれがいま、マス・コミで〝難民〟

ない名医でしたし、しごとができないほどおいぼれたとは、考えられませんでしたから。しかし博士は、だれのことばにも耳をかしませんでした。病院で働いていた人たちには、ひまをやり、かんばんは、はずしてもしてしまいました。そのとき以来博士は、がらんとした建物の中で、ひとりでくらしているのでした。

2

博士は、ゆっくりと手をのばしてかたわらの小さいテーブルから、たばこのケースを取りあげました。上等のはまきを一本、くわえて火をつけると、こんどはテーブルの上の写真帖を手に取って、ひらいてみました。

最初のページには、あかんぼうの写真がはってあります。生まれたばかりの博士です。生まれたばかりでも、もう、ひとなみでない、かがやいた目をしています。博士の生まれたのは、写真屋など一けんもない山おくの村でしたが、両親は、ごじまんのあかんぼうの写真を、ぜひ一枚とっておかなければ、と考えたのでし



ょう。とおいとおげをこえて、ふもとの町まで、あかんぼうをだいて行ったのでした。

つぎの写真は、口をきりっとむすんだ小学生です。むねにぴかぴかするきしょうをつけて――。タックバウエル少年は、学校始まって以来のせいせきで、村の小学校を卒業したのでした。

タックバウエルを中学に入れるため、両親は、山おくの村を出て大きな町にうつり住みました。タックバウエルは、たしかにそれだけのねうちのある少年でした。生まれ故郷の村からも、町の中学からも、かれのために、おかねを出してくれました。中学でも、かれはいつも一番でした。タックバウエルが二番になるなんて、だれひとり考えることもできませんでした。

このころの写真のかれは、ぐっとうでを組んで、かたをいからしています。

「組の一番なんて、なんだい。ぼくがいまに、どんなものになるか、見ていろ。」

と、言っているようです。

タックバウエルは、医科大学にはいりました。大ぜいの人から尊敬されるには、医者になるにかぎると、かれは考えたのです。むつかしい医学の勉強もかれには、たやすいことでした。二二才のときにはかれは国中でいちばんわかい医学博士になっていました。タックバウエル博士になったのです。

大統領の重い病気をなおしてからというもの、博士の名は国中にひろまりました。博士よりずっと年



タックバウエル博士（はかせ）とおさな友（とも）だち

文 大井三重子
絵 市川禎男

1

タックバウエル博士（はかせ）は、庭のしばふにとういすを持ちだして、こしをおろしていました。木のえだごしの夕日が、博士の、はい色のかみと、はい色のまゆげと、そのまゆのあいだに寄った深いたてじわを、てらしだしています。花壇（かだん）には、今しもユリの花が、まっさかりでした。テッポウユリ、クルマユリ、カノコユリ――。えらいおぼうさまの、ころものような、しゅ色のオニユリから、花びらのうちがわに、えんじ色のとげとげした点を散らした、野生のヤマユリまで、それぞれの色とかおりを、きそっているのでした。

これらのユリは、どれも、博士の死んだおくさんが植えたものです。おくさんは、ユリの花がすきで、花屋の店に、かわったユリをみつけると、さっそく買って来て庭の花壇に植えるのを、いちばんのたのしみにしていました。

おくさんが死んだ、はじめのころ、タックバウエル博士は、いっしょうけんめい、花壇のせわをしました。こどものない博士は、おくさんの残していったユリの花をたいせつにすることで、せめて心をまぎらせようとしたのです。ところが、いつとはなしに博士は、ユリをかまわなくなりました。博士がかまわなくても、出入りの植木屋が時おりやって来て庭の手入れをしていきますので、ユリは、おくさんが死んだのちも、年ごとに美しい花をひらきました。が、博士は、目をとめてそれをながめようとも、ほとんどしませんでした。

花壇のユリが目にはいるたびに、博士は、わけのわからない重くるしい気分におそわれました。かと言って、あのユリをひっこぬいてすててしまえと言いづける気にもならず、なにをするのも、なにを考えるのもいやになった博士には、本職の医者のしごとまでが、めんどくさくてたまらなくなりました。

「小生（しょうせい）こと、老齢（ろうれい）のため、これからのちは、いっさいの診察治療（しんさつちりょう）を、おことわりいたします。
ドクトル・タックバウエル」

こんな、はり紙が、病院のげんかんにはりだされたとき、人々はおどろきました。タックバウエル博士は、国中でも、ならぶものの

にか見おぼえがあるような気がしたのでした。しかし老人は、つぶれたぼうしを取って、おじぎしながら、

「とつぜん、しつれいいたします。じつは、わし、植木屋ですが……」

「植木屋？」

「へえ。今ここを通りかかりましたら、あまりいいにおいで、へえ……見るともなしに、のぞいてしまったがです。……すると、その……」

「話は、てっとりばやくしてくれ。」

いらいらして、博士は言いました。

「へえ、すみません。じつは、あのすみのヤマユリですがなあ。」

植木屋は、ふしくれだった指で、花壇をさして、

「出しゃばりじじいめとおしかりを受けるかとも思いますが、あれが一本折れてますで、いじってもよろしいでしょうか？」

「いじりたければ、いじってもいいが、かねははらわんよ。庭の手入れは、出入りの植木屋にさせることになってるんだ。」

「へえ、そりゃもう――おかねなんぞ、めっそうもない。おしかりもなくゆるしてくだされるだけで、ありがたいことでございます。」



植木屋は、花壇にはいって行きました。博士も、つりこまれて、立って行ってみました。のら犬にでもふまれたのでしょうか。ヤマユリが一本、くきの中ほどから折れています。白い花は、しおれかけて、ぐたんと首をたれています。老人は、かれえだを一本ひろうと、折れたくきにあてがい、ももひきのかくしからひもを取りだして、ゆわえつけました。太い指が、よく、きように動くものだと、博士は、ものめずらしくながめていました。

「これでええです。折れてから間がないから、きっとつきますだ。」

植木屋は、目をほそめて笑いました。

「このユリは、わしの村の野っ原にも、たくさんさいていましたで。古い友だちに会ったようで、このまんま行きすぎる気になれませなんだ。へえ、おさわがせしました。」

植木屋は、ぺこりと頭をさげると、木戸から出て行きました。タックバウエル博士は、夕やみの中に立って、その、うしろすがたを見送っていました。

たしかに見おぼえがある顔だ。あのことばづかいにも、聞きおぼえがある――。さすがの博士の頭にも、こればかりは、思い起こすことができなかったのでした。

（つづく）

上の先生たちが、博士のところへ意見をききに来ました。そんなとき博士の目は、まんぞくと、とくいさで、きらきらしていました。

こうなると、おかねもどんどんはいってきました。写真帖には、新聞から切りぬいた写真もはってあります。博士のたてた病院を正面から見たところです。それは、国中でもいちばん、設備のととのった、りっぱな病院でした。なんでも一番の博士に、ふさわしい病院だったのです。

病院には、家と庭が——今タックバウエル博士が、とういすにもたれて写真を見ている、美しいしばふと花壇のある庭が——ついていました。家には、およめさんが来ました。けっこん式の写真には白いもすそをひいた花よめさんと、せの高い堂々とした博士とが、ならんでうつっています。花よめさんは、うでにユリの花たばをかかえています。ほんとにユリの花のすきな花よめさんでした。

おくさんが来てから博士は、ますますねっしんに、しごとをしました。金持の人たちは、何十万円出しても、タックバウエル博士に治療してほしいと、たのみに来ました。博士にみてもらいたいのは金持ばかりではありません。びんぼうな人たちも、やっぱり病気になります。びんぼうな人たちは、早目になおさないでほうっておくため、悪くなることも多いのです。タックバウエル博士は、よくばりではありませんでしたが、金持をさしおいてまで、びんぼう人をみてやる気はなかったのでした。ただ、めったにない、めずらしい病気にかかった人があると、博士は、どんなあばらやへでも、とんで行きました。博士にとって、病人は、自分の頭のよさ、うでのよさをためしてみる、道具みたいなものでした。

「じゅみょうのつきた年よりはべつだが、それほどの年でない人なら、わたしになおせない病気は、ひとつもない。」と、博士は言っていました。

ところが、たったひとり、博士の手におえない病人ができました。それは、博士のおくさん——まだわかわかしい、美しいおくさんでした。博士は、自分の知っているくすりを、かたっぱしから、もちいてみました。が、ききめはありませんでした。これが、ほかの医者だったら、自分で手をつくしてだめな時は、

「タックバウエル博士を、たのんで来よう。」

と言えるのですが、博士には、それができませんでした。国の中はもとより、となりの国にも、そのまたとなりの国にも、タックバウエル博士よりえらい医者は、いなかったからです。

初夏の夕方、おくさんは死にました。博士は、なにをする気もなくなって、病院をしめてしまったのでした。

3

「あれから、何年になるか。」

博士は、口の中でつぶやいて、写真帖をテーブルの上に投げだしました。

「わたしという人間は、いったいなにをして来たのだろう? わたしは、いつも一番だった。したいだけの学問をし、あらゆる人からほめたたえられ、一生くらせるだけの金ももうけたのに、どうしてこんなに、あじけないのだろう?」

博士は、暗くなりかけた空に向かって、はまきのけむりをはきました。その時、

「ごめんくだせい。」

しわがれた声がしました。博士は、身を起しました。うすみどりにぬった庭木戸をおしあけて、ひとりの老人がはいって来ました。物売りにしては、荷物を持っていません。以前にみてやった、患者のひとりだろうか? と博士は、首をかしげました。老人の顔に、な

のだ。われわれは廃墟の中で生まれた。しかし崩れ去った周囲の建物は、われわれに属していたわけではない。生まれた時すでに黄金は瓦石に変っていたのである。

他の世代によって、日常生活が、これほど頼りなく見えたことがあろうか。われわれは、所有の観念まで失ってしまった。縁組とか、就職とか、経歴とかいうことについて、何を聞いてももはや夢を持つということはない。旅行鞄がいつでも、手の届く所にあるのだ。

国民的精神の値打ちがなくなり、同時に、われわれの属する社会的階級が分解した直接の結果は政治的無関心と国家的義務の崩壊であった。良き市民であるという感情は、政治的美徳の中でもまったく老朽した感情であって、安全を保障されているという感情と同じように、われわれにとっては縁のない感情である。

これはP・V・D・ボッシュの『われら不条理の子』のなかの一節ですが、フランスだけの問題ではないわけです。こういう虚無のなかの青春に向かって、人生は無意味ではないといくらいってみてもなんの意味もありはしないでしょう。むしろ、生きることに意味がなくなってしまっている、というその現実をごまかすことなくみつめるところから、問題の解明がはじまらなければなりません。

無意味さに徹する　そこにひとつの生きかたが生まれてくるのです。それは、人生にはもともと意味なんかありはしないのだという自覚に徹して生きるということです。すぐに思い出すのはサマセット・モームです。モームの自伝的小説『人間の絆』の主人公フィリップ・ケアリはいうのです。

人生に意味などあるものか。空間を驀進している一つの太陽の衛星としてのこの地球上に、それもこの遊星の歴史の一部分である一定条件の結果として、たまたま生物なるものが生まれ出た……人間もまた、その意義において、他の一切の生物と少しも変りない以上、それは、創造の頂点として生まれたものなどというのでは、もちろんなく、単に、環境に対する一つの物理的反応として、生じたものにすぎない。人生の意味など、そんなものは、なにもない。そして人間の一生もまた、なんの役にもたたないのだ。彼が、生まれて来ようと、来なかろうと、生きていようと、死んでしまおうと、そんなことは、一切なんの影響もない、生も無意味、死もまた無意味なので……。

このように、人生とはもともと無意味なものなのだというみきわめを持つなら、そこからひとつの生きかたが生まれてくることはたしかでありましょう。モームの場合、それを、「ペルシャ絨毯の哲学」とよぶのです。要するに、人生は無意味であるとわかってみれば、人生における成功や失敗、幸不幸に心を労することもいらないので、ペルシャ絨毯の織匠が、ただその審美感を満足させるために絨毯の模様を織ってゆくように、人生はただ自分の喜びのために生きてゆけばよいので、目的を実現するために生きるというようなことは、それ自体がナンセンスだというわけです。

これはたしかにひとつの生きかただといえましょう。多くの人が

生きる意味について・最終回

二つの人生

佐古純一郎



人生は生きるに値するか

「人生が生きるに値するか否かを判断すること、これこそ哲学の根本問題である」とアルベール・カミュが『シジフォスの神話』の冒頭に書いているのですが、たしかにいま多くの若者たちが、人生はほんとうに生きるに値するかどうかに懐疑しているのではないでしょうか。先だっても、わたくしは大学生のセミナーに参加したとき、多くの大学生から、学問したって何になるだろうか、と考えるとばかばかしくなる、というようなきわめて虚無的な告白をきかされました。まじめに働けば働くほどばかをみるような社会、正直者ほどばかをみるような社会では、人生なんて生きるに値しないようにも思えてくるでしょう。そうして、事実、人生なんて生きるに値しない、と人生の無意味さのゆえに自ら人生を清算する人もけっして少なくないのです。よくいわれることですが、今日の日本においてほど青年の自殺の多い国はないということです。統計の示すところでは、いちばん多いのが、生きることがいやになった、という理由ですが、要するに、人生無意味ということなのでしょう。

だけど、それなら、わたくしたちは、いや人生とはそういうものではない、人生には意味がある、とかんたんにいいきることができるでしょうか。ただ安易に、人生は無意味ではない、といってみたところで、問題はどうにもかたづかないのです。

われわれは古くなり、酸敗したのではない。ゼロから出発する

スを讃えます。

> 私はシジフォスを山の麓に置いておく！　人はいつも繰り返し自分の重荷を見出す。しかしシジフォスは神々を否定し、岩を持ち上げる高い誠実さを教えるのだ。シジフォスもまた、すべてはよしと判断するのである。もはや主人をもたないこの宇宙は、彼には不毛だとも空しいものとも思われない。この石の一粒一粒、深い夜に満たされたこの山の金属的な輝きの一つ一つは、ただ一人の彼に対して、一つの世界を形づくる。頂上にむかう闘争そのものが人間の心を十分満たすのだ。幸福なシジフォスを思い描かねばならぬ。

　モームのペルシャ絨毯の哲学にくらべたらカミュの反抗の倫理ははるかに積極的であるといえましょう。どんなに無意味であってもさいごまでその無意味さに反抗していくという生きかたは、まことに男らしい人生態度であります。だがしかし、ここで考えてみなければならないことは、シジフォスの苦役は神々がシジフォスに課した刑罰だった、ということです。無益な石の運搬にシジフォスが耐えられるのは、それが神々の命令であり、刑罰だからかもしれません。そうではなくて、それがシジフォスの自由意志からのものだとしたら、はたしてシジフォスはそういう無益な苦役に耐えうるのかどうか疑問ではないでしょうか。

意味の創造　人生に意味があるかどうかを問うのでなく、意味はわたくしたちがつくり出していくのだと考えましょう。人生の意味は、先験的にわたくしたちの中にあるものではありません。わたくしたちがつくり出していくからこそ人生には意味が生じるのです。モームのように人生には意味なんかないのだと判定してしまうのでなく、カミュのように無意味さにどこまでも反抗していくというのでもなく、わたくしは、意味を創造していくということが人生を生きるということだと考えるのです。いいかえるなら、意味のないところに意味を創造していくこと、それが生きることとの意味なのだともいえるでありましょう。

　人生に意味を創造していくということは、どのようなことでありましょうか。そのためには、わたくしたちは、どのような条件の中で、意味を見出しうるのか、ということを考えてみなければなりません。これはわたくしの独断になるかもしれませんが、人生の意味とは、他者との力強い連帯がいきいきと成り立っているときにのみ生まれてくるのではないでしょうか。たとえば、恋愛ということでもいいのです。あなたが、生き生きとした恋愛を生きているとき、人生はあなたにとって無意味でありましょうか。昨日まで灰色に見えた人生が、急に生き生きとした意味にみちあふれてくるのではありませんか。他者との力強い連帯ということは、もっとはっきりいうなら、交わりの生活ということになりましょう。交わりの生活のなかでのみ、人生は意味を持ってくるのです。だから、人生の意味を創造するということは、要するに交わりの生活を創造するということにほかなりません。

独白から対話へ　近代の思想は、ほとんど独白という姿勢からなされてまいりました、要するにひとりごとです。みんながめいめい

こういう生きかたを選んでいるわけです。いまわたくしは、こういう生きかたに対して批判をするということはさしひかえます。そうして、わたくし自身はこういう生きかたには満足できないという、平凡な事実を打ち明けるにとどめましょう。わたくしは、モームのようなペルシャ絨毯の哲学を自分の人生哲学にすることはできません。みなさんはどうなのですか、と問いかけたい。自分の人生は、このほかならぬ自分が生きるのですから、わたくしたちは、自分で決断するよりほか、人生を生きるということはありようはないのです。

反抗の倫理　世界はこの上もなく不条理なものであり、人生はたいして生きるに値しない、という判断にもかかわらず、モームのような「ペルシャ絨毯の哲学」におちいることなく、さいごまで、反抗していこうとする生きかたがあります。アルベール・カミュの選んだ反抗の倫理はそのようなものでありました。「人生が生きるに値するか否かを判断すること、これこそ哲学の根本問題に答えることである」と前提してカミュはつぎのようにいうのです。

或る問題が別の或る問題よりも緊急であると判断する基準は何であるかを考えてみる時、私は、その或る問題が惹き起こす行為が基準である、と答える。未だ嘗て私は、存在論的な論証から人が死ぬのにであったことがないのである。ガリレオは、重大な科学的真理を信奉して動かなかったが、そのために自分の生命が危なくなるや、まことにやすやすとその科学的真理を放棄した。或る意味では、これは当を得た振舞であった。そんな真理は、ために火あぶりにされるには値しない。地球が太陽の周りをまわるのか太陽が地球の周りをまわるのか、これは実際のところどうでもよいことなのだ。言ってしまえば、これはくだらない問題だ。これに反して私は、多くの人間が、人生は生きるに値しないと考えるが故に死んでゆくのを眼にしている。また私は、自分達に生存理由を与える観念や幻想のために殺し合いをするという自家撞着を犯している多くの人間をも眼にしている。だから私は、人生の意味こそ最も緊急な問題であると判断する。

人生の意味こそ最も緊急な問題であると判断したカミュは、しかし、積極的に人生の意味を見出したとはいえないのです。人生はカミュにとって、「不条理」という一語に尽きたのです。「不条理」とは人生には意味が見出しえないということでした。しかし、そこから、人生は無意味だと絶望してあきらめるのではなく、どこまでも不条理に反抗するのが生きるということだ、とカミュはいいます。だから、人生は生きるに値しないからといって自殺をすることは、カミュは承認しません。シシフォスの神話のなかに、カミュは反抗の倫理のお手本を見出すのです。神々はシシフォスに休みなく岩を山の頂上まで転がして運びあげる刑罰を課しました。シシフォスがやっとの思いで石を運んで山の頂上に達しますと、石はそれ自身の重さでまた落ちてしまうのです。するとまたシシフォスはよいこらしょよいこらしょ、と頂上に向かって石を運んでいくのです。シシフォスの労働は無益で意味がありません。それでもシシフォスはその無意味さに耐えて、石を運ぶのです。カミュはそういうシシフォ

書きました。そのような連帯社会がどういう性格の社会であるべきかは、これからわたくしが、自分の主体性をかけて探索しなければならない課題であるわけですが、国の主権者として、わたくしは、日本の社会を連帯社会に形成していくということを主張しうるはずなのです。わたくしはいま、コムュニズムの社会こそ連帯社会である、などといきなり叫ぼうとするのではないのです。しかし、連帯社会の必要条件は、まず階級のない社会をつくることにあるということだけは、はっきりと宣言できると思います。もし、そのような階級のない社会のことを、社会主義社会というのなら、もうわたくしは、はっきりと、自分が社会主義者であることを、宣言したいと思います。階級社会はまことに不条理なものであります。そこではほんとうに働く人々が労働に積極的な意味を見出すことができません。富の分配があまりにも不平等であります。人々は敵意を抱いて二つの階級に分裂してしまいます。そうして、知識階級は、両者にこびを得るような形でしか、知識を運用いたしません。いまわたくしは、エーブラハム・リンカーンが一八六一年の国会に送ったメッセージの一節を想い起こします。「労働は資本よりも重要であり、また資本から独立しているものである。資本は労働の果実にすぎず労働がまず存在しなければ、存在しえなかったはずのものである。労働は資本の養い手であり、もっと尊重されてしかるべきです」。真実の知識とは、そういう労働の神聖性を深く自覚し、人が生き生きとした意味を感じつつ労働しうるような社会をつくり出すことに奉仕すべきであります。

> 山ほどの富のまっただなかで人間が苦しみぬいているというのは、いまや全世界的なスキャンダルとなりつつある。現代的で効率よい、科学的な社会主義の思想が全世界にひろがりつつあるのは、資本主義機構の混乱のなかではもう同志的精神も、自尊心も、友愛も可能でなくなっているからである。このことはいまでは、象牙の塔の学者にとって明らかであるばかりではない。それは、故意に維持されている暗闇のなかから明るい日光と知識のなかにすすんできつつある圧倒的大多数の大衆の道義的財産なのである。

こう叫んでいるのは、スティーヴン・ホール・フリッチマンです。「私は聖職者として、日々の生活の移りかわりのなかにいる男女といっしょに活動している教区牧師として、書いている」のだと前提しています。わたくしたちの社会に、社会主義社会のイメージをはっきりともたらしてくれたのは、わたくしたちの教会の先輩たちではなかったでしょうか。

たしかに生きることに意味が感じられないというのが、いまわたくしたちの現実であるのかもしれません。しかし、そこから、人生はもともと無意味なんだと判定してしまって、サマセット・モームのように人生をおもしろおかしく生きる道を選ぶか、意味のない現実をつくりかえて、人生の意味を創造していくような道を選ぶか、人生には二つの生きかたがあるのです。みなさんは、どちらの人生を選ぶのですか。わたくしは、意味の創造に自分のまずしい人生を捧げていきたいと思います。意味のない人生に意味を創造していくことこそ、わたくしにとって生きることの意味だとはっきり自分に向かっていいきかせたいと思います。

に、自分勝手にひとりごとをいっている、それが近代の特色でありました。そこでは、ほんとうの意味で、交わりの生活ということは成り立ちようがありませんでした。独白から対話へ、そうです、対話の生活がつくり出されなければなりません。独白は創造しません。対話のなかからのみ、創造ということがはじまるのです。対話とはなんですか。それは、人格と人格との出会いの姿です。人格と人格との出会いのないところに、対話の成り立ちようもありません。自己を主張する前に、他者の言葉に耳を傾けること、説得することばかり考えないで、向こうの意見にも耳を傾けること、そういうところに対話が成立するでありましょう。

わたくしたちの社会では、家庭において、職場において、あまりにも、対話の生活がなさすぎるのではありませんか。自分の意見は勝手に主張いたしますが、他人の意見をきくということをいたしません。そうしてお互いに、議論ばかりしているから、話し合いが創造になりません。自分の意見に反することはすべて間違いだと判断し、意見を異にする人を容易に敵と判断するのです。そういう対話のない生活から、どうして民主主義の社会が生まれるでしょうか。民主主義の原則は、対話の生活にあります。親と子が、夫と妻が、教師と学生が、男性と女性が、ほんとうに対話しうるような生活をつくり出しましょう。そういう生活のなかから、人生の意味が創造されてくるのです。

主権意識に目ざめよう　もし日本の社会の現実が、生きることを虚無化しているとしたら、それは、わたくしたちひとりひとりの責任だということに気づかなければなりません。国民主権という言葉がどんなに流通しても、わたくしたちひとりひとりが、ほんとうに、国の主権者であることを主体的に自覚しないかぎり、日本国憲法の国民主権主義の原理は空文にひとしいのです。わたくしは、日本の各地に旅行して、わたくしたち国民の間に、まだまだ主権意識がほとんど目ざめていないことを痛感するのです。政治的無関心というようなこともそこから出てくるのではないでしょうか。国の運命に、そうして、社会の現実に、自分が主権者として責任を負うているときに、政治に対して無関心であるということは、ほとんど主権の放棄にもひとしいといえましょう。

主権意識がきはくであるということは、いろいろの理由がありましょう。なによりも、国民主権という権利を、ほんとうに自分たちの手でかちとったのではないということが、主権意識のもてない大きな原因であるのかもしれません。アメリカから配給された権利などという悲しいことをいう人さえあるのです。革命というような自分の手でたたかいとった権利だったら、もっともっと、主権意識が強く持てるのかもしれません。しかし、そんなことは大したことではないのです。要するに、主権在民ということを叫ぶのなら、ほんとうに、わたくしたちひとりひとりが主権者にならなければなりません。そうすれば、生きることに意味を感じさせてくれない社会をつくりかえるのはけっきょく自分なのだということがわかってくるはずです。生きる意味を創造していくことは、わたくしたちの責任なのだということが、そこからわかってくるのだと思うのです。

階級のない社会を　生きる意味についてたずねてきたわたくしは、連帯社会の創造と形成ということにつきあたったことをすでに

すると彼女は怒った声でいったのだ。

「もうないわよ！」

私は、文字通りかたすぎる唾を飲み込んだ。すると何かが爆発しそうになった。それでも私は、やっとの思いでこうたずねていたのである。

「一銭も？」

彼女は答えるかわりに、枕元のビニールの化粧品入れを投げ出した。彼女はそれを財布がわりに使っていたのである。私は、そんなものをわざわざあけてたしかめたりしなければ、ほんとにえらいやつだと思うのだが、しかしそれをぎこちない手付であけていたのである。そんな自分に老醜とでもいうものをちゃんと感じながらだ。そして私は、そのなかに折りたたまれた千円札一枚と小銭が入っているだけなのをたしかめたのだ。私は、力なく彼女へそれを返しながら、思いついてたずねた。

「病院の方から何か請求して来たんですか？」

しかしその私の声は、残念なことにふるえていた。かくす必要もないが、ある恐怖を感じていたのだ。だが、彼女の眼からは、こんな五十男の有様は、実に情ないものにうつったにちがいないことは当然である。彼女は、明らかな軽蔑を、黄色くなっている眼にうかべながらいったのだった。

「家主が、アパートのわたしの部屋の開けわたしをいって来たからよ。二月分もたまっていたんだからね。だから洋子さんに頼んで、もって行ってもらったんだよ」

「いくら……いくらなんです、あの部屋」

「四千五百円よ」

「じゃ、二月分とすると、九千円……じゃないですか」

「来月分も払っておいてもらったのよ」

「一万……三千五百円……」

「何を泣くような声出しているの？」

「だって笠城さんは、いま病気なんですよ！」と私はもはや怒りを押えることができなくていった、「それだのに来月分まで払うなんて。事情が事情だから、話のしようによっては、家主の方も一月分入れるだけで、待っていてくれたかも、知れないじゃありませんか！」

すると彼女は、嘲笑するようにいった。

「何を心配してるの？」

私は、断固として力をこめていった。

「明日のことですよ！　明日のことを心配しているからですよ」

むろん私が力をこめずにいられなかったのは、教会の三原という婦人から来た手紙に対する反抗もあったことは事実だった。明日のことを心配するということは、人間の自然であるというのが、三原という婦人の手紙を読んだ直後の私の反駁だったのだ。それはまたあの気取りやの、安積倉庫係長のお得意の文句の一つでもあったのだ。倉庫係員の吉田の言葉を借りれば、たとえそれが組合の委員になるための票集めの言葉にすぎないにしてもだ。彼は、私のなかなか覚えることのできない外国の哲学者の名前をあげながらこういうのがきまりだったからだ。

「私たち人間の意識というものは、いつも未来との関係なしには生れて来ないんだ。大切なのは、だからその意識のなかの明日なんだよ。その明日に気付かないやつは、馬鹿と同じなんだ。人間の事

夜警番の日記(10)



椎名麟三

10　一つの限界

一週間もたたないうちに、順子が十日ではとても退院できないことがわかった。彼女の顔は、黄色くなって来て、素人目にも黄疸だということがわかった。診断は、肝炎だということだったが、それと同時に病室を変えさせられた。私は、その診断を聞いたとき、ふるえはしなかったが、ショックを受けた。もう私の貯金なんかなくなっていただけでなく、金になるものは文字通りなくなっていたからである。私は、古ダンスのなかの衣類はもちろん、仕事に必要な腕時計まで質に入れてしまっていたからだ。そして質屋は、それらの全部に対して、わずか一万円しか貸してくれなかったのだ。私は質屋の無情を感じた。むろんそんなものを感じる私の方がどうかしているのであって、質屋にとっては、そろばんの上に立たなければならなかったのだということはいうまでもない。私は、その半分の五千円を手許においた。私だって、食わなければならなかったからだ。私は、病院へ行って残りの五千円を順子へわたしながらいった。

「もう五千円、わたしておきますよ。この間、二万三千円わたしてあるんだから、もう十日ぐらい入院がのびても……」

私は、思わず言葉をのんだ。黄色さの増して来た順子の顔は、今日明日が峠だろうという医者の保証にもかかわらず、私に不安を感じさせるものであった。だが、彼女はその顔へ明らかな不快の表情をうかべたのである。私は、思わず危惧を感じてたずねた。

「あの金は……あの金は、少しはつかっているにしても二万円ぐらいまだあるんでしょう」

六才に見える少女だった。彼女は、順子を見ると、白い歯を見せながらにやりとした。
「おかあさん」と少女は順子へいった。「昨日より大分黄色が濃くなってるわよ」
私は、私が順子へかくしていたものを容赦なくずばりといってのけたその少女を、とまどいながら見た。おかあさんと順子を呼んだ以上、順子の年上の娘にちがいないことがわかっただけでなく、もしそうだとすると、少女ではなく、まだ四才の幼女であるはずであったからだ。しかもどうしてその子供がここにあらわれることができたのか、私には思いもつかなかった。だが、その幼女は、私の思惑なんかには関係なく順子へとがめるようにいっていたのである。
「お医者さんがじっとしてなさいというのに、動いたんでしょう!」
すると順子は、母親にでもいいわけするようなまるで彼女には頭が上らないといった口調で答えたのだった。
「じっとしていたわよ」
この病院は、完全看護のはずだった。だが、私は、その幼女の言葉で、便所へも看護婦にもいわずにひとりで出かけて行っているにちがいない順子に、はじめて気が付いたような有様だった。私は、その幼女の言葉の尻馬にのっている情なさを感じながらも、順子へいっていたのである。
「便所へ自分で行ったりしたりしたら駄目ですよ。絶対安静なんですからね。用があるときは、看護婦さんを呼べばいいんですよ。そのためにこの病室にはベルがついているんじゃないですか?」
順子は、それに答えなかった。その彼女の顔には、ある絶望の色さえうかんでいた。彼女の気ままさが、罰となって直ちにはねかえって来たことに、自分の病気の重さを知ったのかも知れなかった。
幼女は、身をひいて不審そうに私を見ていた。私は、急いで話題をかえながらいった。
「この娘さん、呼んだんですか?」
すると順子は、投げやりにいった。
「静子は、一昨日アパートへひとりで来たのよ。洋子さんがその静子を見つけてここへつれて来てくれたのよ」
するとその四才の幼女は、私へ気をかねた囁くような声で、母親をたしなめたのだった。
「余計なことというもんじゃないのよ、おかあさん!」
私は、静子という幼女と一緒に病院を出た。むろんアパートへ送ってやるためにだ。静子は、おとなしく私へついて来た。病院であんなませた口の利き方をする子供とは思われないほどだった。私とならんで歩こうとはせず、遠く後からついて来るのだ。その彼女は急に無口になっていて、まるで自分の所在を失ってしまっているような感じでわき見ばかりしているのだった。その彼女の様子は、一つ年下の、私にねずみの子を踏ませた妹とはまるでちがっていた。おそらく横川の家にいることがつらくなって、幼稚園へ行くときか帰るときに、母親のいるにちがいないアパートへ逃げかえって来たのにちがいないが、そのワンピースのやせてひょろ高い幼い身体全体にすでに生きる苦しみといったものをしみ込ませているように感じられた。横川の妻のいった、電車のなかでおしっこしたというのも、それが事実とすれば、彼女は、その生理的な要求にひとりで耐え抜いたあげくの、みじめで孤独な行為だったにちがいないこと

実というものを無視しているんだからな」
しかも私は、係長からそんな言葉を聞いても、別に異議を感じたことはなかったのである。それだけでなく、それが当然とさえ思っていたのだといって、私は、マタイ伝六章の、あの「明日のことを思いわずらうな」という聖書の言葉を否定しているのではない。私が、その聖句から聞いたキリストの声は、思いわずらうなという点にかかっていた。そこにキリストの明日のことを思わずにはいられない人間の自然に対するあたたかい思いやりと、そのことにこだわりすぎることへのきびしい拒否とが鳴りひびいているように思われていたからだった。そして私には、その拒否こそキリストの愛だと思われていたのである。何故なら思いわずらうというこだわりこそ、人間の不幸の根源になっていることは、私のような五十男の体験のなかで、いやというほど味わされて来たことだからだ。むろん私は、自分の教会においてそんなことを喋ったことはなかった。そんな知恵も才覚も私になかったからである。だが、夜警番にすぎない私を生かしてくれて来たものは、そのことに外ならなかったのだ。
私が、こんな告白をくどくど書いたのは、順子の言葉が、私につよいショックを与えたからだった。彼女は、まるで彼女があの三原夫人であるかのように吐きすてるようにこういったからだった。
「明日のこと、明日のことなんて、それが一体何なの！　明日のことなんて神様にまかしておけばいいのよ！」
私は、だまった。ふいに襲って来た怒りに耐えたのだ。身体の衛生上わるいとは思ったが、私は、腹をたてるには不得手だったのである。その代り私は、窓際へ近付いて行った。空の白い雲にはもう夏の気配を示していて、午後の日射しが明るく街並へ落ちていた。洗濯物は、今日はよく乾くだろうと思った。するとあちこちの家の物干台にひるがえっている洗濯物がやたらに眼につきはじめた。
『自分には、もう金になるものは何もないんだ』と私は考えた。
半月ほどたつと給料が貰える。だが、それも一万一千円ほどにしかすぎない。もしまとまった金を手に入れるとすれば、退職金しかないわけだが、私の会社での身分は、むろん社員ではなく、といって工員でもなく、常傭人夫と同じ身分なのである。つまり工員以下の待遇を受けている傭人なのだ。したがって十数年欠勤もなく勤めて来ているにしても、その退職金は、十万円を少し超えるか超えないかというところなのだ。そんな金で、自分ひとりを支えるにしても一年がやっとのことなのだ。まして順子の入院費を払うという段になれば、二、三ヵ月でとんでしまうにちがいなかった。私は、順子のベットへ戻っていった。
「二、三日したら、次の十日間の入院費の請求があるだろうと思いますよ。しかしそれは何とかして工面して来ますから、たとえわたしの来るのが、一日か二日おくれても必ずもって来ますから、病院へ支払いを待っていてもらうようにいっておいて下さい」
すると、彼女はいった。
「何を心配しての！　心配することなんかないわよ！」
私の心にある絶望のあったことは否むことはできなかった。ただ私のできることは、行きつくことのできるところまで行って見るということだった。私は、残していた五千円のうちから、三千円をさいて彼女の枕元へおきながらいった。
「じゃ、わたしは、今日これで帰りますからね」
そのとき、一人の少女が入って来た。背のひょろ高いしなびた五、

すると静子は、落着いた当然そうな口調で答えた。
「わたしたちは、ただなのよ。大人の人の後へついて行けばいいのよ。映画館もただなのよ。吉子もそうなのよ」
「吉子って、妹？」
彼女は肯いた。そしてそのとき私は、はじめてあの妹の名を知ったのだ。

安積係長は、倉庫係の部屋にいるすべての者にでも聞かせるような大きな声でいった。
「君には、労働者としての意識がまるでないのかい？　我々は、明日の組合の緊急総会で、ストライキを決議しようとしているときに、それから逃げ出す気なのかい？」
「わたしに、急にまとまったお金の入り用ができたもんで」と私は、係長のまるで英雄のように突っ立っている姿に気をのまれながらもいった。「退職金をあてにするよりもう仕方がないもんですから」
「全く、君はどうかしてるよ！」と係長はいまや全く演説口調になっていた、「会社側が、我々組合の要求を頭から蹴って来た以上、我々のたたかいは相当長くかかると覚悟しなければならないときなんだ。そんなときに個人の退職金など、会社側がすぐ出してくれると思っているのかい。大体、資材課長なんか、今期から席にいやしないじゃないか。会社側が、課長連中を集めて、どこかで対策を協議していやがるにちがいないんだ。とにかくこんな辞職願を課長のところへもって行くことは、ぼくはお断りするね。いまや我々は、重役や課長連中とは、敵味方なんだからな。たとえぼくがこの辞職願に判を押してやっても、課長なんか、こんな書類なんかには眼もくれないで、未決の書類箱へ放り込んでおくだけだよ。大切なことは、我々は、いまはたたかわなければならないということなんだ！」
係長は、自分の演説に少しばかり興奮しすぎたようだった。彼は一度、椅子へ腰を下したが、そのまま落着なくうろうろ表へ出たかと思うと、思いついたように組合の事務所の方へ急ぎ足に去って行った。吉田は、係長の演説の間、だまって伝票を書いていたが、係長が組合事務所の方へ歩いて行くのを窓ごしに見ると、ひとりで嘲笑するように呟いていた。
「あの係長、早く課長にしてやればいいんだ。するとあんな演説、手の平をかえしたようにぴたりとやめてしまうにちがいないからな」
部屋の五人の係員は、だまっていた。一番年輩の男が、係長の机の前で途方にくれて立ちつくしていた私へ近付いてなぐさめるようにいった。
「斎藤君、いまの状勢じゃ、係長のいうように退職しても退職金はなかなかおりないぜ」
私は、その社員へ礼をいって隣りの部屋へ入った。そしていつものように倉庫係の部屋の人たちへ茶をくばるための薬缶をかけた。私は、ある絶望を感じながら、あらゆる事態がこうなってしまっては、彼女の医療を国へ引受けてもらうより仕方がないと考えていたのだ。
『明日とにかく福祉事務所へ行って、彼女の医療保護を頼んで見よう』と私は自分へ呟いていた、『彼女に強引な退院をさせて死なせてしまうようなことがあってはならないからな』

（つづく）

た。

が、私にも想像された。私は、おくれている彼女を待ちながらいった。

「何か食べるかい?」

するとと彼女は、当惑した顔になったまま、どちらとも返事をしないのだ。私は、初めて会った大人との食事は、気まずいのだろうと思って歩き出した。すると彼女は、そのまままたおくれ勝ちになりながら歩き出した。そのひょろ高い彼女から全く幼女の孤独というものが感じられて仕方がなかった。私は、思い直して、赤いのれんに商号を白く染め抜いた餅菓子や飲物を売っている店へ入った。ボックスになっている席もある小ぎれいな店だった。彼女は、私から席をしめされると、そこへすなおに腰を下した。私は、テーブルの向うの彼女へいった。

「何を食べる?」

彼女は、ふたたび当惑した顔になって、私の質問から逃れようとするように背を伸ばしただけだった。仕方なく私は、彼女のために大福を注文し、私はジュースを頼んだ。

「一昨日からアパートに来ているって、御飯どうしてるの?」と私はたずねた。

「パン、買って来る」と彼女はやっと答えた、「二階のおばさんにもらった、お金あるもん」

「ひとりであのアパートの部屋に?」

彼女は、当然そうに肯いた。しかしその彼女の顔色の艶は、まるでなかった。明らかに栄養不良なのだ。私は、余計な質問を重ねた。

「夜ひとりでこわくないかい」

彼女は、首を振った。それから弁解するように急いでいった。

「あさって、おかあさん、帰って来るもん」

「あさって?」と私は思わず聞き返した。

彼女は、だまって肯いた。私は、あるショックを受けていた。というのは入院の長びいた万一の場合にとわたしてあった二万円あまりの金を順子が平気でつかうことができたのは、強引に退院するつもりだったにちがいなかったことに気付いたからだ。そのためにも彼女は、自分の部屋を確保しておかなければならなかったし、しかも娘が帰って来ているのだ。

『やはり退職しよう』と私は自分の決心を再確認した、『あの身体で退院させるわけには行かないからな』

だが、次の瞬間、私は呆気にとられて空になった大福の皿を眺めていた。いつの間にか二個の大きな大福が、その皿から消えてなくなっていて、当の静子は、ふたたび所在なげな様子で近くのテーブルの人々を眺めていたからだ。むろん彼女は、どこかへかくしたのではなく食べてしまったのだ。私は、その素早さに驚嘆しながら、きっと腹でもへらしすぎているのだろうと思っていった。

「何か御飯のようなもの食べるかい?」

すると彼女は、かすかな恥じらいを見せながらも首を振った。私は、その恥じらいを貴重なもののように見逃さなかった。全く電車のなかでおしっこなんかできる幼女ではなかったのだ。私は、グラスに残っているジュースをあわててストローで吸い上げると、その店を出た。私は、都電のなかで彼女へたずねた。

「アパートへ帰って来るとき、お金をもっていたの?」

静子は首を振った。私は、おどろいてたずねた。

「あんな遠いところから歩いて来たの?」



読者の声

★ご投稿を歓迎します。
★薄謝を呈上します。
★住所、氏名、職業、年令をご明記ください。

孤独地獄のなかで

門外の人間ですが、佐古先生の〝連帯的人間〟を読んで、わたしのいまぶつかっている深い悩みに関連する問題だけに、先生の、今後の追究には非常な関心をもっています。

文中、紹介せられていた鈴木正久氏の「交わりにおける自由」は、ぜひ一読させていただこうと思っています。

それにしてもわたしたちが、エゴをはなれた愛、去私の生活を営むことができると仮定する場合でも、周囲における孤独の根源、不信状況の発生は、あいも変わらずついてまわりそうな気がいたしますが、そのときのキリスト者の姿勢は、イデオロギーの対立を超え、連帯的人間の根本前提の上に、明確に、積極的な姿勢が築かれているのでしょうか。

知的理解の広さや論理の信仰、(それに最近は、多数は力なりの思想が加わっている)それで自我をささえている現代人と、その中に生まれた否定者、孤独地獄者の止揚方向を、佐古先生はどのように示してくださるか。次号を期待いたします。

(名古屋市・中村宗信・大学職員 36才)

平和のため祈ろう

聖主の御名を讃美いたします。

さてきびしい暑さもいつかすぎさって、朝夕はだいぶ涼しくなってくらしよくなってまいりましたきょうこのごろ、『月刊キリスト』編集部の先生がた、いかがおくらしでいらっしゃいますか。小生本年一月より御誌毎月感謝しつつ拝読させていただいています。さて六月末のわたしどもの地方の水害のときは、いろいろ日赤をはじめ、キリスト教団体の皆さまにおたすけいただき、ほんとうにありがとうございました。心からお礼申しあげます。さて先日送られた御誌九月号の大阪市の川口姉の証しを読ませていただき、なんだかすっきりしない気持ちです。たしかに奇蹟は神さまがあたえてくださったことは、わたしも無条件で信じます。でもあのような表現の仕方は一考を要するべきではないでしょうか。あのような表現なら、新興宗教などでも用いられているようです。わたしどもはこの異教社会において、甘い考えであってはならないことを身にしみて感ずるのです。『月刊キリスト』の読者のみなさんのご批判をいただければ幸いと思いペンをとりました。おしまいに、世界もベルリンの危機やソビエトの核実験再開などで、危くなってきており、わたしどもはおたがいのいきがかりを水にながして、平和のために祈らなくてはならないと思います。

では、御誌の上に神さまの恵みが豊かにありますようにお祈りいたします。

(長野県・下伊那郡・玉井悦雄)

十字架愛の実践

六月号菊池先生の誌上説教、かんめい深く読みました。それにもまして、バタヤの生活記録、どん底の涙ぐましいキリスト者の生きるしんしな姿に、涙と共感をもって一気に読みました。宣教二世紀の伝道は、大衆の中にとびこんで身をもって無言の伝道を行なうわざこそが、十字架愛の実践だと痛感させられました。近来にない力強いキリスト者にはげまされ、主の道に勇気と確信を与えられたことを感謝します。

(東京都・台東区・浅野浩一)

拝見できた喜びを

はからずも家庭集会のおり、当家の教会員のかたにこの『月刊キリスト』を数冊拝見させていただき感激でした。いままで手軽に毎月読む本がなく、くだらぬ本ばかり見ておりましたが、これから毎月楽しみができました。わたしみたいなちっぽけなクリスチャンは、こういう本によって世間をひろめることができ、また、いろいろな過去を持つこの身にとってくるものがあり、たいへん楽しみに拝見できます。これから婦人会で回覧しようと相談しております。伝道の一助になることも確かなことと思います。編纂者諸氏のいっそうのご努力をお祈りいたします。末筆ながら赤岩栄先生の御名や、椎名氏が上原教会で受洗された記事を拝見したいへん懐しく思われました。もしこれが先生のお目に届いていましたら奥さまにも亡くなられた松谷憲臣先生の弟子(旧姓米村)が元気でおりますことをお知らせいたします。

(三鷹市・須永道子・南三鷹教会員・45才)

農村生活のなかから

『月刊キリスト』に励まされてはや一年半、喜びのときもまた苦しいときも主の恵みによって救われてきました。

農村生活もやっと自ら手に取ることができるようになりましたが、まだまだ未熟です。高校時代の知識も、じょうずに生活に生かして、明るい農村生活をしようと励んでおります。わからないことばかりなので通信講座などを利用してみたいと思っています。保母になりたいと思っていたのですが、自分のことだけ考えるわけにはいきません。町の教会へひまを見つけてはオルガンを習いに行きます。読者の皆さん、お便りください。

(北海道・雨竜郡・深川町・溝口朝子)

聖書に生きる重要さ

〝あるバタヤの生活記録〟を感動をもって読みました。

世より見離された存在にある最下層の人人の心の友となり、よき隣人となり、強い信仰に生きる清水さんの記録を通して感じたことは、わたしたち、ひとりひとりの労働者が、おのおの与えられた職場において神を証しすることと同時に、聖書に生きる重要さを知った。

職場で、学校で、ともに愛と尊敬との心で、人とものごとに近づかねばならないことも、聖書に生きること、信仰に立つということは、わたしたちの前に光があることを思うと、心強い思いだ。〝信仰・愛・希望〟の重要さと、たいせつな字句でもあると感じた。愛の心が、力がなければ、愛の行動がなければすべてがなりたたない。

最後に、清水さんはバタヤ全体の将来にひとすじの祈りをささげられているが、その希望と抱負を掲載してほしいと思います。それはバタヤに対しての〝愛〟と〝救い〟と同時に、世の人々にキリスト者としての切実な訴えでもあろうから。

(東京都・墨田区・竹利莫大小K・K内・小林四郎・工員・20才)

キリスト教読書月間行事

一〇月は、キリスト教読書月間にあたります。できるだけ多くの人が、できるだけ多くまた深く、キリスト教書を読むよう、運動を展開する月間です。

本事業部では、左の行事を行ないますので、愛読者の皆さまのご協力をお願いいたします。

講演会

◇札幌　10月8日夕　椎名麟三氏
連絡先・札幌ＹＭＣＡ
（電③一八九三）

◇仙台　10月25日夕　高木幹太氏
連絡先・仙台ＹＭＣＡ
（電②七五三三）

◇東京　11月6日夕　佐古純一郎氏
11月13日夕　椎名麟三氏
11月20日夕　北森嘉蔵氏
駿河台東京ＹＷＣＡにて
連絡先・本事業部
（電(561)五五四九）

◇名古屋　10月30日夕　佐古純一郎氏
11月6日夕　椎名麟三氏
11月13日夕　高木幹太氏
連絡先・名古屋ＹＭＣＡ
（電(32)一六四七）

◇京都　10月31日夕　佐古純一郎氏
11月7日夕　椎名麟三氏
11月14日夕　高木幹太氏
連絡先・京都ＹＭＣＡ
（電(23)四三八八）

◇大阪　11月1日夕　佐古純一郎氏
11月8日夕　椎名麟三氏
11月15日夕　高木幹太氏
連絡先・大阪ＹＭＣＡ
（電(44)〇八九二―六）

◇神戸　11月2日夕　佐古純一郎氏
11月9日夕　椎名麟三氏
11月16日夕　高木幹太氏
連絡先・神戸ＹＭＣＡ
（電③〇一二三）

◇姫路　11月10日夕　椎名麟三氏
連絡先・姫路ＹＭＣＡ
（電(22)六五一五）

◇徳島　10月9日夕　高木幹太氏
徳島クリスチャン・センターにて
（電②九二三二）

○『月刊キリスト』10月号または11月号ご持参のかたは、聴講料が半額になります。ただし、入場無料のところもあります。

『月刊キリスト』は、各都市の有名書店にあります。

○講演会終了後、『月刊キリスト』愛読者会を開きます。ただし、連続講演会の所は、最終日。

「読書のすすめ」無料配布

「小さなトラクト読書のすすめ」を希望の教会、団体に無料でさしあげます。教会で、学校で、文書伝道用に使ってください。

このトラクトには、子供向き、婦人向き、青年向き、求道者向き、教会役員向きの良書が紹介してあります。

希望部数をはがきで、本事業部まで申しこんでください。

書評募集

キリスト教読書月間（今年は一〇月一日―三一日）にあたり左記の要領にて、読者各位から書評を募集します。ふるって、御応募くださいますよう、御願い申し上げます。

1、**対象の書籍・雑誌は**、左の出版社の今年一月以降の刊行物に限ります。日本基督教団出版部、日本基督教協議会・文書事業部、新教出版社、教文館、聖文舎、キリスト新聞社、ＹＭＣＡ同盟出版部

2、**原稿は本文一〇〇〇字以内**

3、**当選作品五篇にたいして**は、各社の書物が買える**図書券**（一〇〇〇円分）を贈呈。

4、**締切日は一〇月一〇日。**

5、**発表は、**『興文』一一月号、『キリスト新聞』など。

東京都中央区銀座四ノ二
日本基督教協議会文書事業部

山上の教え

講解と座談会

石島三郎編著

山上の教えはイエスの教えのうち最もポピュラーなものであります。しかしそれはわかり切ったものとして、抵抗なく私たちに受取られるものではない。多くの人々が山上の教えを愛読しつつも、これにつまずきこれを誤解して来た。本書は石島氏の平易な聖書講解を第一部とし、第二部に月刊“キリスト”に連載好評を得た11の座談会を収めた点、山上の教えの最も身近な入門書である。

新書 200頁
価200円〒30



聖書の世界

信徒みんなで読み合う聖書研究誌

9月号特集　万人祭司
第1ペテロ2・1－11

1. 祭司の国　大宮チヱ子
2. 万人祭司　倉松　功
3. 祭司としての信徒　井上良彦
4. 座談会・祭司としての生活（大阪にて）

対談　幼児洗礼は聖書的か
松村秀一・岡本不二夫

価５０円〒６円

日毎の糧

36年10月～12月

全信徒一人一冊
家庭、職場、病院での
聖書通読と礼拝の手引

ガラテヤ
三和磐夫

ヤコブ
吉岡　勝

ヨハネ伝
西原　勇

Ａ６・96頁
価40円〒20円



東京都中央区銀座４の２　日本基督教団出版部　振替東京 188329

編集後記

◇「宣教の秋」を迎えました。恐らく、愛読者の皆さんも、伝道に励んでおられることと思います。本誌も「読書の秋」「宣教の秋」に、大いにお役にたちたいと願っています。

◇一〇月は、キリスト教読書月間にあたりますので、その記念行事を、当事業部では、行ないます。七四ページに、講演会、書評募集などの記事が出ておりますので、ご参照ください。今年は、去年より、少し多くの都市で講演会が開けます。椎名先生、佐古先生、北森先生、高木先生にご足労を願うことになりました。また、各地のYMCA、キリスト教連合会が、協力をしてくださることになっています。愛読者の皆さまは、ぜひ、ご出席くださるよう、また、講演会の後の愛読者会で、意見を述べてくださいますようお願いいたします。

◇今月は、期せずして、平和の問題に、多くのスペースを割くことになりました。ベルリン危機が高まり、核実験が再開された今、平和は、わたしたちの最大の関心事の一つとなりつつあります。キリスト者の中にも、いろいろ立場の違いがあるようですが、ともに平和のために祈り、かつ、行動したいと思います。

◇今月から来月にかけて、童話を書いてくださるのは、推理小説で活躍しておられる仁木悦子さんです。童話の方は、本名の大井三重子というお名まえですが……。近く、大井さんの童話集が出版されるそうです。

◇「聖句をめぐる座談会」は、今年はじめて、地方で開きました。長野県の上田新参町教会の皆さんです。「真実を語れ」という聖句を中心に生活体験に即した、さまざまの「小さな証し」がとび出して、時の経つのを忘れるほどでした。

◇「信仰に生きる」には、女流舞踊家として高名な、花柳二葉さんに、ご登場願いました。花柳さんは、昨年、創作舞踊「マグダラのマリヤ」を上演して絶讃を博したかたです。

◇今月の表紙の絵は、「エリヤの昇天」です。旧約聖書列王紀略下の二章一―一四をご覧ください。

◇「読者の証し」へのご投稿をお待ちしています。今月号のように平凡な教会生活の一コマでも、いいのです。真実に生きるキリスト者の声が、聞きたいのです。

11月号・予告

＜巻頭随想＞
今泉真幸、興梠正敏、榊原千代

＜伝道説教＞（三崎町教会牧師） **山北多喜彦**

待降節（アドベント）のことば **深津文雄**

現代夫婦論 **高見沢潤子**

＜わが信仰の生涯＞（白洋舎創立者） **五十嵐健治**

＜信仰に生きる11＞
傷つける者よ、ここに泉あり
―傷病兵と生きる一女性の心―

＜キリスト教のいろは＞
信じて生きること　島村亀鶴

＜聖句をめぐる座談会＞
盗むということ　（司会）石島三郎

＜恋愛論＞
続・不安と情熱　高木幹太

＜童話＞
タックバウエル博士とおさな友だち　大井三重子

＜現代のカルテ＞
スポーツ狂時代、週刊誌ラッシュ、テレビ攻勢、観光ブーム

＜社会を見る目＞
核実験の再会　**白井慶吉　武藤富男　松尾喜代司**

原爆の傷は今もうずく　**佐古純一郎**

＜小説＞
夜警番の日記　椎名麟三

＜表紙絵＞ 藤城清治　＜カット＞ 山中春雄

月刊キリスト

昭和三六年九月二五日 印刷
昭和三六年十月一日 発行

編集人　高戸要
発行人　浜崎次郎
発行所　**日本基督教協議会 文書事業部**
東京都中央区銀座四ノ二
振替 口座・東京一一六七九
電話(561)六一三一・八四四六
発売所　**教文館**
東京都中央区銀座四ノ二
毎日新聞販売店
東京都中央区有楽町一ノ二
印刷所　株式会社 恒陽社印刷所

直接、ご購読になりたいかたは、発行所まで、お申しこみください。

一部　六〇円（〒六円）
半年　三六〇円（〒共）
一年　七〇〇円（〒共）
三弗（海外）

KIRISUTO The Christian Home Journal.
Vol. 13. No. 10 October 1961
Japan Commission on Christian Literature Tokyo

昭和二十四年二月三日 第三種郵便物認可
昭和三十六年十月一日発行(毎月一回一日発行)
月刊 キリスト
十月号
定価 六〇円
NCC文書事業部

装いの 目立つときです



白洋舎のクリーニング

本社・渋谷区大向通28
TEL.(461)1131
全国 13 支店

株式会社 クリーニング 白洋舎

日本橋 三越



三越のまごころを象徴する
「天女(まごころ)像」
佐藤玄々先生作 ●本店1階中央ホール

●受けて重宝 三越の商品券

お買物上手は
ご家庭の幸福



IBM 2879

製版・印刷・恒陽社